茨木市文化財資料集　第 78 集
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第308集

太田遺跡
太田遺跡・太田城跡 1

茨 木 市 教 育 委 員 会
公益財団法人 大阪府文化財センター

1．太田遺跡 2019 －4　東半部第３面全景（北から）

2．太田遺跡・太田城跡 2019 －1　第１面全景（南から）

序　　文

わたしたちが暮らす茨木市は、北部は北摂山系が、南部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境のもと、古来より数多くの歴史が育まれてきました。

文化施設の充実をはじめ、安心・安全なまちづくりをめざして発展をとげた本市は、交通の利便性や京都・大阪間という立地の良さも手伝い大規模な開発も少なくありません。昨今の時勢のなか、開発にともなう埋蔵文化財の調査件数は全国的に減少しているのに対し、本市では緩やかながら増加の傾向をみせています。

本書は、令和元年度に城の前町で実施した発掘調査の成果報告書です。太田城の推定地に立地する今回の調査地では、弥生時代から近世に至るこの地に根ざした人びとの歴史が克明に残っていました。市街地化が進む周辺では数少ない大規模調査の実例として、広く活用されることを願ってやみません。

調査の実施にあたりましては、土地所有者、施工関係者、調査関係者、近隣住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育庁ならびに公益財団法人大阪府文化財センターの諸機関には、ご指導と格別のご協力をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できました。これらのご協力に感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

令和3年3月31日

茨木市教育委員会
教育長　岡田祐一

はしがき

大阪府北東部に位置する茨木市は、標高 300 m前後の北摂山地や丘陵部および沖積平野の三島平野からなり、市内にある遺跡の多くはこの平野部およびその周辺で確認されています。調査地のすぐそばには、古墳時代中期の大型前方後円墳である太田茶臼山古墳、7 世紀後半に創建されたと考えられる太田廃寺跡、古代の官道である山陽道といった茨木市を代表する遺跡が点在します。

太田遺跡は、これまで茨木市教育委員会や大阪府教育庁が数次にわたる調査を実施しており、弥生時代から古墳時代に至る集落や墳墓を確認しています。今回の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての河川跡がみつかり、周辺地域の開発過程で重要な役割を果たしていたことが明らかとなりました。本書がより多くの市民の皆さまに広く活用されるとともに、当地に生きた先人たちの知恵や工夫がつまった貴重な文化財を、未来に伝えることができれば幸いです。

最後となりましたが、今回の調査において地元関係各位をはじめ三井不動産レジデンシャル株式会社・野村不動産株式会社 関西支社・イオンタウン株式会社、大阪府教育庁ならびに茨木市教育委員会より多大なるご指導とご協力をいただきました。深く感謝いたしますとともに、今後とも当センターの事業に変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和3年3月31日

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長　坂　井　秀　弥

例　　言

1．本書は、茨木市城の前町（東芝大阪工場跡地）開発にともない実施した、大阪府茨木市城の前町地内所在の太田遺跡・太田城跡の発掘調査報告書である。調査番号は「太田遺跡 2019 － 4」および「太田遺跡・太田城跡 2019 － 1」である。

2．発掘調査は、株式会社島田組の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、茨木市教育委員会と共同で実施した。遺物整理および本書の編集は公益財団法人大阪府文化財センターが行い、令和２年７月 13 日までにすべての資料を茨木市に引き渡した。本書編集後の印刷・製本は茨木市教育委員会が行い、令和３年３月 31 日に本書の刊行をもって完了した。

3．契約名称・契約期間は以下のとおりである。

【契約名称】茨木市城の前町（東芝大阪工場跡地）開発 共同住宅建設に伴う太田遺跡発掘調査

【契約期間】令和元年５月１日～令和２年１月 31 日

【契約名称】東芝大阪工場跡地開発 店舗建設に伴う太田遺跡・太田城跡発掘調査

【契約期間】令和元年８月１日～令和２年４月 30 日

4．現地調査および整理作業は以下の体制で実施した。

【茨木市教育委員会】

〔令和元年度〕

茨木市教育委員会教育総務部歴史文化財課長　木下典子

課長代理兼調査管理係長　前田聡志、調査管理係　坂田典彦

〔令和２年度〕

茨木市教育委員会教育総務部歴史文化財課長　木下典子

課長代理兼調査管理係長　前田聡志、調査管理係　坂田典彦

【公益財団法人大阪府文化財センター】

〔令和元年度〕

事務局次長兼調整課長　岡本茂史、調査課長　岡戸哲紀、調査課長補佐　佐伯博光

副主査　若林幸子

〔令和２年度〕

事務局次長兼調整課長　岡本茂史、調査課長　岡戸哲紀、調査課長補佐　佐伯博光

副主査　若林幸子

5．遺構の写真撮影は若林が、遺物の写真撮影は中部調査事務所写真室が行った。

6．本書の執筆は、第１章第１・２節を坂田が、それ以外を若林が担当した。編集は若林が行った。

7．本調査に関わる遺物および写真・実測図等の記録類は、すべて茨木市教育委員会が保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．標高については、すべて東京湾平均海面（T.P.）＋値を使用し、m 単位で表している。なお、本書ではすべての図において、T.P. ＋の記載を省略している。
2．本書に掲載した挿図の座標は、世界測地系（測地成果 2000）によって測量し、国土座標法による平面直角座標系第Ⅵ系で示している。表記は m 単位である。
3．本書で用いた北は、いずれも平面直角座標系第Ⅵ系の座標北を示す。なお座標北は真北より西へ約０°14′、磁北より西へ約７°18′偏移する。
4．現地調査および遺物整理は、財団法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠することを基本とし、適宜、茨木市教育委員会と調整をはかりながら進めた。
5．土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007 年度版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6．遺構番号は、各調査区において遺構の種類に関わらず調査において検出した順に 1 から始まる通し番号を付し、番号の後に遺構種類を表記した。また、溝出土遺物のうち出土状況図を作成したものに対しても、遺構の通し番号を付し、その後ろに遺物の種類を付すことで、平面図にそれぞれの出土位置を示した。
7．遺構図のうち個別遺構の平面図および断面図の掲載縮尺は二十分の一を基本とし、必要に応じて縮尺を使い分けた。縮尺は各図にスケールを配置して明記している。
8．遺物実測図の縮尺は、土器・土製品は四分の一、石器は二分の一、木製品は八分の一を基本とし、状況に応じて四分の一も用いた。縮尺は各図にスケールを配置して明記している。
9．遺構の規模は基本的に㎝単位で記し、数 m 規模のものは例外とした。
10. 遺物の実測図は、須恵器の断面を黒塗りとし、それら以外はすべて白抜きとした。
11. 土器の実測図において、残存口径や底径が四分の一以下の破片の場合、口縁ないし底部の線を二重線で切って表現している。
12. 遺物番号は、挿図・写真図版とも一致する通し番号を付した。
13. 出土遺物の記述においては、以下の文献を参考にした。

・森田克行　1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ　木耳社
・森岡秀人・西村歩編　2006『古式土師器の年代学』 財団法人大阪府文化財センター
・宮崎泰史・藤永正明編　2006『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40　大阪府立近つ飛鳥博物館
・中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社
・平尾政幸　2019「土器再考」『洛史　研究紀要』第 12 号

目　　次

巻頭図版

序文・はしがき

例言・凡例

目次

第１章　調査に至る経緯と経過…… 1

第１節　調査に至る経緯……（坂田）… 1

第２節　既往の調査成果…… 2

第３節　調査成果の公開……（若林）… 4

第２章　遺跡の位置と環境 …… 5

第１節　遺跡の位置と地理的環境…… 5

第２節　歴史的環境…… 7

第３章　調査・整理の方法 …… 10

第４章　太田遺跡 2019 － 4 の発掘調査成果 …… 13

第１節　基本層序と調査の概要…… 13

第２節　第１面の調査成果…… 16

第３節　第２面の調査成果…… 28

第４節　第３面の調査成果…… 31

第５節　遺物の詳細…… 51

第６節　小結…… 60

第５章　太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 の発掘調査成果 …… 61

第１節　基本層序と調査の概要…… 61

第２節　第１面の調査成果…… 62

第３節　第２面の調査成果…… 79

第４節　遺物の詳細…… 81

第５節　小結…… 83

第６章　総括 …… 84

遺物観察表

写真図版

報告書抄録・奥付

巻頭図版目次

巻頭図版　1．太田遺跡 2019－4　東半部第３面全景（北から）
2．太田遺跡・太田城跡 2019－1　第１面全景（南から）

挿 図 目 次

図1　太田遺跡位置 …… 1
図2　今回の調査区と既往調査区位置 …… 3
図3　茨木市域地質 …… 6
図4　太田遺跡周辺遺跡分布 …… 9
図5　今回の調査区と既往の調査区の第Ⅰ～Ⅲ区画 …… 11
図6　今回の調査区の第Ⅳ区画 …… 12
図7　東壁土層断面（1） …… 15
図8　東壁土層断面（2） …… 17・18
図9　北壁土層断面 …… 19・20
図10　南壁土層断面 …… 21・22
図11　第１面　平面 …… 23
図12　第１面　部分平面 …… 24
図13　第１面　落込み・土坑平断面 …… 25
図14　第１面　竹・杭列配置 …… 26
図15　第2面　平面 …… 29
図16　第2面　３板材検出状況 …… 30
図17　第３面　平面 …… 32
図18　第３面　部分平面 …… 33
図19　第３面　部分平面 …… 34
図20　第３面　等高線 …… 35
図21　第３面　ピット平断面（1） …… 36
図22　第３面　ピット平断面（2） …… 38
図23　第３面　土坑平断面（1） …… 39
図24　第３面　土坑平断面（2） …… 40
図25　第３面　４石列検出状況 …… 41
図26　第３面　溝平断面（1） …… 42
図27　第３面　溝平断面（2） …… 43
図28　第３面　溝平断面（3） …… 45
図29　第３面　溝平断面（4） …… 47
図30　第３面　溝平断面（5） …… 48
図31　第３面　溝平断面（6） …… 49
図32　第３面　溝平断面（7） …… 50
図33　太田遺跡 2019－4出土遺物（1） …… 52

図34　太田遺跡2019－4出土遺物（2）…… 55
図35　太田遺跡2019－4出土遺物（3）…… 57
図36　太田遺跡2019－4出土遺物（4）…… 58
図37　東壁土層断面…… 63・64
図38　南壁土層断面…… 65・66
図39　第1面　平面…… 67
図40　溝平断面…… 69
図41　土坑平断面…… 70
図42　土坑平断面…… 71
図43　ピット平断面…… 74
図44　2落込み・石垣平立面…… 75
図45　2落込み断面…… 76
図46　第2面　平面（1）…… 78
図47　第2面　平面（2）…… 79
図48　第2面　遺構平断面…… 80
図49　太田遺跡・太田城跡2019－1出土遺物…… 81
図50　太田遺跡・太田城跡とその周辺の地形概観…… 85
図51　太田遺跡・太田城跡変遷（1）…… 87
図52　太田遺跡・太田城跡変遷（2）…… 89

挿入写真

写真1　太田遺跡2019－4現地公開風景…… 4
写真2　太田遺跡・太田城跡2019－1現地公開風景…… 4

表目次

表1　太田遺跡2019－4出土遺物観察（1）
表2　太田遺跡2019－4出土遺物観察（2）
表3　太田遺跡2019－4出土遺物観察（3）
表4　太田遺跡・太田城跡2019－1出土遺物観察

写真図版目次

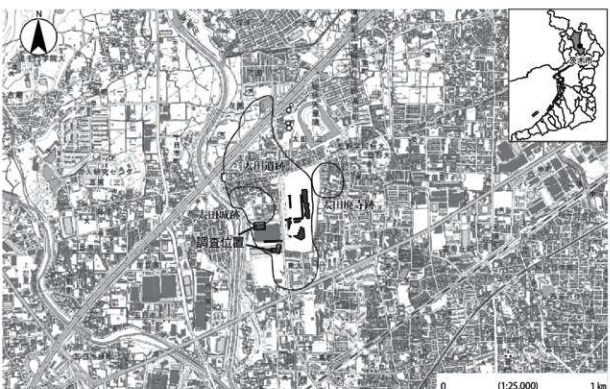
写真図版１　遺構（太田遺跡 2019－４）
１．東半部第１面全景（北から）
２．西半部第１面全景（西から）
３．２土坑木桶検出状況（西から）
４．１落込み断面（南西から）
５．２土坑断面（西から）
写真図版２　遺構（太田遺跡 2019－４）
１．東半部第３面全景（北から）
２．西半部第３面全景（北西から）
写真図版３　遺構（太田遺跡 2019－４）
１．南壁断面（北東から）
２．３板材出土状況（北西から）
３．６ピット遺物出土状況（南から）
４．８溝内９土器出土状況（西から）
５．19 溝断面（南から）
写真図版４　遺構（太田遺跡・太田城跡 2019－１）
１．第１面全景（南西から）
２．第１面全景（東から）
写真図版５　遺構（太田遺跡・太田城跡 2019－１）
１．第１面全景（南から）
２．第２面検出状況（南西から）
写真図版６　遺構（太田遺跡・太田城跡 2019－１）
１．２落込み石垣西半部検出状況（南東から）
２．２落込み石垣東半部検出状況（南西から）
３．２落込み全景（南西から）
４．４土坑断面（南から）
５．３土坑断面（南から）
６．14 土坑完掘状況（北から）
７．17 溝完掘状況（西から）
８．18 ピット断面（西から）
写真図版７　遺物（太田遺跡 2019－４）
写真図版８　遺物（太田遺跡 2019－４）
写真図版９　遺物（太田遺跡 2019－４）
写真図版 10　遺物（太田遺跡 2019－４）
写真図版 11　遺物（太田遺跡 2019－４）
写真図版 12　遺物（太田遺跡 2019－４）
写真図版 13　遺物（太田遺跡 2019－４）
写真図版 14　遺物（太田遺跡 2019－４）
写真図版 15　遺物（太田遺跡 2019－４）
写真図版 16　遺物（太田遺跡 2019－４）
写真図版 17　遺物（太田遺跡・太田城跡 2019－１）
写真図版 18　遺物（太田遺跡・太田城跡 2019－１）

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

大阪府茨木市城の前町の東芝家電製造株式会社大阪工場（以下、東芝大阪工場と略す）西側跡地にて２件の埋蔵文化財発掘の届出が提出された。一つは、南半部を占める開発面積約 18,000㎡の土地において、共同住宅２棟の新築計画があがり、事業主である三井不動産レジデンシャル株式会社・野村不動産株式会社より平成 30 年 11 月 22 日付けで提出された（茨教歴第 50 － 190 号）。もう一つは、北半部の開発面積約 30,000㎡の土地において、大型商業施設の新築工事に先立ち、事業主であるイオンタウン株式会社より平成 31 年２月 28 日付けで提出された（茨教歴第 50 － 268 号）。茨木市教育委員会は前年度に実施した確認調査データを参照し、本発掘調査の計画および行程表の作成に着手した。

事前協議および調整会議を重ねる中、前年度に茨木市と公益財団法人大阪府文化財センターで実施した同東芝大阪工場跡地内の発掘調査〔茨木市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター 2020〕に連続するものであることと、本件の調査規模はもとより本市における当時の調査体制では発掘調査の実施が困難と判断し、大阪府教育委員会教育長宛でこの２件について調査の協力を依頼した（茨教歴第 1702 号・平成 30 年 11 月 28 日付け、茨教歴第 2343 号・平成 31 年３月５日付け）。これに対し、大阪府教育庁より公益財団法人 大阪府文化財センターが協力する旨の回答を得た（教文第 2750 号・平成 30 年 12 月３日付け、教文第 3413 号・平成 31 年３月 12 日付け）。そこで、当該２件の実施に関して、必要な事項を定め、適正かつ円滑な発掘調査をはかることを目的とした協定書の作成に着手し



国土地理院発行 50000 分の１地形図「大阪東南部」に加筆

図１　太田遺跡位置

た。協定書は、発掘調査ごとに上記した事業主、茨木市教育委員会、公益財団法人大阪府文化財センター、株式会社 島田組の五者及び四者の間で締結した。以上の経緯を経て、共同住宅用地の発掘調査を令和元年５月７日～７月31日の期間で実施し（調査番号：太田遺跡 2019 － 4）、続いて大型商業施設の調査を令和元年８月１日～ 10 月 31 日の期間で行った（調査番号：太田遺跡・太田城跡 2019 － 1）。整理作業および報告書作成については、発掘調査終了後から開始した。

第２節　既往の調査成果

今回の調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である太田遺跡、太田城跡に位置し、指呼の間にある太田茶臼山古墳（継体天皇三島藍野陵）との間に太田北遺跡や太田廃寺跡が、そして近くを西国街道が東西に走行する。

今回の調査地である東芝大阪工場用地内では、これまでにいくつかの調査（試掘・立会・確認・本発掘）が実施されており、前掲書〔茨木市教育委員会・公益財団法人 大阪府文化財センター 2020〕で詳述したため、城の前地区の既往調査に絞って列挙するとともに平成 30 年２月～３月に実施した確認調査の概要を記すことで本節の責を果たすものとしたい。なお、ここでは年度表記ではなく調査実施年で記述する。まず、昭和 62 年７月、西側用地南西隅（城の前町 600 番 11 および 12）にて、倉庫（第３茨木倉庫）の建設にともない試掘調査を行ったところ、埋蔵文化財は認められなかった。この結果は本報告の共同住宅の確認調査と同様、すぐ西側を流下する安威川の影響、そして水田開発時、その後の工場用地造成の土地改変を多分に受けているものと判断してよい。次に昭和 63 年７月には、先の昭和 62 年調査地点から 100 mほど北で事務所の建設に際して基礎工事時に立会調査を行っており、確認深度は不詳であるが埋蔵文化財は確認されなかった。

平成に入って、平成 15 年 10 月には西側用地北西部にて、既存倉庫の増築にともない現地表面から 1.5 mまで確認し、基礎の到達深度までは盛土ないし攪乱であった。

平成 30 年２月～３月に本書２件の計画にともない、確認調査を実施した。トレンチの数は、南側の住宅用地では共同住宅２棟と立体駐車場の計画範囲において 14 箇所、北側の大型店舗用地では４箇所に加えて、壺掘りのトレンチでは見極めのできなかった範囲に、30 mのトレンチ１本を設定した。トレンチ形状と規模は原則壺掘りで行い、遺構面もしくは基盤層までが５mを超えることが予測された南側では、一辺 12 ～ 13 m四方で設定した。

結果、南側用地の東半部において弥生時代以降の古土壌および遺構面が認められた。現在の安威川に近い西半部では、４mほどの盛土の下に中世以降と推測される耕作土が遺存し、さらにその下に砂礫層および砂礫混じりシルトが観察され、本発掘調査の対象となる埋蔵文化財は認められなかった。

一方、北側の商業用地では、南へと舌状に張り出してきた微高地の縁辺部にあたり（図２･50 参照）、現地表面高から２m以内で砂礫層を主体とする基盤層が認められ、この上面で溝または土坑状の落込みを検出した。層中からは土師器・瓦器・須恵器の他、石鍋片が出土しており、同一遺構面上に複数時期の遺構があることが予測された。本発掘調査の範囲は、これら確認調査で得たデータを基に埋蔵文化財が遺存していると判断される範囲で設定した。

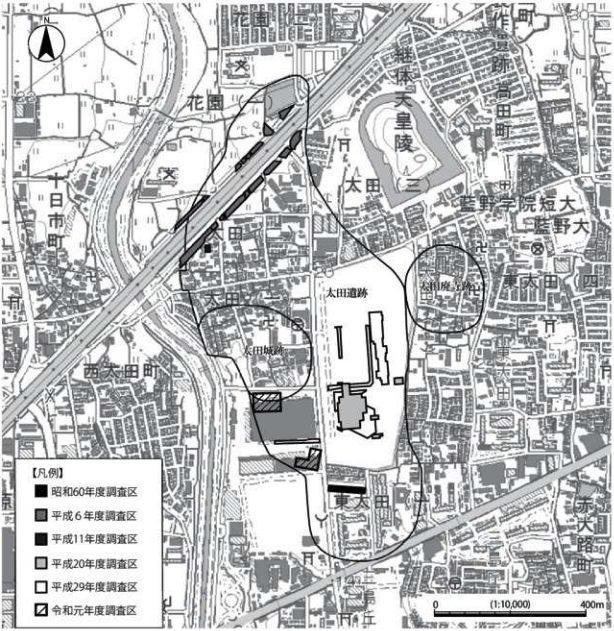


図2　今回の調査区と既往調査区位置

参考文献

・茨木市教育委員会　1986『太田遺跡発掘調査概要』

・茨木市教育委員会　1998『茨木の史跡』

・茨木市教育委員会　2000『大阪府茨木市平成 11 年度発掘調査概報』

・茨木市教育委員会　2015『太田遺跡発掘調査概報』茨木市文化財資料集第 61 集

・茨木市教育委員会・公益財団法人 大阪府文化財センター　2020『太田遺跡・太田廃寺跡　太田遺跡・太田城跡 1』茨木市 文化財資料集第 73 集、公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 302 集

第３節　調査成果の公開

発掘調査の過程で、文化財調査の目的ならびに必要性を市民に理解していただくことを目的とし、調査現場の公開を２回にわたって実施した。いずれの公開も、茨木市立太田公民館で行われた令和元年度郷土史講座としての側面もあり、主な参加者は地元住民の方々である。現地公開においては調査区際に安全柵を設置したうえで、参加者は現地表面から遺構面を見下ろす形で見学を実施した。このような措置をとったのは、現地表面と遺構面の比高が３m以上におよび、仮設階段での多人数の昇降には危険性がともなうと判断したからである。あわせて調査区のそばで遺物展示も行った。

１回目の公開は太田遺跡 2019 － 4 調査地において、令和元年７月 20 日に行った。太田公民館が地元住民へ回覧板で周知したのに加え、晴天に恵まれたこともあり 60 名の参加があった。作成した資料をもとに、検出した遺構から当時の環境をどのように復元できるかを説明した。遺物展示スペースでは、今回の調査区で出土した接合途中の遺物を展示し、接合作業の体験をしていただくとともに、平成 20 年度の調査区で出土した円筒埴輪を展示した。

２回目の公開は太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 調査地において、令和元年 10 月 19 日に行った。早朝に降った雨が止んではいたものの、曇天の空模様だったにもかかわらず、34 人の参加者を得ることができた。調査区の南辺から主要な遺構をみていただきながら、遺構の検出状況から推測しうる可能性等を説明した。前回の公開と同様に調査区のそばに展示スペースを設け、平成 20 年度の調査で出土した形象埴輪や古墳時代の土器等を展示した。

いずれの公開も、地域の歴史に対する市民の関心の高さに改めて気づかされる機会となった。前述の公開とは別に、教育機関と連携した普及活動も実施した。10 月 21 日に茨木高等学校２学年の学生８名が見学に訪れた際には、遺構・遺物を示しながら、今回の調査でわかったことや、考古学的な分析手法について説明した。

文化財ならびに発掘調査の必要性や地域に対する理解を深めながら、文化財に親しみを感じていただけるよう、今後もこうした活動を継続していけるよう、努力したいと考える。

写真１　太田遺跡 2019 － 4 現地公開風景

写真２　太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 現地公開風景

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

茨木市域は南北に長く、北部の山地帯から平野部にむけて、東から順に安威川・佐保川・茨木川・勝尾寺川が流下する。これらの河川に直交するように、三つの主要な断層帯である箕面断層・馬場断層、そして真上断層が形成する有馬高槻構造線が、北から順に北東－南西方向に走る。これらの断層帯のうち、最も南に位置する有馬高槻構造線を基準にして、市域が北部と南部に大きく二区分されることが多いのは、これを介して南と北とで地形・地質が大きく分かれ、必然的に土地利用や景観にも違いが生じてきたからである。

市域北部は標高 300m 前後の北摂山地と、そこから派生する丘陵部からなり、茨木複合花崗岩体の周辺に超丹波帯または丹波帯の堆積岩（山下層・高槻層）が分布する。それに対して市域南部は、北半部に標高 50 ～ 100m 前後の洪積層の隆起地形の一つである千里丘陵および富田丘陵の裾がのび、南北方向中軸線上から東南域にかけての部分は先述の河川や淀川によって形成された沖積層からなる三島平野が広がる。

このような観点から言えば、現行の町名で花園一丁目、太田一・二丁目、太田東芝町、城の前町、東太田一丁目にかけての範囲を東西約 0.6km、南北約 1.3km にわたって占める太田遺跡の立地は、市域南部の北東端でかつ、安威川流域左岸に面する位置とすることができる。

先述の３本の断層帯には、それに沿って明瞭な断層谷が認められる。そのうち、有馬高槻構造線に沿って形成された断層谷は、平野部に接しているのに加えて、その規模や延長距離が長いことから、東西を結ぶ主要交通路として利用されてきた。

一方、先述の河川流域のうち安威川水系は、茨木市と亀岡市の市境に近い地点からさらに上流へ、柏原川を経て西方へ転じ、西別院町万願寺付近を経て北西に抜ける流路の河床勾配が、他の河川流域と比べて最も均一かつなだらかであることから、水運機能も兼ね備えた北へ抜ける主要ルートの一つとしての役割を果たしてきた。

それら東西方向と南北方向の主要交通路が交わる地点に位置する、太田・総持寺・郡・安威・阿武野一帯は、茨木市域のなかでも特に、交通の要所としての重要度が高い地点として、機能してきた歴史的側面が注目される。

なお、今回の調査地である太田遺跡 2019 － 4 と太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 では、地山としてことなる土層の上面を検出した。太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 の調査地では円礫を多量に含む砂層を主とし、部分的にその下層の粘質土層の上面を検出したのに対し、太田遺跡 2019 － 4 では、有機物を含まない河川堆積層とみられる細～中砂層を検出した。円礫を多量に含む砂層は、高槻市にまたがる低位段丘を構成する富田礫層で、太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 は富田台地の西側縁に位置すると言える。一方、太田遺跡 2019 － 4 の調査区で地山とした河川堆積層は、埋没低位段丘を覆う安威川旧河道の堆積物と考えることができる。

参考文献

茨木市史編纂委員会　2012『新修茨木市史』第１巻通史Ⅰ

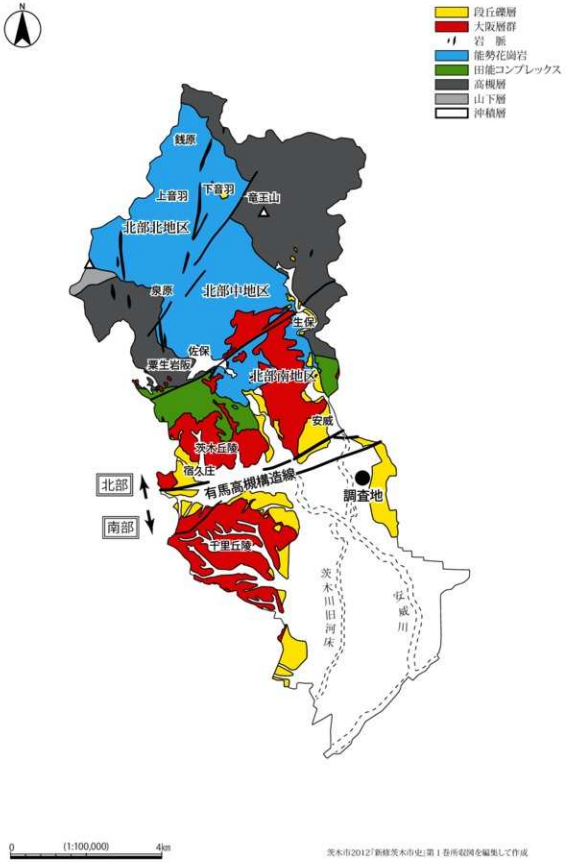

N
段丘礫層
大阪層群
岩　脈
能勢花崗岩
田能コンプレックス
高槻層
山下層
沖積層
銭原
上音羽
下音羽
竜王山
北部北地区
泉原
北部中地区
生保
佐保
粟生岩脈
北部南地区
安威
茨木丘陵
宿久庄
有馬高槻構造線
調査地
北部
南部
千里丘陵
茨木川旧河床
佐保川
0
(1:100,000)
4km
茨木市2012「新修茨木市史」第1巻所収図を編集して作成

図3　茨木市域地質

第２節　歴史的環境

旧石器時代の遺物は、太田遺跡や安威遺跡・耳原遺跡・郡遺跡で出土している。茨木市域全体でみても、安威川中流域において旧石器時代遺物の出土例が多い傾向が認められるが、いずれも二次的な出土で、明確な生活痕跡を示す当該期の遺構・遺物は未検出である。

縄文時代は晩期以降に集落遺跡が増加する傾向がみられる。当該期の遺跡には五日市東遺跡や牟礼遺跡・耳原遺跡・倍賀遺跡があるが、それらの遺跡からは弥生時代前期の遺構もしくは遺物が検出される傾向がある。当該期の遺跡は低位段丘上に位置する耳原遺跡を除くと、沖積地に位置していることから、水田耕作を基調とする生産活動に移行してからも、適応しやすい集落立地だったためと考えられる。

弥生時代に入ると東奈良遺跡のように、モノや技術の集中がみられる拠点的な集落が、沖積地に新たに現れる。水が得やすく、水田造成や灌漑施設の配置にも益するところが多かったためとみられるが、そのような観点からすると太田遺跡や耳原遺跡で、弥生時代前期の遺物が検出されているのは例外的である。弥生時代中期になると遺跡数はさらに増えるとともに、総持寺・郡遺跡のように低位段丘縁辺部にも居住域が拡大する様子がみてとれる。特に、近年の郡遺跡・倍賀遺跡の大規模調査では、160 基を超える方形周溝墓がみつかっており、当該期集落の様相を捉えるうえで注目される。また中河原遺跡においても、弥生時代中期初頭から後期にかけての墓域が検出されている。弥生時代後期になると低位段丘縁辺部でさらに集落が増加する傾向が認められ、太田遺跡においても２箇所に当該期の集落域が認められる。

古墳時代前期には安威川を挟んで対岸の中位段丘上に将軍山古墳が築造される。古墳時代中期には三島地域最大の前方後円墳である全長約 226m の太田茶臼山古墳が築かれる。その北側に位置する太田石山古墳や、安威川を挟んだ対岸の丘陵上に位置する安威古墳群は、太田茶臼山古墳に先行して築かれたものである。総持寺遺跡でみつかった小規模古墳 43 基は、初期群集墳の一つと目されている。当該期の集落遺跡としては竪穴建物がまとまって検出され、畿内でも早い時期の渡来系集落として知られる安威遺跡がある他、太田遺跡・総持寺遺跡でも居住域が確認されている。古墳時代後期には太田遺跡北端部の独立丘陵状の高まりで当該期の古墳の埋葬施設が複数調査されているが、それに関連する集落居住域の動向は現在のところ不明である。

律令制下では当該地は摂津国島下郡藍郷に含まれる。太田は中臣氏の根拠地の一つに数えられ、『新選姓氏録』には「中臣藍連」・「中臣太田連」の名がみえる。太田遺跡の東側に隣接する太田廃寺跡は舎利容器一具を備えた塔心礎が発見されたことで知られる。舎利容器は石櫃の中に銅鋺を安置し、その中に銀製合子、さらにその内部に金製合子をおさめ、おそらくそこに舎利が入れられていたと考えられる。伽藍配置は不明だが、出土した軒丸瓦・軒平瓦から、創建時期は７世紀半ばまでさかのぼると考えられている。太田廃寺跡の北側を東西に直線的に通る西国街道は、古代山陽道を下敷きとしていると考えられており、中河原北遺跡でみつかった幅６m の道路痕跡はそれに相当すると考えられている。総持寺遺跡では飛鳥時代から平安時代にかけての建物跡が 200 棟以上発見され、硯・墨書土器・石製巡方・圏足円面硯・磚等が出土した。その北側に隣接する総持寺北遺跡では、飛鳥時代から鎌倉時代の建物群を中心とする遺構が多数検出され、烏帽子が出土している。平安時代前期に創建されたとされる総持寺は、藤原朝臣山蔭による建立で、西国三十三所観音霊場の第二十二番札所として有名な寺院である。これらのことから、当該地が古代から中世にわたって地域の拠点だったことがうかがえる。

平安時代には造酒司領太田保という荘園が文献にみられ、太田とその周辺では酒や酢等の醸造用の米が生産されていたことがわかる。12 世紀後半の文献では、摂津国での 149 石余の徴収量のうち約半分は太田保からの米だったと言う。

中世の大道である山陽道が太田のそばを通っており、太田に旅籠があったことが文献からもうかがえる。中世の平城については現存例がきわめて少ないこともあり不明な点が多いが、交通の要衝地であることが立地条件の中でも高位を占めるとみられることから、この地に太田城が築かれたという伝承には高い必然性が感じられる。太田城は中世にこの地域に根差していた太田氏の居城である。平安時代末ごろに、源満仲の二男頼親の流れをくむ大和源氏の一派が摂津国太田に定着し、頼資（頼助）もしくは頼基から太田を名乗ったとされる。中世に成立した複数の資料に、源頼朝と対立して西走をはかった源義経を文治元年（1185）に太田氏が迎え撃ったことが記述されていることから、平安時代末葉（12 世紀末葉）には太田氏の城館が存在していたと推測されている。

太田城がいつまで存続していたかは現在のところ判然としないが、大永 7 年（1527）正月に細川高国と細川晴元との抗争があった際、「太田城」もその渦中にあったことを示す記述が「細川両家記」に登場することから、少なくとも 16 世紀前葉の段階にはまだ太田城が存続していたとみられる。

参考文献

- 茨木市史編纂委員会　1969『茨木市史』
- 茨木市教育委員会　1986『太田遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会　1995『総持寺遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会　1997『総持寺遺跡発掘調査概要Ⅱ』
- 財団法人 大阪府文化財調査研究センター　1998『総持寺遺跡』財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 30 集
- 大阪府教育委員会　2000『安威遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 1999－6
- 財団法人 大阪府文化財センター　2004『総持寺遺跡Ⅱ』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 117 集
- 大阪府教育委員会　2006『安威遺跡・安威城跡発掘調査概要』
- 名神高速道路内遺跡調査会　2008『太田遺跡発掘調査報告書』
- 茨木市史編さん委員会　2012『新修茨木市史　第 1 巻』通史Ⅰ
- 大阪府教育委員会　2014『安威城跡Ⅲ』大阪府埋蔵文化財調査報告 2014－4
- 公益財団法人 大阪府文化財センター　2014『総持寺遺跡 3』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 250 集
- 茨木市教育委員会　2015『太田遺跡発掘調査概報』
- 公益財団法人 大阪府文化財センター　2017『総持寺遺跡 4』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 280 集
- 笹栗拓　2020「摂津・河内における大型前方後円墳の築造と周辺集落」『地域研究に基づく古墳時代の集落構造と社会』考古学研究会第 10 回関西例会シンポジウム発表要旨集
- 茨木市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター　2020『太田遺跡・太田廃寺跡　太田遺跡・太田城跡 1』

図４　太田遺跡周辺遺跡分布

第３章　調査・整理の方法

今回の調査地はかつての東芝大阪工場のうち、茨木市道東太田一丁目花園二丁目線の西側の工場用地に含まれる。市道に直交する道より南側の調査地を「太田遺跡 2019 － 4 」、北側の調査地を「太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 」とした。発掘調査は、財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』（以下、「マニュアル」とする）に準拠し、機械掘削、人力掘削の順で実施した。機械掘削は 0.8㎥のバックホウを使用し、遺物包含層の掘削や遺構検出は人力で行った。調査中は随時、茨木市教育委員会歴史文化財課に指示を仰ぎ、調査完了時には立会を受けた。

人力掘削の過程においては遺構面の測量、調査区・遺構断面等の実測、遺構面や遺構等の写真撮影を行った。測量はラジコンヘリコプターによる空中写真測量を基本とし、必要に応じてトータルステーションと電子平板を用いてデジタル測量を実施した。具体的にはデジタルカメラで撮影した写真をもとに SFM 技術を用いて 3D モデルを作成し、「遺構くん」（株式会社 CUBIC 社製）を使用して平面直角座標系Ⅵ系に基づいた座標値と、縮尺を付与したオルソ画像に変換し、適宜トレースを行った。

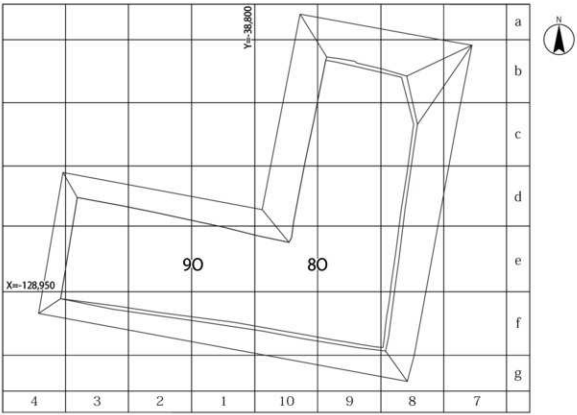
写真媒体は基本的にニコン社製 D610 を使用し、報告書への掲載を想定したものについては、６×７白黒・リバーサルフィルムを用いた撮影も行った。デジタルカメラにおける写真データの保存形式は RAW と JPEG の２種類とした。出土遺物は遺構ないし包含層ごとに適宜取り上げ、遺跡名・地区名・層名・遺構名・出土年月日・登録番号等を記した当センター所定のラベルを添付した。

測量や遺物の取り上げの基本となる地区割は、世界測地系に準拠する平面直角座標系第Ⅵ系を基準とし、大阪府全域を共通の方式で位置を示すことができるように大小４段階の区画を設定した（図５）。第Ⅰ区画は大阪府南西端 X ＝－ 192,000、Y ＝－ 88,000 を基準とし、縦６km、横８km ごとの基準線で区画し、縦軸をＡ～Ｏ、横軸を０～８で表示したものである。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を縦 1.5km、横 2.0km でそれぞれ区分し、計 16 区画を設定し、南西端を１、南東端を４として北東端を 16 とする。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を 100m 単位で縦 15、横 20 に区画したもので、北東端を起点に縦軸がＡ～Ｏ、横軸が０～ 20 となる。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を 10m 単位で縦、横各 10 区画したもので、縦軸がａ～ｊ、横軸が１～ 10 となる。本調査においては第Ⅳ区画を最小区画とした。

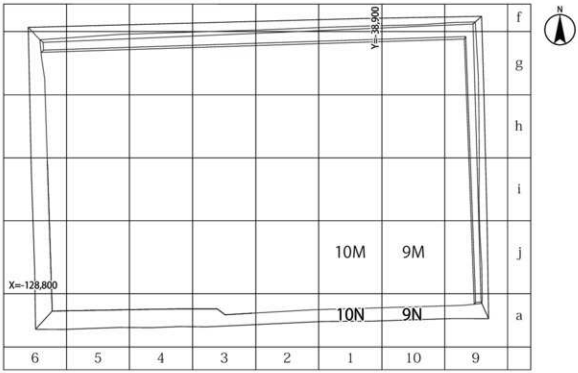
出土遺物は調査現場において洗浄し、乾燥後に注記を行った。注記は太田遺跡 2019 － 4 調査では「オオダー 2019 － 4 －登録番号」、太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 調査では「オオダ・オオダジョウ－ 2019 － 1 －登録番号」とした。洗浄・注記が終了した遺物は、登録番号ごとに袋に詰め、コンテナへ収納した。実測・撮影対象遺物は必要に応じて接合・復元した。遺物実測図は、スキャナおよびアドビ社の PhotoshopCS5 を用いてデジタルデータ化し、アドビ社の IllustratorCS5 を用いて実測図面の浄書を行った。調査現場において作成した図面も IllustratorCS5 を用いて編集した。

調査現場で撮影した写真のうち、６×７白黒・リバーサルフィルムは現像後、報告書の写真図版に掲載するものはデジタルデータ化した。写真のデジタルデータ化・遺物撮影は、当センター中部調査事務所写真室にて行った。出土遺物や実測遺物は、Excel を用いてそれぞれに台帳を作成した。調査現場で撮影したフィルムは所定のアルバム類に収納するとともに、写真台帳を作成した。写真台帳には調査現場においてデジタルカメラで撮影した画像に加え、写し込みラベルの情報、前述した各フィルムの収納情報を記入した。

図5　今回の調査区と既往の調査区の第Ⅰ～Ⅲ区画



太田遺跡2019－４



太田遺跡・太田城跡2019－１

図６　今回の調査区の第Ⅳ区画

第４章　太田遺跡 2019 － 4 の発掘調査成果

第１節　基本層序と調査の概要

調査地とその周辺は現在おおむね平坦だが、これは戦後に東芝大阪工場建設に先立って行われた大規模な造成によるもので、旧地表面は現地表から４m以上低く、旧地形では当調査区の北側や茨木市道東太田一丁目花園２丁目線東側にむけて標高が高くなっていた。標高が高い部分は、北摂地域を広く占める富田台地の西端部分にあたっている。図４に示される太田遺跡の範囲は、地形的にみると富田台地の縁辺部とその斜面、さらにはそれに連なる斜面際の平地部分が含まれる。

調査範囲は発掘調査に先立って行われた確認調査によって遺物包蔵地と認められた範囲で、共同住宅の建設にともなう建物の基礎構造の建設にともなって破壊がおよぶと予想された部分である。前述したとおり、戦後の造成で４m以上の高さで地盤がかさあげされており、発掘調査の過程で発生した土砂を現在の地表面までベルトコンベヤーで運びあげるのには、危険と非常な労力を要することが予想された。そのため、発掘調査は法面を大きく取り、平面形が逆Ｌ字形の調査区の屈曲部で分割してすすめた。

最終遺構面の基盤層はその土質や堆積状況から、安威川の旧流路に堆積した流水堆積層と考えられる。当調査区を走っていた河川が埋積するとともに流路が移動した後は、安威川の後背湿地となったとみられる。その後も当地は安威川旧流路もしくはその支流の堆積作用を受け、古墳時代後期以降は堆積作用は沈静化し、しばらくは水はけの悪い状態が続いたと考えられる。太田一帯の基幹水路が整い、現在のように安威川の流路が西側に寄ってからは、水はけの悪さは改善されていったと考えられる。それに加えて、当地より下流では近世以降もしばしば起こった安威川の氾濫等の影響は受けにくい環境下にあったため、耕作地としての利用が近代に至るまで安定的に続けられた。

微地形的には細かい起伏が各所に存在し、部分的には氾濫堆積物等が残存するものの、概して隣接する調査区で観察された土層堆積状況とは近似すると考えられる。特に当調査区と太田遺跡・太田城跡 2017 － 1 調査の１区とは位置的に近接しており、両調査区における土層の堆積状況も基本的に共通すると考えた。そのため今回の発掘調査に際しては、太田遺跡・太田城跡 2017 － 1 の調査担当者の意見も聞きながら基本層序の把握に努めた。

基本層序の設定にあたり、土壌化・作土化している層をａ層、その母材となった堆積層をｂ層とし、各層の堆積状況と微地形の変化の把握に努めた。本調査では、近世から現代にかけての耕作土層を第１ａ層とし、以下、堆積単位ごとに順次層名を付した。なお、本報告においては便宜上「a」の記載を省略している。例示すると第６ａ層は第６層である。設定した基本層序は以下のとおりである。なお土層堆積状況の観察・記録は、調査区の南側壁・東側壁・北側壁を対象として行った（図７～ 10）。

盛土層　東芝大阪工場建設および解体にともなうと考えられる盛土ならびに造成土層である。

第１層　東芝大阪工場建設直前まで営まれていた耕作土層である。近世から現代にかけての時期である。

第２層　近世の耕作土層である。遺物の含有量は少なく、主体は近世の磁器である。

第３層　中世の耕作土層で、第１面の基盤層である。遺物の主体は中世の土器で、若干古代の土器が混じる。

第４層　弥生時代後期から中世にかけての遺物を含む土壌化層で、第２面の基盤層である。遺物の主体は古墳時代から古代にかけての土器である。土壌化の度合いは弱く、当地が後背湿地の状態の際に堆積した層がもとになっていると考える。

第５層　弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物を含む土壌化層で、第２面の基盤層である。土壌化の度合いは第４層よりさらに弱く、粘性が強い。第４層と同様、後背湿地の状態の際に堆積した層がもとになっていると考える。今回の調査では最も多量の遺物を含んでいた層である。特に層の上部よりも下部に多くの土器が混入していた。出土遺物の主体は弥生時代後期から古墳時代前期の土器だが、古墳時代後期の遺物を若干含む。

第６層　弥生時代後期から古墳時代の遺物を含む微～細砂からなる弱い土壌化層である。土壌化の度合いはきわめて弱く、母材となった流水性堆積層の特徴を明確に残す。弥生時代後期から古墳時代初頭までの時期の土器が主体を占める。

第７層　自然堆積層である。本調査の最終遺構面である第３面の基盤層である。流水堆積層の特徴を有しており、安威川の旧河道の埋積土層と考えられる。

盛土層は真砂土を主体とする礫混りの層で、元の地形の高低差をならすために投入・転圧されたものである。富田台地を造成した際に生じた土砂が混入しているとみられ、層厚は４mにおよぶ。

第１層は灰色もしくは黄灰色の粘質細砂～微砂である。層厚はおおむね 30 ～ 50㎝で、４層に細分できる。東壁断面に、北から南にむけて第１層上面が階段状に数段下がるのは、北から南に傾斜する地形に即して作られた近世以降の耕作地の地割を踏襲した結果と考えられる。最下段は第２層の時期の段差を埋めるような状態で堆積している。南壁断面には、安威川が越流した際に耕作地を覆った土砂を埋めるために掘ったとみられる土坑の痕跡（図 10 － 30）があることから、安威川の氾濫堆積物を用いて耕地のかさあげをはかった時期があったことがうかがえる。

第２層は灰色もしくは褐灰色の粘質微砂～シルトで、層厚は厚いところで 30 ～ 40㎝、薄いところでは 20㎝以下である。東壁断面に、北から南にむけて第２層上面が階段状に一段下がるのは、第１層と同様、北から南に傾斜する地形に即して設けられた棚田の地割に関連するとみられる。

第３層は土壌化層とその母材となったｂ層からなり、それぞれ２層に細分できる。調査区のほぼ全域でその分布を認めたが、土壌化層は調査区の北西端部では認められなかった。第３層上面を第１面として、水溜状の土坑や、竹・杭列を検出した。土壌化層は、かつての後背湿地が耕作地として継続的に利用される端緒となる時期に形成されたものと考えられる。灰褐色の粘質シルト層で、層厚は 10 ～ 20㎝である。第３ｂ層は止水性堆積層とみられる褐灰色の粘質シルト層で、層厚は 20㎝前後である。粒度の細かい粘性の強い土壌で、耕地化するにあたり、砂を投入して土壌改良がはかられたと考える。

第４層は止水性堆積層とみられる黒褐色のシルト混粘質微～細砂で、層厚はおおむね 20 ～ 30㎝である。調査区の西半部にはおよんでいない。

第５層は褐灰色のシルト混粘質微～細砂で、層厚は 10㎝前後である。その上面を第２面として調査した。調査の結果、当地が居住域・生産域として積極的に利用された痕跡は認めなかったが、近くに集落が存在し、人々の往来があった可能性がうかがえた。調査区のほぼ全域でその分布を認めたが、調査区の西側にむけて徐々に厚みを減じ、南西端部では検出しなかった。また層厚 10㎝未満の第５ｂ層が、調査区南半部を中心に分布するのを認めた。第５ｂ層はにぶい黄橙色の細～中砂で、ラミナが認められた。このことから第５層は、調査区とその周辺に安威川の旧流路がおよんでいた最終段階に堆積した流

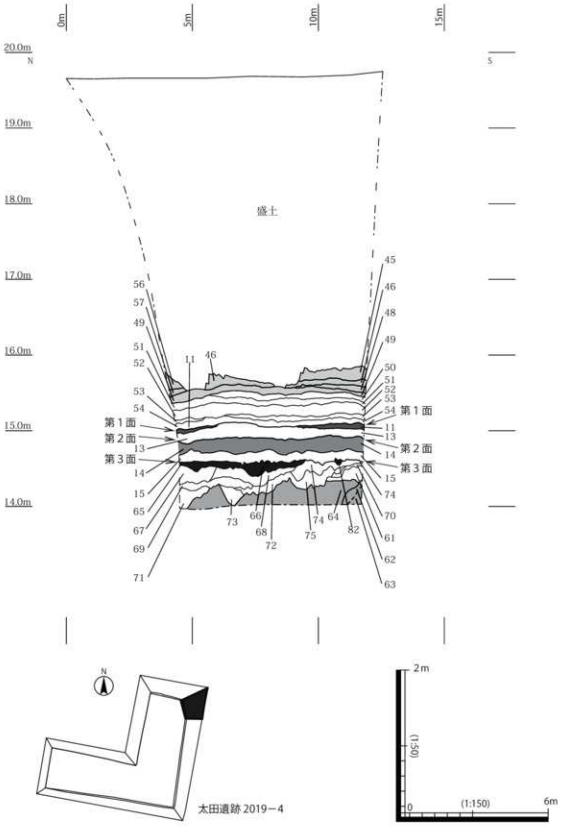

0m
5m
10m
15m
20.0m
19.0m
18.0m
17.0m
16.0m
15.0m
14.0m
N
S
盛土
第１面
第２面
第３面
太田遺跡 2019－4
2m
(1:50)
0
(1:150)
6m

図７　東壁土層断面（１）

水堆積層を母材として形成されたと考える。今回の調査では、第５層下面から第５b 層上部にかけての部分で最も多量の土器を検出した。

第６層はにぶい黄橙色の砂質細～中砂で層厚はきわめて薄く、調査区の北端部で部分的に検出したのみである。微細な植物遺体を多量に含むことから、安威川旧流路の影響が小さくなった一時期に、地表面化した部分に形成された土層と考える。

第７層は青灰色の細砂が主体となる層で、最終遺構面である第３面の基盤層である。第３面の調査後、重機を用いて第７層をトレンチ状に１m強掘り下げたが、遺構・遺物は検出しなかった。流水堆積層の特徴であるラミナが顕著にみられたものの、湧水が顕著で危険だったため、写真のみで記録した。これらのことから第７層は、安威川の旧流路に堆積した土層であることがわかる。

第２節　第１面の調査成果

重機により、主に東芝大阪工場建設にともなって敷設された盛土と、近世の耕作土を除去した段階で検出した遺構面である。遺構面の標高は 14.6 ～ 15.1m で、おおむね平坦な印象を受けるが、北東から南北方向に長いトレンチ部分では、北東から南西にかけて、東西方向に長いトレンチ部分では西から東にむけて徐々に標高が下がり、トレンチ中央の屈曲部分がゆるやかにくぼむ。第１面では土坑・落込み・竹列・杭列を検出した。

第１項　遺構

１落込みは最大幅 4.2 m、最大長 11.5 mの南北方向に細長い土坑である。深さは 10㎝前後ときわめて浅く、底部は平坦で標高はほぼ一定する傾向がみられた。平面形は不整形だが、ほぼ南北方向を指向する。埋土は第１面の基盤層である第３層に比べ、細砂の混入量が多くて粘性がやや弱く、土中の鉄分の酸化により赤味を帯びる。基本層序の項でも述べたように、当調査区は中世以来、耕作地として使用されたと考えられるが、元の土壌がきわめて砂粒が細かく粘性が強いことから、土壌改良がはかられたと考えられる。これらのことを勘案すると１落込みは、土壌改良や天地返し等にともなって形成された、広い意味での耕起痕ととらえることができるかもしれない。

出土遺物は図 33 －１～３・５の他、土師器片が 15 点、須恵器片が４点、瓦器片が３点である。土師器には中世以降の皿の破片が３点含まれており、そのうちの２点は図 33 －２とほぼ同じ時期のものではないかと考える。出土遺物のうち、時期の判別が可能なものは 11 世紀後半までだが、瓦器片が含まれていることから、14 世紀を下限とする時期の遺物が含まれていると考えられる。いずれも細片で摩滅が著しく、遺構が埋没する過程で混入したものとみられる。

２土坑は第１面の標高が最も低い、調査区中央部で検出した。平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形で、東側側壁がほぼ直立するのに対し、西側の側壁が階段状に立ち上がる。土坑最深部の中央部分に直径１m 強の木桶が据えられていた。木桶は土坑が 20 ～ 30㎝埋まった段階で据えられたものである。ただ、土坑埋土にはおおむね地山の土や、第３層に似た土がブロック状に混入することから、徐々に埋まったとは考えにくく、土坑を掘り上げた後、あまり時間をおかずに埋められたものと考えられる。おそらく木桶を水平に据えるため、掘り上げた土を敷きならした後に木桶を設置したと考えられる。

一方、木桶内の埋土には地山等のブロック土はなかった。また木桶内部の埋土には、直径 15㎝前後

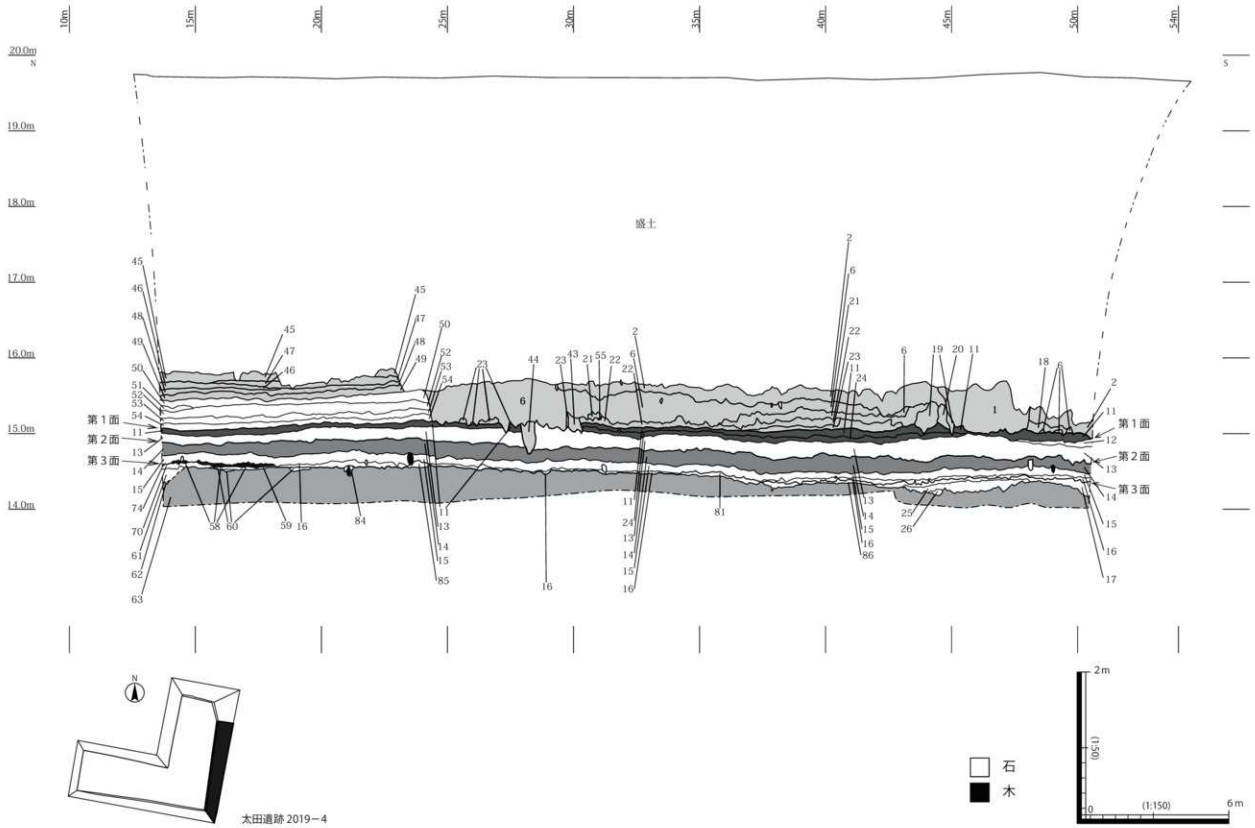
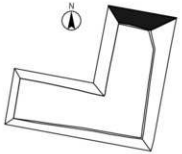
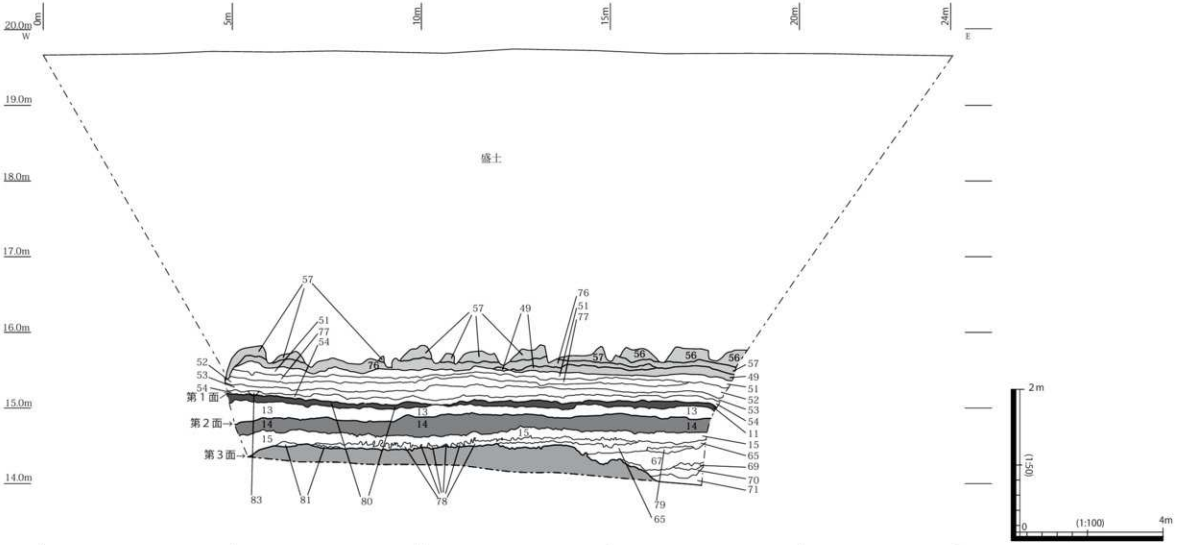

10m
15m
20m
25m
30m
35m
40m
45m
50m
54m
20.0m
19.0m
18.0m
17.0m
16.0m
15.0m
14.0m
N
S
盛土
第1面
第2面
第3面
石
木
2m
(1:50)
0
(1:150)
6m
太田遺跡 2019－4

図８　東壁土層断面（２）





1	10Y5/1	灰色	細砂混粘質中～砂	（φ10cm大の円礫含む。）	現代の整地層	第1層
2	7.5Y5/1	灰色	中砂混粘質細砂	（φ5～10cm大の円礫含む。）	現代の整地層	第1層
3	N6/0	灰色	中～細砂混粘質シルト		現代の耕作土	第1層
4	10Y6/1	灰色	中～細砂混粘質シルト(3より若干粘性強。)		近世～近代の耕作土	第1層
5	5Y6/1	灰色	シルト混粘質細砂		近世～近代の耕作土	第1層
6	2.5Y6/1	黄灰色	シルト混粘質細砂		近世～近代の整地層	第1層
7	2.5Y6/2	灰黄色	シルト混粘質細砂		近世～近代の耕作土	第1層
8	10GY6/1	緑灰色	中砂混粘質シルト		近世の耕作土	第2層
9	10YR6/2	灰黄褐色	細砂混粘質シルト		近世の耕作土	第2層
10	10YR5/1	褐灰色	シルト混粘質微～細砂		近世の耕作土	第2層
11	7.5YR5/2	灰褐色	微～細砂混粘質シルト		中世の耕作土	第3層
12	7.5YR4/1	褐灰色	微～中砂混粘質シルト(13に似るが若干土壌化する。止水性堆積層)		古代～中世の遺物包含層	第3ｂ層
13	7.5YR4/1	褐灰色	微～細砂混粘質シルト(粘性強い。止水性堆積層)		古代～中世の遺物包含層	第3ｂ層
14	7.5YR3/1	黑褐色	シルト混粘質微～細砂(13に似るが13より粘性低い。)		古代～弥生の遺物包含層	第4層
15	10YR4/1	褐灰色	シルト混粘質微～細砂(14に似るが14より砂の含有量多い。)		古代～弥生の遺物包含層	第5層
16	10YR7/2	にぶい黄橙色	微砂混細～中砂	（若干ラミナあり。）		第5ｂ層
17	7.5YR5/1	褐灰色	中砂混粘質微～細砂（青灰色粘質細砂ブロック含む。）		5溝理土	
18	2.5Y5/1	黄灰色	小礫混粘質細砂		近世～近代の耕作土	第1層
19	2.5Y6/1	黄灰色	シルト混粘質細砂	（φ5～10cmの円礫含む。）	近世～近代の耕作土	第1層
20	10YR5/1	褐灰色	シルト混粘質細砂		近世～近代の耕作土	第1層
21	N5/0	灰色	細～中砂混粘質微砂		近世～近代の耕作土	第1層
22	10YR6/1	褐灰色	シルト混粘質細砂	（23に似るが23より粘土の含有量多い。）	近世～近代の耕作土	第1層
23	10YR6/2	灰黄褐色	シルト混粘質細砂	（若干炭化物含む。）	近世～近代の耕作土	第1層
24	7.5YR4/1	褐灰色	細～中砂混粘質シルト(13に似るが若干土壌化している。)		中世の耕作土	第3層
25	7.5Y6/1	灰色	粘質微砂～細砂	ラミナ(植物遺体含む。)	5溝理土	
26	10YR7/2	にぶい黄橙色	細砂混粘質微砂		5溝理土	
27	2.5Y6/2	灰黄色	中砂混粘質微砂	（φ5cm以下の円礫を若干含む。）		第1層
28	10YR6/3	にぶい黄橙色	微砂混粘質細～中砂	（φ10cm以下の円礫を多量に含む。）		第1層
29	2.5Y6/1	黄灰色	細砂混粘質微砂		現代の耕作土	第1層
30	10YR7/4	にぶい黄橙色	粗砂混砂質細砂	（φ1～5cmの円礫含む。）	災害復旧土坑	第1層
31	2.5Y5/1	黄灰色	中～細砂混粘質シルト(4に似るが4より若干黒色化する。)		近世～近代の耕作土	第1層
32	10YR6/2	灰黄褐色	微砂混粘質細砂		近世の耕作土	第2層
33	7.5YR6/1	褐灰色	細～中砂混粘質シルト		近世の耕作土	第2層
34	10YR5/1	褐灰色	細砂混粘質微砂	（炭化物含み黑色化する。）	8溝理土	
35	5B6/1	青灰色	微砂混粘質細砂	（36に似るが36より若干土壌化する。）	地山	第7層
36	5B7/1	明青灰色	微砂混粘質細砂		地山	第7層
37	5Y6/1	灰色	細砂混粘質微砂	（炭化物を若干含み、わずかに黑色化する。）	5溝理土	
38	7.5Y7/1	灰白色	微砂混粘質細砂	（わずかに炭化物を含む。）	5溝理土	
39	N6/0	灰色	細砂混粘質微砂	（植物遺体、微小な炭化物含む。遺物含有層。）	7溝理土	
40	N7/0	灰白色	粘質細～微砂	（ラミナあり。植物遺体含む。）	7溝理土	
41	2.5Y5/1	黄灰色	細砂混粘質細砂	（地山の緑灰色細砂ブロック含む。）	7溝理土	
42	7.5YR4/1	褐灰色	中砂混粘質細砂		弥生～古代の遺物包含層	第5層
43	10YR7/6	明黄褐色	中～粗砂混粘質シルト	（φ10cm以下の礫含む。）	近世～近代の整地層	第1層
44	7.5YR6/1	褐灰色	細砂混粘質シルト	（φ15cm以下の円礫含む。）	近世～近代の土坑埋土	第1層
45	2.5Y4/1	黄灰色	細砂混粘質微砂		現代の耕作土	第1層
46	5Y4/1	灰色	中砂混粘質細砂		近世～近代の耕作土	第1層
47	2.5Y5/1	黄灰色	細砂混粘質微砂	（45に似るが45より土壌化弱い。）	近世～近代の耕作土	第1層
48	5Y4/1	灰色	細砂混粘質微砂	（47に似るが47より粘性弱い。）	近世～近代の耕作土	第1層
49	N6/0	灰色	細～中砂混粘質微砂	（若干炭化物含む。）	近世～近代の耕作土	第1層
50	7.5Y6/1	灰色	細～中砂混粘質微砂	（49に似るが49より粘性弱い。）	近世の耕作土	第2層
51	10Y6/1	灰色	細砂混粘質微砂	（50に似るが50より土壌化弱い。）	近世の耕作土	第2層
52	10GY6/1	緑灰色	シルト混粘質微砂		近世の耕作土	第2層
53	5Y6/1	灰色	シルト混粘質微砂		近世の耕作土	第2層
54	2.5Y6/1	黄灰色	細砂混粘質シルト		近世の耕作土	第2層
55	2.5Y5/2	暗灰黄色	粗砂～小礫混粘質細砂	（23の土がブロック状に混入する。）	近世の耕作土	第2層
56	10YR4/1	褐灰色	中砂混粘質細砂		近世～近代の耕作土	第1層
57	10YR6/1	褐灰色	中砂混粘質細砂		近世～近代の耕作土	第1層
58	7.5YR5/1	褐灰色	微砂混粘質細砂	（炭化物と植物遺体を多く含む。）		第6層
59	10YR6/2	灰黄褐色	中砂混砂質細砂	（小礫・炭化物含む。）		第6層
60	10YR5/1	褐灰色	微砂混粘質細砂	（炭化物が若干混じる。）	19溝理土	
61	N7/0	灰白色	細砂混砂質微砂	（56白色細砂が斑状に混入する。）	19溝理土	
62	N6/0	灰色	砂質微～細砂	（下部になるほど粗粒化する。）	地山	第7層
63	10Y7/1	灰白色	微～細砂混砂質細砂	（微細な植物遺体が混入する。）	地山	第7層
64	7.5YR6/1	褐灰色	細砂混砂質粘砂	（小礫・白然木含む。）	地山	第7層
65	10YR4/1	褐灰色	粗砂混砂質微砂	（褐灰色細砂が斑状に混入する。）	19溝理土	
66	10YR5/1	褐灰色	粗砂混砂質微砂	（65に似るが、65より土壌化弱い。）	19溝理土	
67	7.5YR5/1	褐灰色	粗砂～小礫混粘質細砂	（微細な植物遺体含む。）	19溝理土	
68	7.5YR6/1	褐灰色	粗砂～小礫混粘質細砂	（67に似るが、67より粘性低い。）	19溝理土	
69	10YR6/1	褐灰色	微砂混粘質細～中砂	（褐灰色粘質微砂ブロック含む。）	19溝理土	
70	7.5YR5/1	褐灰色	細砂混砂質微砂	（小礫と微細な植物遺体含む。）	19溝理土	
71	7.5YR6/1	褐灰色	細砂混粘質微砂	（70に似るが、70より土壌化弱い。）	19溝理土	
72	10YR4/1	褐灰色	微砂混粘質細～中砂	（側方ほど粗粒化する。）	19溝理土	
73	10YR6/2	灰黄褐色	細砂混粘質微砂		19溝理土	
74	7.5YR4/1	褐灰色	細砂混粘質微砂	（φ2cm以下の円礫含む。）	19溝理土	
75	7.5YR5/1	褐灰色	微細砂混粘質細砂	（φ3cm以下の円礫と白然木含む。）	19溝理土	
76	10YR5/1	褐灰色	微砂混粘質細砂	（小礫含む。）	近～現代の耕作土	第1層
77	10BG5/1	青灰色	細砂混粘質細砂	（小礫含む。）	近世の耕作土	第2層
78	10YR6/2	灰黄褐色	微砂混粘質細砂		19溝理土	
79	10YR5/1	褐灰色	微砂混砂質細砂	（ラミナあり。微細な植物遺体含む。）	19溝理土	
80	7.5YR5/1	褐灰色	細砂混粘質シルト	（若干小礫含む。）		第3層
81	7.5YR6/1	褐灰色	細砂混砂質微砂		21溝理土	
82	10YR6/3	にぶい黄橙色	微砂混砂質細～中砂	（微細な植物遺体と黄灰色粘質微砂ブロック含む。）		第6層
83	10YR5/2	灰黄褐色	細～中砂混粘質微砂	（若干炭化物含む。）		第2層
84	2.5Y6/2	灰黄色	微砂混砂質細砂		12溝理土	
85	7.5YR7/2	明褐灰色	中砂混砂質細砂	（植物遺体・炭化物含む。）	24溝理土	
86	10YR6/2	灰黄褐色	粗砂混粘質微砂	（明緑灰色粘質微砂ブロック含む。）	42溝理土	

図9　北壁土層断面

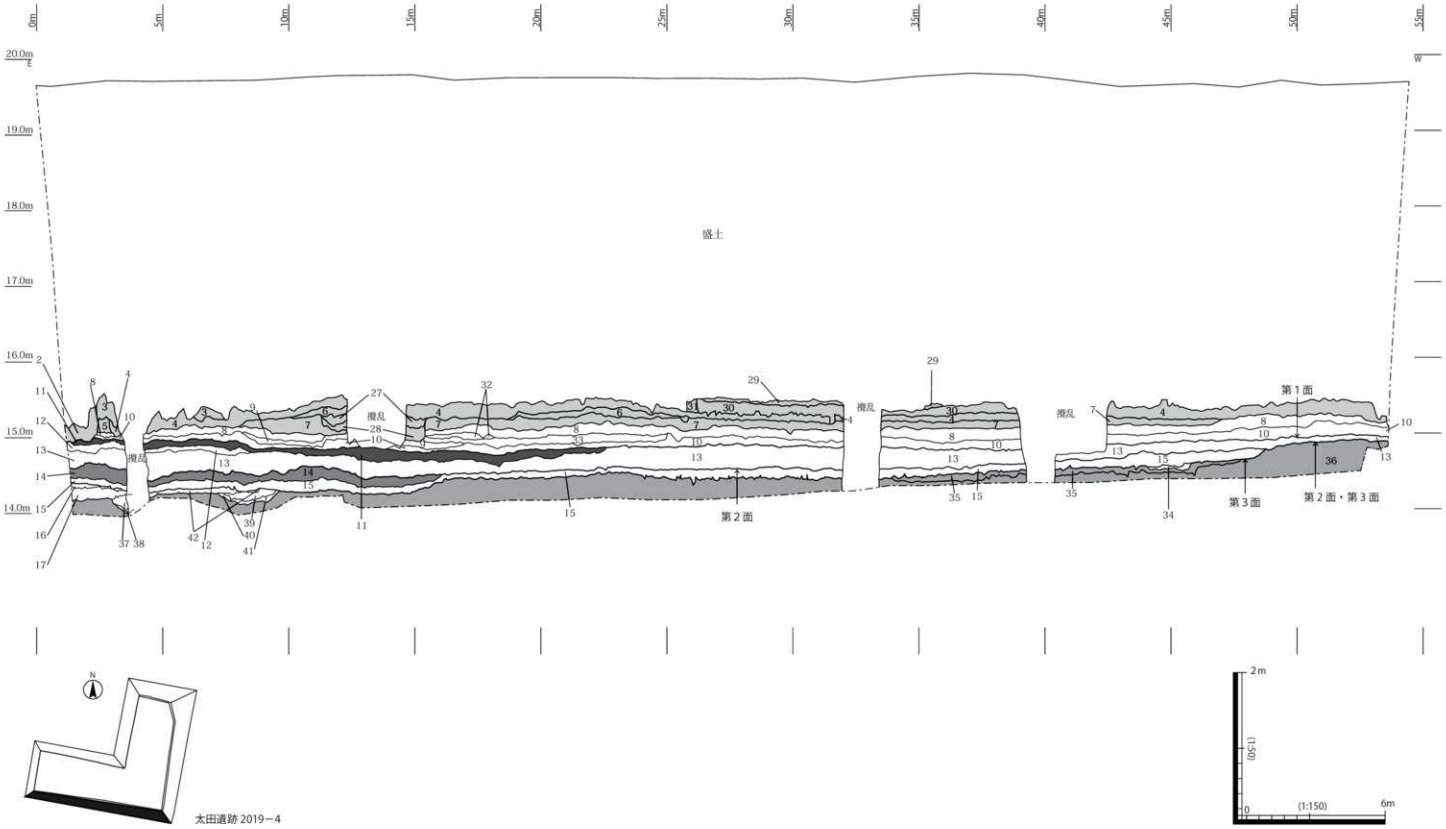

0m
5m
10m
15m
20m
25m
30m
35m
40m
45m
50m
55m
20.0m
19.0m
18.0m
17.0m
16.0m
15.0m
14.0m
E
W
盛土
撹乱
第1面
第2面
第3面
第2面・第3面
太田遺跡 2019－4
N
2m
(1:50)
0
(1:150)
6m

図 10　南壁土層断面

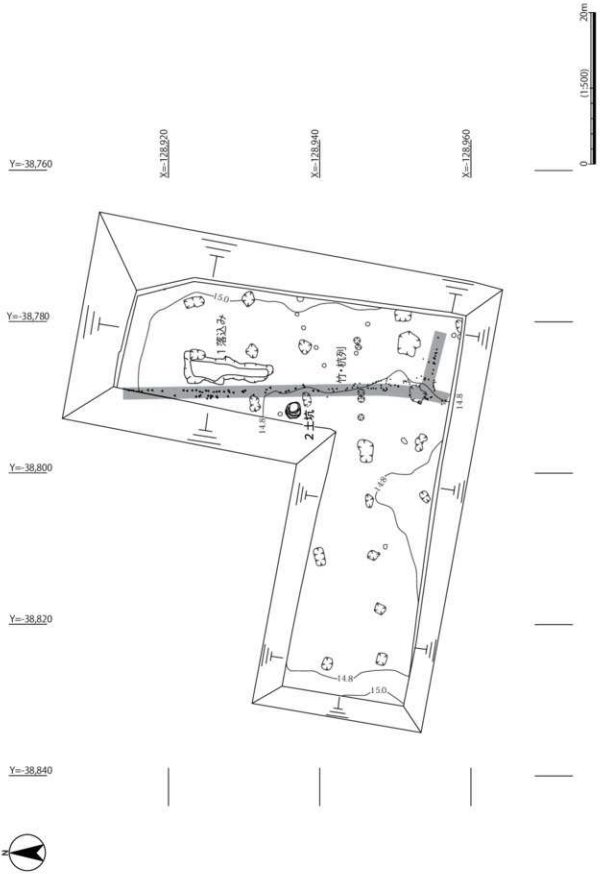

0
(1:500)
20m
X=-128,920
X=-128,940
X=-128,960
Y=-38,760
Y=-38,780
Y=-38,800
Y=-38,820
Y=-38,840
1 落込み
2 土坑
竹・植列
15.0
14.8
N

図 11　第 1 面　平面

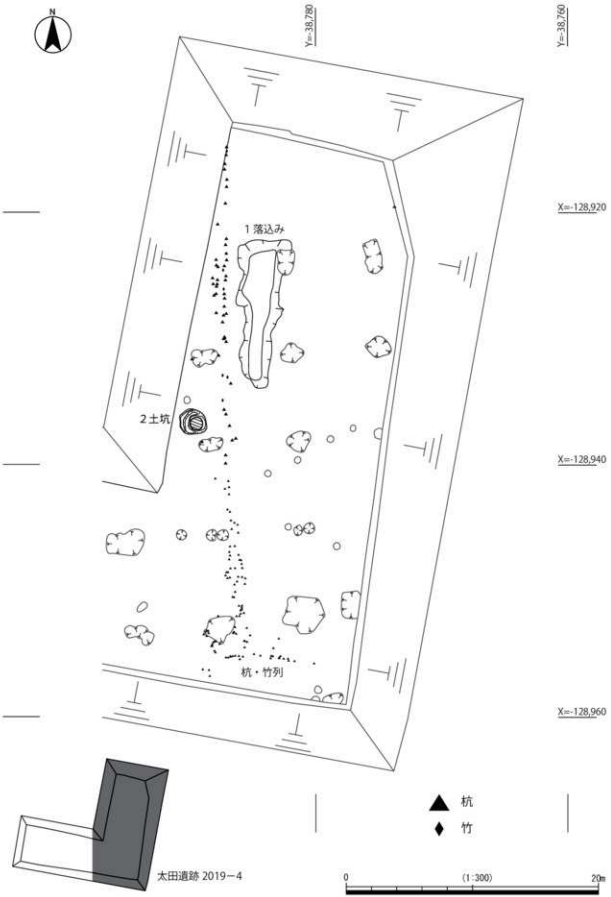

N
Y=-38,780
Y=-38,760
X=-128,920
X=-128,940
X=-128,960
1 落込み
2 土坑
杭・竹列
杭
竹
太田遺跡 2019－4
0
(1:300)
20m

図 12　第 1 面　部分平面

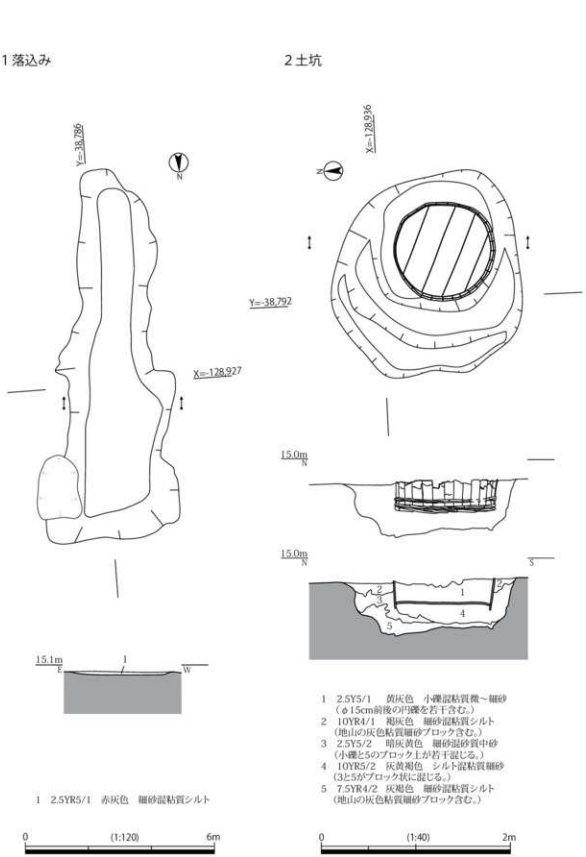


図 13 第 1 面 落込み・土坑平断面

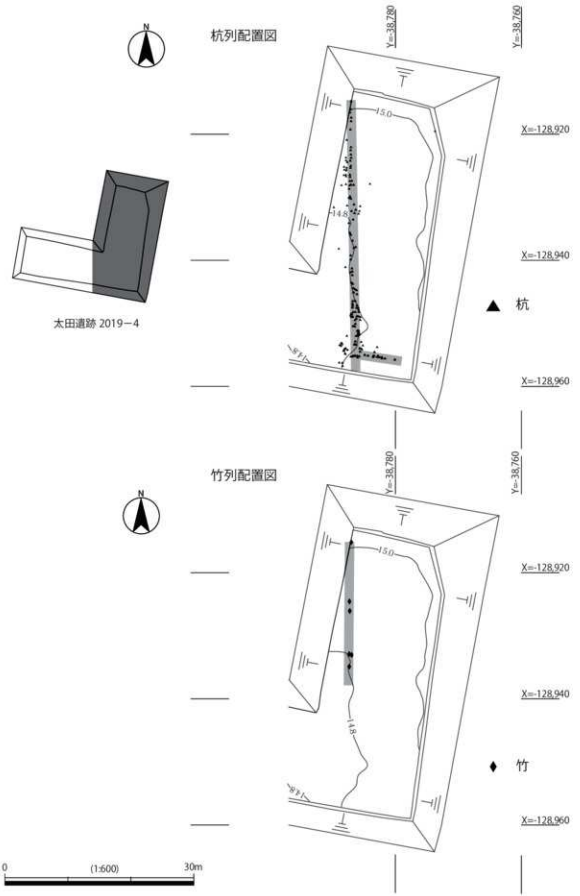


図 14　第 1 面　竹・杭列配置

の円礫が若干含まれていたのに対し、木桶外部の埋土にはなかった。直径数cm以上の円礫は、第１面基盤層以下の層にはほとんどないのに対し、第２層より上の層には若干含まれていた。おそらく木桶を据えて掘形を埋めた後、木桶の部分は開放した状態で使用されたと考えられる。木桶の内部に徐々に周囲の土や円礫が埋積し、やがて機能を失ったと考えられる。耕作地に位置していたことから２土坑は、水溜や肥溜だったと考えられるが、最も地盤がくぼまったところに位置することを勘案すると、水溜の可能性が高いのではないかと考える。木桶は底部付近が30cm程残存するのみだったことから、土坑が掘込まれた際の地表面は、第１面より少なくとも数十cmは高かったと考えられる。木桶には厚み数cmの、ゆがみのないしっかりした木材が使用されており、下部に竹製の箍が３条はめられていた。木桶の掘形埋土から、おそらく弥生土器・土師器・瓦器とみられる土器の細片が各１点出土した。いずれも細片で摩滅しており、二次的に混入したものとみられ、時期判別は難しい。

第１面では竹・杭が列状に打ちこまれた痕跡を検出したため、それらを総称して竹・杭列とした。おおむね南北方向トレンチ西寄りの部分で南北方向にならび、南端部分ではそれらに直交する杭列もあった。杭の直径は４～５cmが大半を占め、６cm以上や３cm以下のものも若干含まれる。杭には表面の樹皮が除かれ、丁寧に先端部をとがらせたものの他、樹皮が付いたままであまり加工されていないものも含まれていた。竹は直径３cm前後のものが使用されている。南北方向の竹・杭列に関してみると、標高14.8mの等高線に一致する部分もあることから、東から西にむかって下がる傾斜地の、傾斜変換部分に設けられた土留の杭や、大畦畔にともなうものではないかと考える。２土坑と同様、上層の耕作面から打ち込まれたとみられるが、それらの時期は不明である。また素材や形態・大きさの違いから、複数時期にわたって打ち込まれたものの集積ととらえられる。

第２項　遺物の出土状況

第１面の精査時に検出した遺物は図33－４・６・７の他に、瓦器椀片18点、陶器片２点、土師器片約60点、須恵器片３点、瓦片１点、黒色土器片７点、桃種１点がある。いずれも細片で正確な器種や時期は判別しがたい。大半を占める土師器のうち、口縁部等が若干残っており、皿と判別できたのは７点で、大半は口縁外面に強いヨコナデを施す。布留式土器の破片らしきものも１点あった。おそらく大半は中世の時期のものとみられるが、古墳時代・古代のものも若干含まれると考える。瓦器椀は図33－７と同様、器壁が薄くしあげが雑で、炭素の吸着が不良なものが大半を占める。おそらく瓦器椀の最終形態のものと考える。瓦は布目瓦である。黒色土器はいずれもきわめて細片で、器種の特定はできない。

以上を勘案すると、第１面精査時に検出した土器は大半が中世の土器で、古墳時代・古代の土器が若干含まれる。中世の土器のうち、時期判別が可能なものは14世紀までの時期におさまり、時期が下る可能性があるものを加味しても、15世紀を大きく下る時期にはならないと考える。

第３節　第２面の調査成果

第２面は中世の耕作土層である第３層と、弥生時代後期から中世の遺物を含む土壌化層である第４層を除去して検出した面で、第５層を基盤層とする。

遺構面の標高は 14.3 ～ 14.9m で、おおむね平坦な印象を受けるが、北東から南北方向に長いトレンチ部分では北東から南西に、東西方向に長いトレンチ部分では西から東に徐々に標高が下がり、調査区中央部分がゆるやかにくぼむ。第２面では３板材を検出したのみで、生活痕跡は希薄である。ただし、第２面を覆う第３層からは、細片が多いものの多種多様な土器が出土していることから、集落居住域に比較的近い場所だったことが類推できる。

第１項　遺構

３板材は調査区南東隅で検出したもので、幅 15㎝前後もしくは 20㎝の板状の木材が列状にならべられていた。土層観察を行った東壁断面と南壁断面の３板材の延長線上にも、同様の大きさの木材の断面がみられたことから、それは調査区の外側にも延長していたと考えられる。

板材の北側縁には現代の建物の基礎杭が貫通した痕跡が残されていた。周辺の地形を勘案すると、板材は調査区中央部に位置するゆるやかなくぼみの南側の縁に沿わせるように配置されていたのではないかと類推できる。また後述する４石列はこれらの板材の南側に平行するように位置していたことから、３板材は人為的に置かれたものと考えられる。板材は厚みのある形の整ったもので、加工もしくは使用痕跡が残るものもあったことから、おそらく建築部材等の転用品が用いられたのではないかと考える。

基本層序でも述べたように、第２面が地表だった当時、調査地とその周辺は安威川の後背湿地で、集落居住域や生産域の縁辺部だったと考えられる。ただし、後述するように調査地のすぐ東側の微高地上には弥生時代以降、集落居住域・墓域等の活動領域が継続的に展開していたとみられる。これらのことから当遺構は、調査地東側の微高地上に展開していた活動領域から、西側の沖積地にむけての通路上に設けられていた施設の可能性があると考える。

板材に近接する位置から弥生土器３点、土師器４点を検出した。いずれも細片で二次的な堆積物とみられることから、それをもとに板材が置かれた時期を特定するのは難しい。ただし、板材が掘形をともなっていないことから、第５層の堆積時期とそれほど時期差はないのではないかと考える。

第２項　遺物の出土状況

第２面を覆う第３層・第４層における遺物の出土状況、第２面精査時における遺物の検出状況の概要を述べ、第２面の時期をとらえる手掛かりとしたい。第３層出土遺物は細片が多かったため図化したものはないが、土師器片９点、瓦器片が１点出土した。土師器には中世の小皿の破片が１点含まれていた。側溝掘削のため第３層・第４層をまとめて掘り上げた際、出土した遺物には須恵器片５点と土師器片８点がある。それらを含めたとしても第３層からの遺物出土量はきわめて少量である。

第４層出土遺物は図 33 － 9 ～ 12 の他に、土師器片約 240 点、弥生土器片約 40 点、須恵器片９点、瓦器片２点、桃種６点、ジュズダマ様の種子１点がある。土器はいずれも細片で、摩滅したものが多い。土師器のうち、時期判別がある程度可能なものは１割弱で、それらは古墳時代・古代のものである。弥生土器はおおむね弥生時代後期のものである。出土遺物は調査区南半部、つまり南北方向トレンチの南

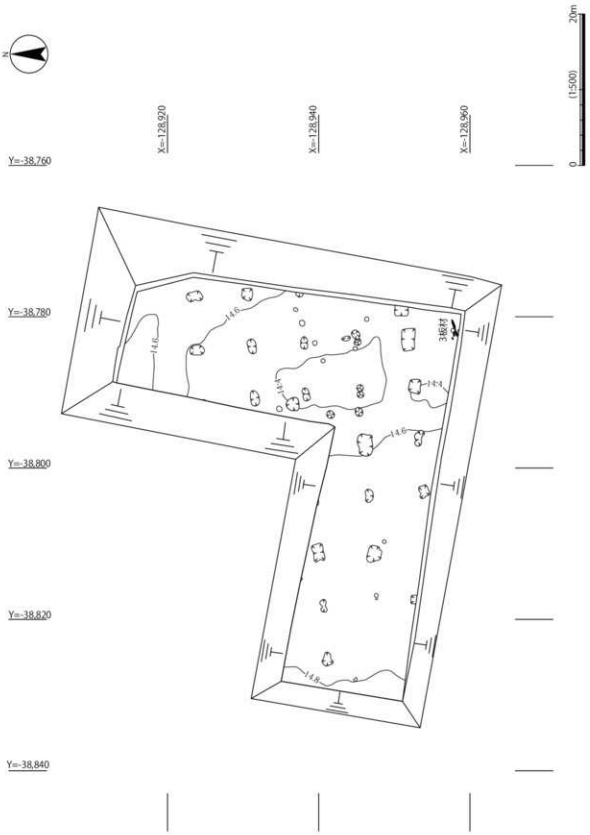

N
X=-128,920
X=-128,940
X=-128,960
Y=-38,760
Y=-38,780
Y=-38,800
Y=-38,820
Y=-38,840
0
(1:500)
20m
14.6
14.4
316付

図 15　第 2 面　平面

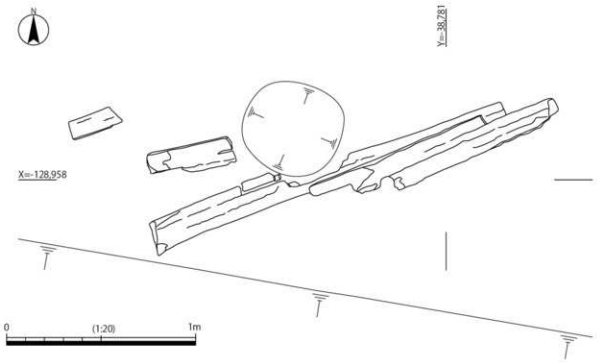


図 16　第２面　３板材検出状況

寄りの部分と東西方向トレンチで多く出土する。

第２面精査時に検出した遺物は図 33 － 8 の他に土師器片約 90 点、弥生土器片 13 点、須恵器片と桃種各２点がある。土師器のうち、時期判別がある程度可能なものは一割弱で、いずれも古墳時代のものと考える。弥生土器はおおむね弥生時代後期のもので、遺物の分布密度は第４層と同様、調査区南半部で多い。

このように第３層出土遺物には、出土量がきわめて限られる中で、中世土器が一定量含まれているのに対し、第４層では古墳時代から古代の土器が主体を占め、中世土器は全体からみるときわめて少量であることがわかる。第２面出土遺物は第４層における遺物の出土状況と似るが,中世の遺物は含まれず、出土遺物の諸相も第４層に比べて時期がさかのぼる傾向がみられる。

以上のことから第２面および３板材の形成時期は古墳時代を上限とし、古代を下限とする時期に求めることができるのではないかと考える。

第４節　第３面の調査成果

第３面は弥生時代後期から古代の遺物を含む第５層・第６層を除去して検出した面で、地山を基盤層とする最終遺構面である。遺構面の標高は 14.3 ～ 14.9m で、西から東にむけてゆるやかに標高が下がるが、調査区東寄りの多数の切り合う溝を検出した部分ではゆるやかに地盤が上がるため、結果的に南北方向トレンチ西寄りの部分が帯状にくぼむ。第３面では溝の他に、ピット・土坑を検出したが、遺構・遺物の検出密度は調査区東半部が高い。

第１項　遺構

ピットは、６ピットを除くとおおむね溝が集中する調査区東半部で検出した。ピットと土坑を区分する明確な基準はないが、本稿では直径もしくは短軸が１ｍ前後までの大きさのものをピットとした。今回検出したピットの深さはおおむね 10㎝前後で、深いものでも 20㎝弱である。それらの配置には建物跡と認識できるような規則性は認められず、柱痕が認められるものもなかった。

６ピットの出土土器（図 34 － 41）は第３面を検出中にすでに現れていたことから、６ピットの掘削面は第３面よりも上で、おそらく第５層もしくは第６層の形成過程のある時期とみられる。土器は口縁付近のみだったが、それほど摩滅はしていなかった。土器は必ずしも意図的に置かれたものではなく、ピットが埋まる過程で混入した可能性が高いと考える。ただし、前述したように、比較的残存状態のよい土器片が混入していることから、当調査区が集落居住域に近い場所だったことを類推させる。

36 ピットは後述する 21 溝が埋まった後に形成されたピットで、21 溝の流下方向と直交する方向に長辺を置く隅丸長方形のピットである。遺構埋土から弥生土器片が４点出土した。いずれも細片だがそれ程摩滅はしていない。そのうちの１点は胴部最大径の部分に突帯を付したもので、扁球形の胴部に突帯を付した壺や、手焙形土器の体部下半の破片の可能性等が考えられるものの、残存部位が限られるため特定はできない。いずれにせよ弥生時代後期の所産と考えられる。

37 ピットは 36 ピットのすぐ北側に位置していたが、21 溝に先行して形成されたもので、その上部は 21 溝の形成時に削平されたと考えられる。27 ピットは直径 40㎝前後で深さは 10㎝弱である。東西方向を指向する 24 溝の南側で、26 ピットの西側に位置する。遺構埋土から弥生土器４点が出土した。そのうちの１点は、外面にタタキの痕跡がある甕の底部で、弥生時代後期の所産と考えられる。26 ピットは短軸 40㎝、長軸 70㎝強の、平面形が長楕円形のピットである。埋土の土質も 27 ピットと類似しており、両者は比較的近い時期に埋まった可能性がある。ピット埋土から弥生土器が３点出土した。そのうちの１点はタタキ甕の胴部の破片、もう１点は受口状口縁を有する甕の口縁部と考えられる。おそらくいずれも弥生時代後期の所産と考える。

38 ピットは 21 溝の北端部東肩に近接する位置で検出した、直径 30㎝強、深さ 10㎝弱のピットである。埋土から出土した土器片５点のうち、４点は弥生土器とみられる。他の１点はそれらより胎土のきめが細かく、若干器壁が薄い印象を受ける。わずかに外方に湾曲することから、器台口縁部の可能性があると考えるが、外面に薄く炭化物が付着することから断定はできない。40 ピットは 21 溝の底部で検出したピットで、32 ピットと同様に 21 溝に先行して形成されたと考えられる。遺構埋土から遺物は出土しなかった。

45 ピットは 21 溝と 24 溝に挟まれた部分、46 ピットは 22 溝の南端部に近接する部分で検出した

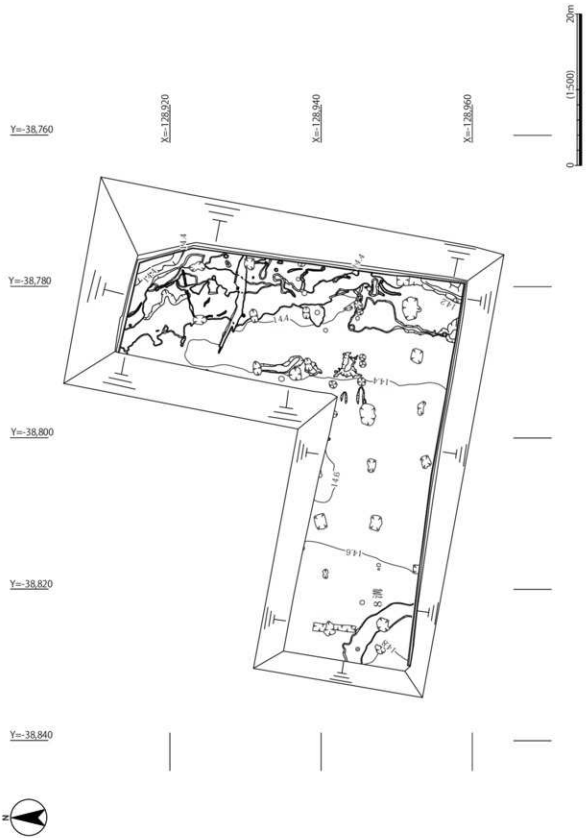

Y=-38,760
Y=-38,780
Y=-38,800
Y=-38,820
Y=-38,840
X=-128,920
X=-128,940
X=-128,960
0
(1:500)
20m
N

図 17　第 3 面　平面

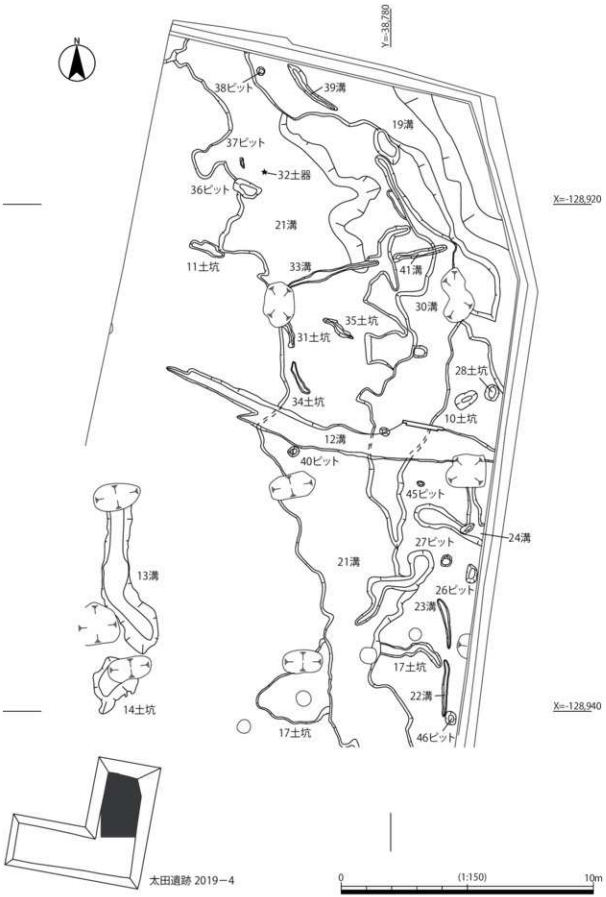

N
Y=-38,780
X=-128,920
X=-128,940
38ピット
39溝
19溝
37ピット
32土器
36ピット
21溝
11土坑
33溝
41溝
30溝
35土坑
31土坑
28土坑
34土坑
10土坑
12溝
40ピット
45ピット
24溝
27ピット
21溝
13溝
26ピット
23溝
17土坑
22溝
14土坑
17土坑
46ピット
太田遺跡 2019－4
0
(1:150)
10m

図 18　第３面　部分平面

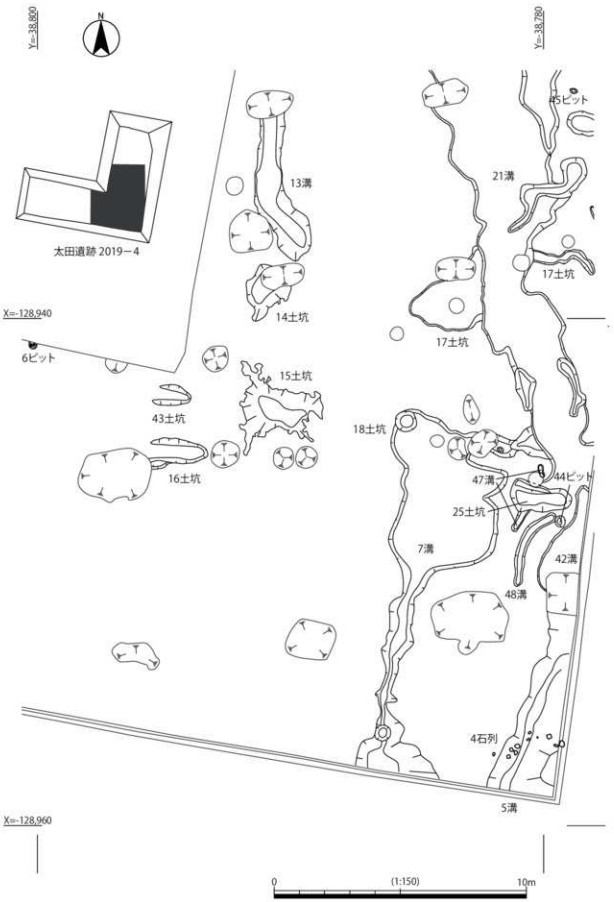

Y=-38,800
N
Y=-38,780
太田遺跡 2019－4
13溝
14土坑
15土坑
16土坑
43土坑
6ピット
X=-128,940
X=-128,960
21溝
17土坑
17土坑
45ピット
18土坑
47溝
44ピット
25土坑
7溝
42溝
48溝
4石列
5溝
0
(1:150)
10m

図 19　第 3 面　部分平面

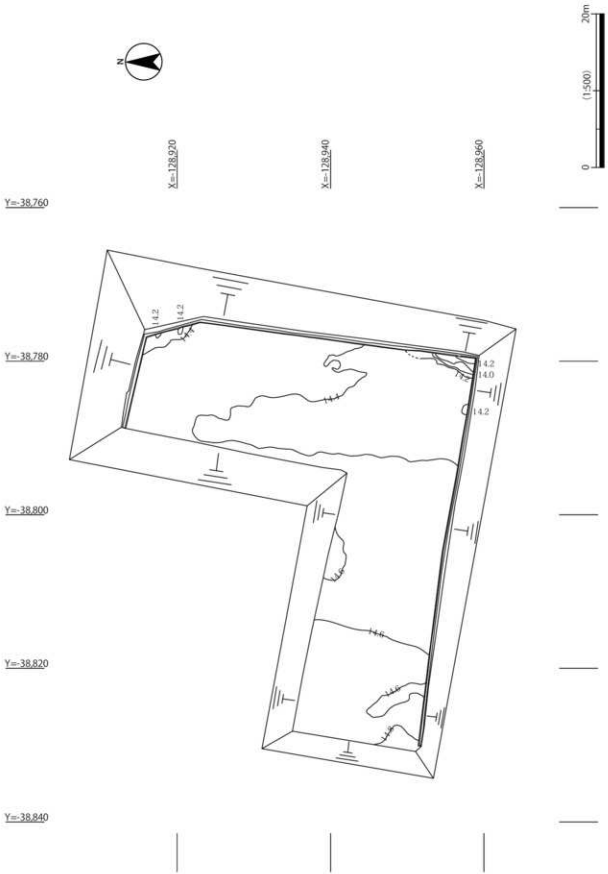

N
0
(1:500)
20m
X=-128,920
X=-128,940
X=-128,960
Y=-38,760
Y=-38,780
Y=-38,800
Y=-38,820
Y=-38,840
14.2
14.2
14.2
14.0
14.2

図 20　第 3 面　等高線

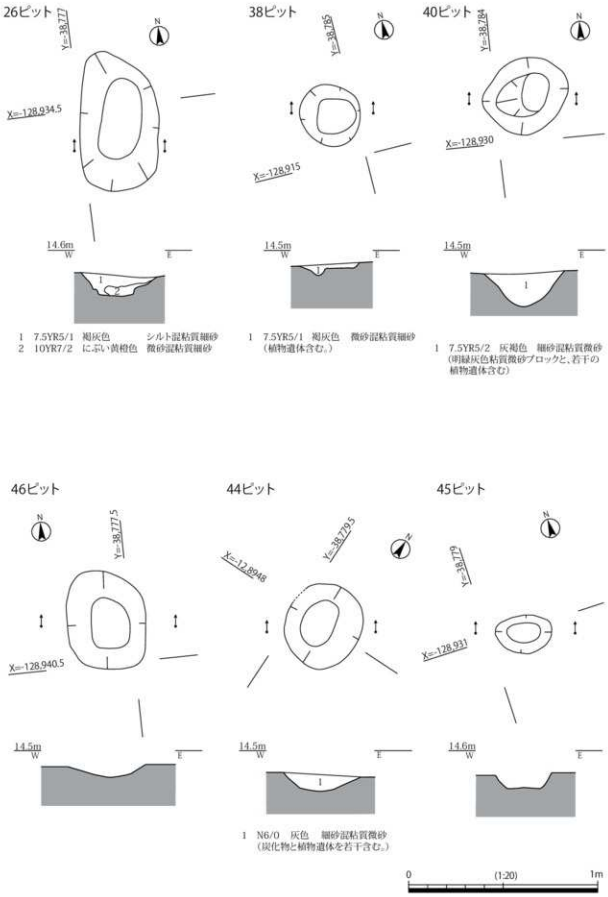


図21　第3面　ピット平断面（1）

もので、いずれも遺物は出土しなかった。44 ピットは 48 溝の北端部近くで検出したもので、遺物は出土しなかったが、遺構理土には炭化物や植物遺体が腐食したものとみられる有機物が含まれており、黒色化していた。

土坑は主に、調査区東半部の溝が密集する箇所と、その西側の窪地状に地盤が下がる部分で検出した。溝が密集する箇所で検出した土坑には、平面形が円形もしくは楕円形のものの他に、長楕円形のものが含まれる。一方、溝の密集箇所の西側で検出した土坑は、平面形が不整形なものが多い傾向がみられる。

10 土坑は 30 溝と 19 溝に挟まれた箇所で、後述する 28 土坑の西側に位置する。平面形は短軸長 50㎝強、長軸長 100 ㎝弱の楕円形で、深さは 10㎝強である。埋土には木片と細～中砂層が層状に混入しており、流水堆積層によって一気に埋まったとみられる。28 土坑は直径 60㎝前後の円形の土坑で、深さは 10㎝弱ときわめて浅い。埋土に小礫と、近接する溝の埋土に似たブロック土が混じっていたことから、溝が埋まった後に形成され、短期間で埋まったと考えられる。

11 土坑は平面形が、北西から南東方向を指向する長軸長 150㎝弱、短軸長 50㎝弱の長楕円形である。南東端を 21 溝にわずかに切られている。その南東側に位置する 31 土坑・34 土坑・35 土坑も角度に相違があるものの、北西から南東方向を指向する長楕円形で、短軸長が近似する。いずれも深さは数㎝ときわめて浅く、埋土は近似していた。このことからそれらは、21 溝に先行してあった溝の痕跡ではないかと考える。これらの遺構のうち、埋土から遺物が出土したのは 31 土坑のみである。出土遺物は弥生土器とみられる破片が 4 点、弥生時代終末から古墳時代前期の土器片が 2 点だった。いずれも細片で、特に弥生土器の摩滅が著しい。

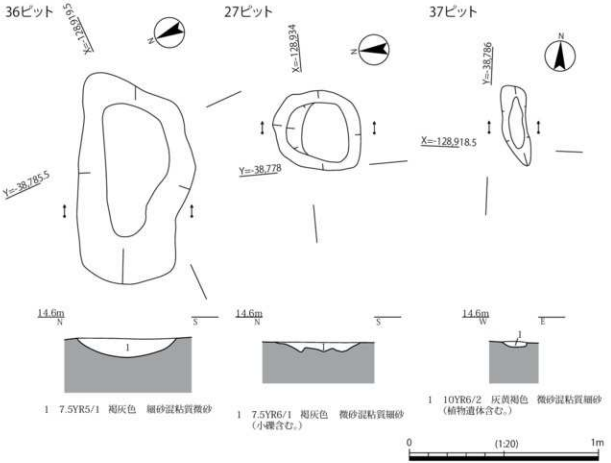
18 土坑は 7 溝の北端部で検出した直径 80㎝強の円形の土坑である。7 溝が埋まった後に形成されたもので、埋土には礫・木片が含まれていた。加えて炭化物や植物が腐食したものとみられる有機物が含まれ、若干黒色化していた。

25 土坑は 21 溝が埋まった後に形成された楕円形の土坑で、深さは 10㎝強である。前述の土坑はいずれも埋土から遺物は出土しなかったが、25 土坑からは図 34 － 43 の他にも土器 48 点と、比較的まとまった量の遺物が出土した。いずれも細片で多くは弥生土器とみられるが、器壁が薄く胎土のきめが細かいことから、古墳時代初頭まで時期が下る可能性がある破片も数点含まれていた。弥生土器にはタタキ調整のある破片 9 点、高杯の脚部片 1 点、甕の口縁部片 1 点が含まれる。タタキ調整のあるものには、タタキ後に雑なハケ調整を施したものが 1 点あった。弥生土器は後期のものと考える。

17 土坑は東西方向に長い不整形な土坑とみられ、その中央部を 21 溝によって切られている。南北方向の最大幅は 3 m に達するが、深さは 10㎝前後ときわめて浅く、底部には踏み込み状の凹凸がみられる。埋土から弥生土器片 20 点と、弥生時代終末から古墳時代前期の土器片 1 点が出土した。弥生土器にはタタキ調整をした甕の底部および体部の破片が各 1 点ある。

第 3 面の標高が最も低い箇所の西縁部で検出した 14 ～ 16・43 土坑は、平面形や深さに違いがあったものの、埋土の土質は類似する。14 土坑・15 土坑は長軸長が数 m と大きいが、平面形はきわめて不整形で、土坑の中央部にむけてなだらかにくぼむ。植物の根の痕跡のようなものかもしれない。43 土坑・16 土坑は西側の肩部を検出できなかったが、もとの平面形は楕円形だったとみられる。

14 土坑の埋土からはタタキ調整を施した甕とみられる弥生土器の破片が 1 点出土した。15 土坑埋土からは図 34 － 42 の他に、弥生土器片が 18 点と桃種 1 点が出土した。土器にはタタキ調整を施したものが 1 点含まれていた。16 土坑埋土から出土した弥生土器片 7 点の中には、器壁が厚くて直径 0.5



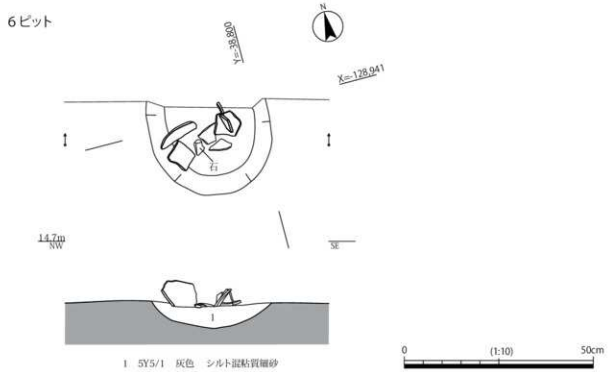


図22　第3面　ピット平断面（2）

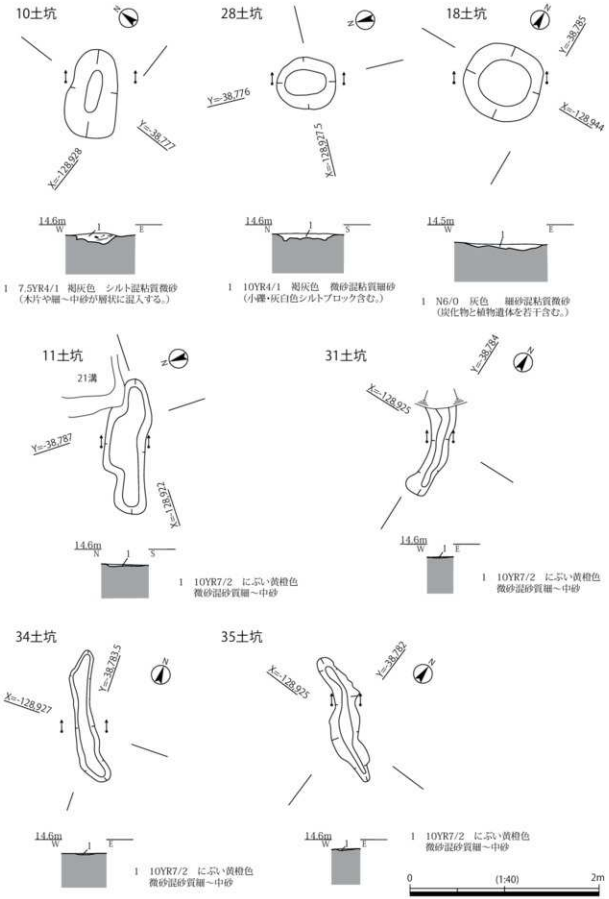


図 23 第３面 土坑平断面（１）

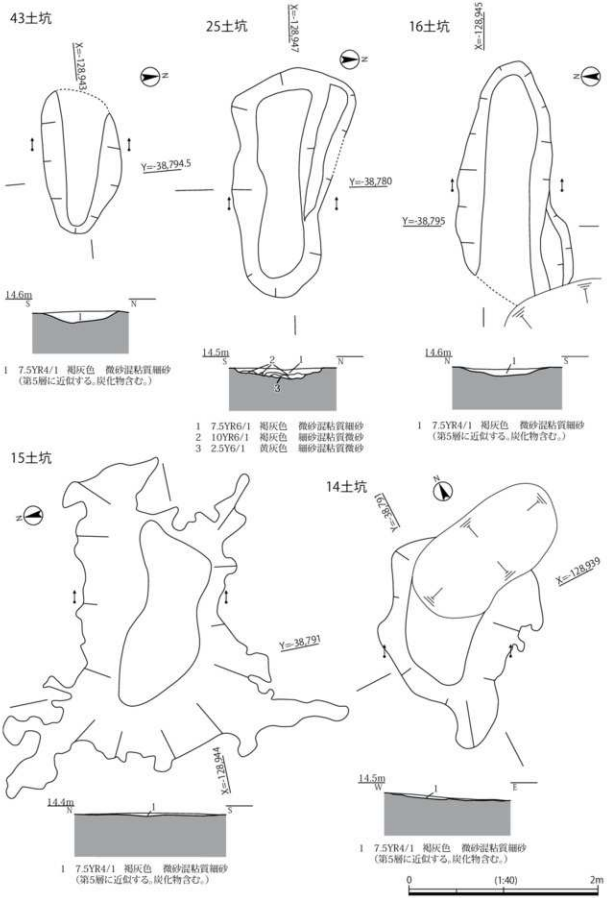


図24 第3面 土坑平断面（2）

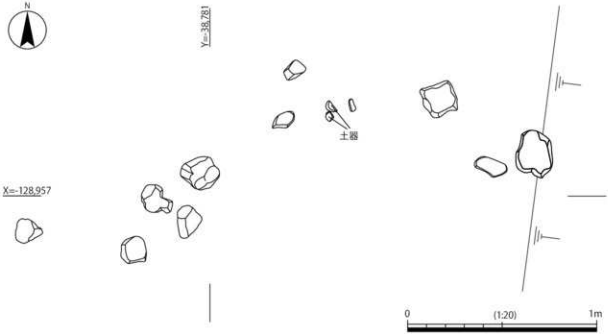


図25　第３面　４石列検出状況

㎜大の白砂粒を多量に含んだ、弥生時代中期以前にさかのぼる可能性のあるものが１点含まれていた。14 ～ 16 土坑出土遺物はいずれも細片で、器種判別のできるものはほとんどなかったが、おおむね弥生時代後期までのものではないかと考える。

４石列は５溝が埋まった後に配置されたものである。石列に用いられた石はいずれも加工痕はなく、自然石である。ただ当調査区における地山や、第３面を覆う層には４石列で用いられる大きさの円礫は含まれていないことから、人為的に持ち込まれたものと考えられる。石は一人で簡単に運べる大きさで、調査区の南東隅に近い部分にややカーブしながら北東から南西方向に配置されていた。４石列の検出位置と方向性は、前項で述べた３板材に近似することから、４石列が埋まった後、その場所をトレースするように３板材が置かれたのではないかと考える。このことから４石列も、ぬかるんだ場所を通行するために置かれた可能性があると考える。

第３面で検出した溝は５溝と 19 溝を除けばおおむね浅く、溝幅も一定しない。また調査区東半部で検出した溝のうち規模の大きいものは、ゆるやかに蛇行しながら北西から南東にむかって流下する複数の溝が複雑に切り合っているようにみえるが、西から東にむけて徐々に溝の位置が移動したとみられる。

それらの溝の埋土からは比較的まとまった量の土器片を検出した。また、北西から南東を指向する溝が埋積した後に形成されたとみられる、それらに直交もしくは斜行する小規模な溝も検出した。以下では後出する小規模な溝、33 溝・41 溝・12 溝について詳述した後、北西から南東方向ないし南北方向を指向する溝を西から順にとりあげたい。

33 溝と 41 溝は途中で途切れていたため別の遺構番号を付したが、近接してほぼ同じ方向を指向することから、もとは同一の溝である可能性が高い。どちらも幅は 20 ～ 30㎝とおおむね一定しており、直線的に北北東から南南西にむけて流下した溝の痕跡とみられる。33 溝の西端は攪乱で切られており、それより西側の延長部分は認めなかった。いずれの溝からも遺物は出土しなかった。

12 溝はわずかに蛇行しながら西から東に流下する。溝幅は湾曲する部分で 100 ～ 150㎝とやや広く、

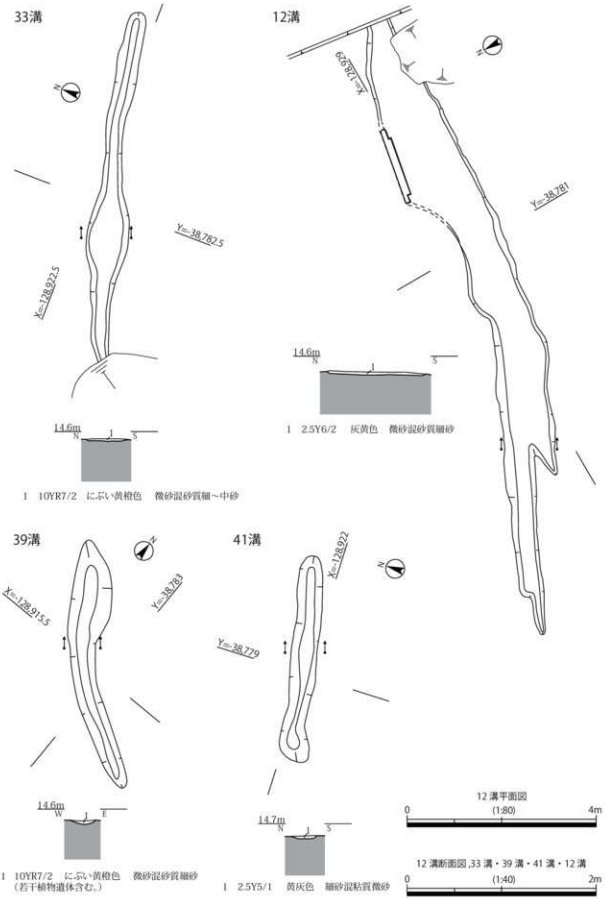


図26　第3面　溝平断面（1）

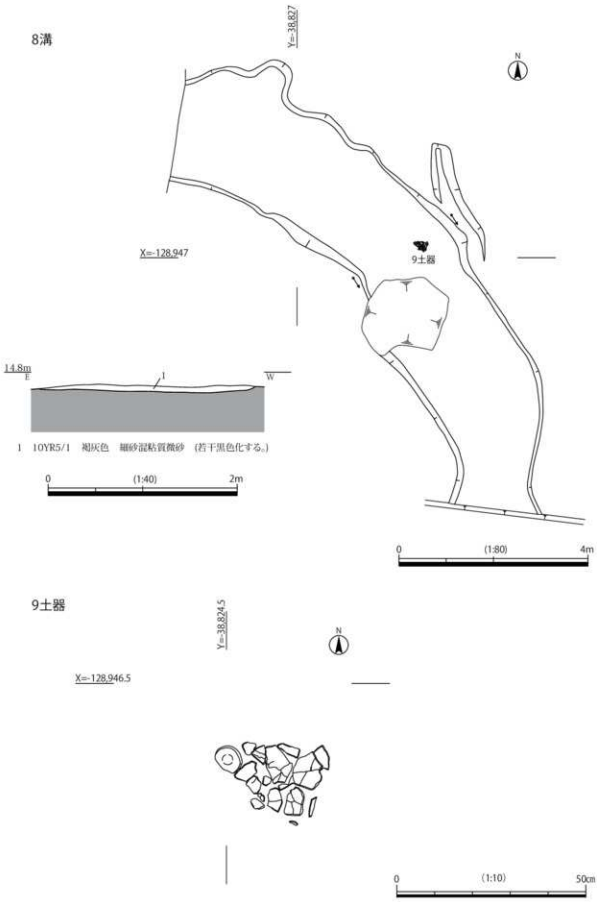


図 27　第３面　溝平断面（２）

直線部では 50㎝前後と細くなる傾向がみられるが、深さはおおむね 5㎝前後ときわめて浅い。12 溝の肩部で検出した木器（図 35 － 58）は、水が流下した際に流れに乗って運ばれてきたものとみられ、一時的にはやや強い流れが生じたと推測される。

12 溝埋土からは上記の木器の他、弥生土器片 220 点、弥生時代終末期から古墳時代前期の土器片が 20 点弱の他、桃種 4 点が出土した。特徴的な部位が残存していたことにより器種が類推できたのはすべて弥生土器である。それらのうち、タタキ調整を施した甕の破片が 30 点弱と最も多く、次いで壺が 10 点程あり、器台と高杯はそれぞれ数点だった。それらはおおむね弥生時代後期と考えられ、底部が残存していたものに関してはタタキの工具で底を叩いてわずかに平坦面を作るものが 1 点含まれていた。なお、出土遺物中には、12 溝に切られている 21 溝・30 溝・24 溝の埋土に含まれていたものも含まれる可能性がある。

8 溝は第 3 面における調査区西半で検出した唯一の遺構で、西から南にむけてゆるやかにカーブしながら流下する。溝幅は全体的に比較的一定しており 250㎝前後だが、深さは 5 ～ 10㎝ときわめて浅い。第 3 面は西側へ徐々に高まっており、南西隅に最も標高が高い 14.8 m の等高線が通るが、8 溝はその裾部をなぞるように走る。溝埋土は土壌化が進んで若干黒色化しており、その点でも東半部で検出した溝とは若干様相がことなる。

8 溝埋土から、カーブの中央付近で残存状態のよい 9 土器（図 34 － 38）や図 34 － 44 の他、土器の細片が 40 点あまり出土した。弥生土器片が約 30 点と大多数を占め、その他に弥生時代終末期から古墳時代前期のものとみられる破片が 4 点、須恵器片・桃種が各 1 点だった。弥生土器のうち器種が判別できたものは甕のみで、それらはおおむね弥生時代後期のものと考えられる。

13 溝は第 3 面の標高が最も低くなる部分で検出した遺構で、地形に沿うようにやや屈曲しながら南北方向を指向する。溝の埋土は第 3 面を覆う第 5 層に類似する。溝幅は 100㎝前後と比較的一定しており、深さは 10㎝弱ときわめて浅い。遺構埋土から弥生土器の破片が 7 点出土した。その中にタタキ調整の痕跡があるものは 4 点あり、そのうちの 1 点は底部が小さく体部が球形に膨らむ形態の土器底部の破片だった。おそらく弥生時代後期の所産と考えられる。

7 溝は東から西にむかって流下した水が南に方向を変えた痕跡である。溝の東端は 21 溝に切られており、それに先行したものである。溝幅はおおむね 100㎝前後だが、南北方向に転じる部分と調査区南端際の部分では溝幅が広い。溝の方向が転じる部分では溝底にほとんど高低差がないことから、この部分では水は澱んでおり、徐々に南にむけて流下したとみられる。溝南端部では南にむけて溝底に明瞭な傾斜が生じ、埋土下部には流水堆積層が認められる。ただ埋土の上部は止水性の堆積層で、7 溝出土遺物はすべてこの層から出土した。出土遺物は細片で摩滅したものが多く、図 34 － 40 の他に弥生土器と弥生時代終末から古墳時代前期の土器片があわせて 10 点前後出土した。

21 溝はわずかに蛇行しつつ北西から南東方向にむけて流下する溝で、東肩を 19 溝や 30 溝で切られている。今回検出した遺構の中では最も多量の土器が出土した。溝幅は一定しないが、北半部において広く、南に移行するにつれて徐々に細くなる傾向がみられた。北半部においては、北から南にむけて溝底の標高は徐々に低くはなるものの、その高低差はきわめて小さいのに対し、南に移行するにしたがって傾斜が明瞭になる。遺物の出土量は北半部において多い傾向がみられ、32 土器（図 34 － 48）のように残存状態の比較的良好なものも含まれる。溝の深さはおおむね 10㎝前後ときわめて浅く、流水性の堆積層が所々に残る。

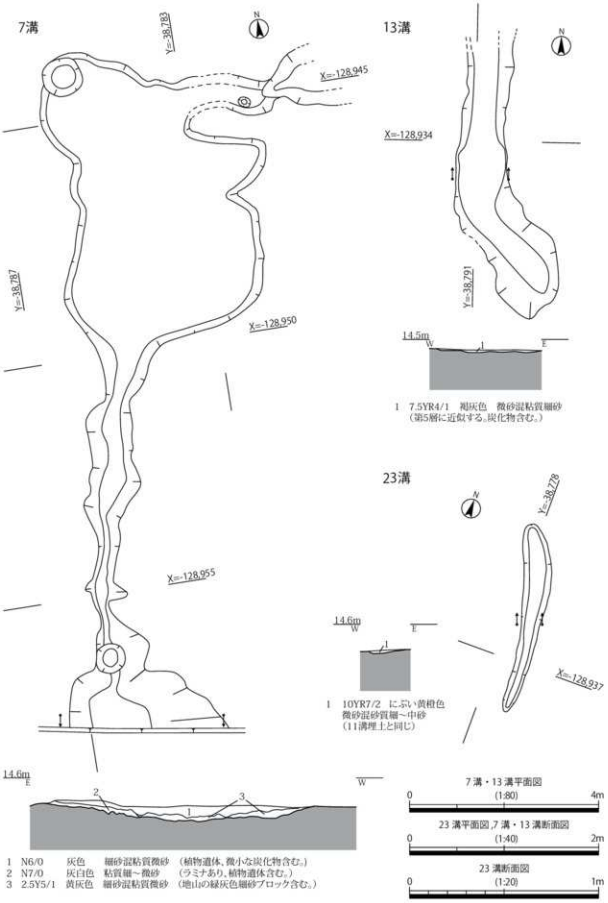


図 28　第３面　溝平断面（３）

21 溝出土遺物は図 34 － 49 ～ 53・57 の他に、弥生土器片が 350 点弱と最も多く、次いで弥生時代終末から古墳時代前期の土器片が 30 点強とつづく。その他に古墳時代前期の土器と桃種が各 5 点出土した。弥生土器のうち器種が判別できるものは、甕もしくはその可能性があるものが約 50 点、壺が約 10 点、高杯が 7 点、器台が 3 点あった他、蓋の可能性がある破片が 1 点あり、それらはいずれも弥生時代後期のものと考えられる。

30 溝は全長 17 m弱で、北と南には延長しないが、21 溝の東肩を切りつつ、21 溝および 19 溝に沿うように蛇行することから、21 溝に後出する溝の痕跡と考える。溝幅は一定せず、南半にむけて徐々に広くなるが、深さはおおむね 5 ㎝前後ときわめて浅い。溝底の標高から、北から南にむけて流下していたことがわかる。30 溝出土遺物は細片が多く、図化できるものはなかったが、弥生土器片 31 点、弥生時代終末から古墳時代前期の土器が 4 点、桃種 1 点と比較的豊富だった。弥生土器のうち、器種が判別できたものは器台が 2 点、甕と高杯とが各 1 点だった。

39 溝は 19 溝埋土を除去した段階で検出したことから、19 溝に先行して形成されたとみられる。30 溝の北半部の延長上にあり、39 溝と 30 溝の北半部とは規模や方向性が一致することから、30 溝の北の延長部分の可能性がある。もしそうであれば、30 溝と 19 溝との明確な切り合い関係は確認できなかったが、30 溝は 19 溝より前に形成されたと考えられる。なお 39 溝から遺物は出土しなかった。

19 溝と 5 溝は調査区の東端をかすめるように走る溝で、今回の調査で検出した溝がいずれもきわめて浅いのに対し、30㎝以上の深さがある。どちらも溝の西肩を検出したのみで、溝断面の中央部は調査区外に位置するとみられることから、最深部には至っていないと考える。両者は調査区の北端部と南端部で検出されており、連続する部分を確認することができなかったことから別々の遺構名称を付しているが、前述した点からみて同一の溝の可能性が高いと考える。もしそうであればゆるやかに蛇行しながら、北から南にむけて流下する溝が調査区東辺部を走っていたと考えられる。また 19 溝の北端部では、側壁がゆるやかな階段状に立ち上がる様子がみてとれる。このことから、42 溝とした部分も 5 溝の一部である可能性があるかもしれない。19 溝の溝底部分で検出した地山は周囲に比べて砂粒がやや粗く、湧水が顕著だったのに加え、溝埋土にも流水堆積層の特徴が認められた。

5 溝と 19 溝とで遺物の出土状況を比較すると、19 溝の方が遺物の出土量がやや多いが、細片で摩滅の著しいものが多い印象を受ける。器種は 19 溝の方が若干多様性に富む。5 溝からは図 34 － 54 ～ 56 の他に、弥生土器片が 47 点、弥生時代終末から古墳時代前期の土器片が 3 点出土した。弥生土器の中には壺の口縁部片が 2 点、タタキ調整を施した甕の破片が約 10 点、高杯の脚部片 1 点が含まれていた。一方、19 溝からは弥生土器片が 51 点と、弥生時代終末から古墳時代前期の土器片 1 点が出土した。弥生土器のなかには高杯の可能性がある破片が 2 点、タタキ調整を施した甕の破片が 6 点、器台の破片が 2 点、壺片が 4 点含まれていた。壺には、球形にふくらんだ体部に直径 5 ㎝弱の底部が付くもの 1 点と、口縁部 2 点が含まれる。以上のことから、5 溝と 19 溝の出土遺物は、弥生時代後期のものを主体として、古墳時代前期の遺物が若干含まれることがわかる。

24 溝は調査区東端部で検出した遺構で、西および北側に延長しないものの、12 溝を含む東西方向を指向する溝と類似する特徴を有することから、溝の痕跡の可能性があると考えた。ちなみに南北方向に分岐する部分の溝底は、北にむけてわずかに傾斜する。24 溝埋土からは弥生土器片 5 点と、古墳時代前期の可能性のある土器片 1 点が出土した。弥生土器の中には粗いミガキ調整を施したものが 1 点と、おそらく後期とみられる土器の底部片 1 点が含まれる。

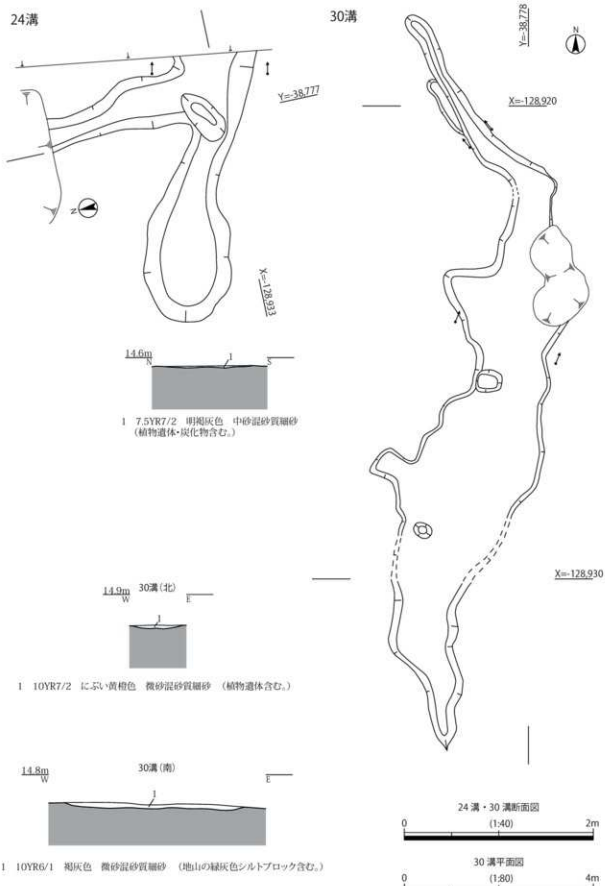


図 29　第３面　溝平断面（４）

23 溝・22 溝は調査区東端部で検出した南北方向を指向する溝で、形状や埋土の土質等、類似する点が多いことから、同一の溝の痕跡である可能性が高いと考える。溝底の標高は北から南にむけて下がる。23 溝の埋土から弥生土器片３点が出土した。いずれも細片で器種の特定は難しい。一方、22 溝埋土からも弥生土器片３点が出土しているが、そのうちの１点は、タタキ調整を施した甕の体部上端部とみられる。23 溝・22 溝出土遺物はいずれも細片で少量だが、おそらく弥生時代後期の所産と考える。

47 溝・48 溝はやや湾曲しながら南東方向を指向する。23 溝・22 溝と同様、ゆるやかに蛇行しながら流下する溝の痕跡の可能性がある。埋土から遺物は出土していない。

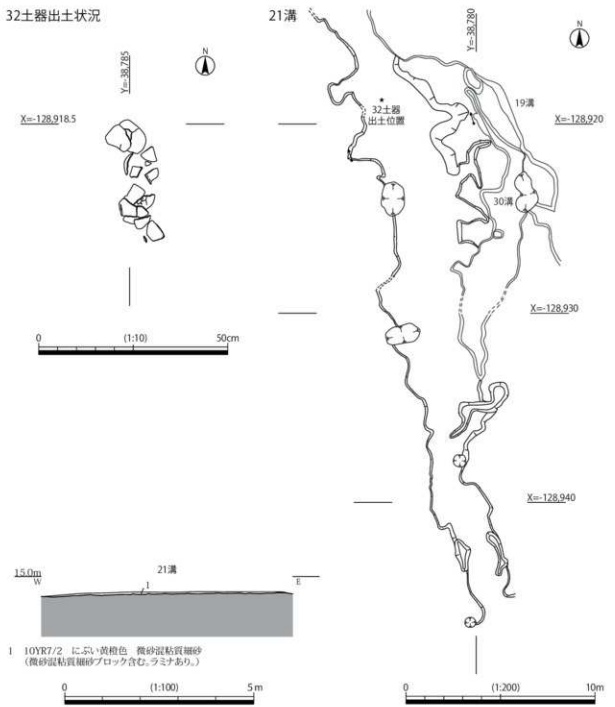


図 30 第３面 溝平断面（５）

上記をもとに、第３面における遺構の形成過程を概観したい。第３面では集落居住域や生産域の存在を類推させる遺構は検出しなかったものの、通路として置かれたとみられる石列や、あまり摩滅していない完形に近い土器が出土した遺構を検出した。このことから、居住域の縁辺部に位置する場所だったと考えられる。当調査区が集落域として積極的に利用されなかったのは、安威川旧流路の後背湿地にあたっていたのに加え、増水時における越流水の通り道になっており、地盤が安定しなかったことがあげ

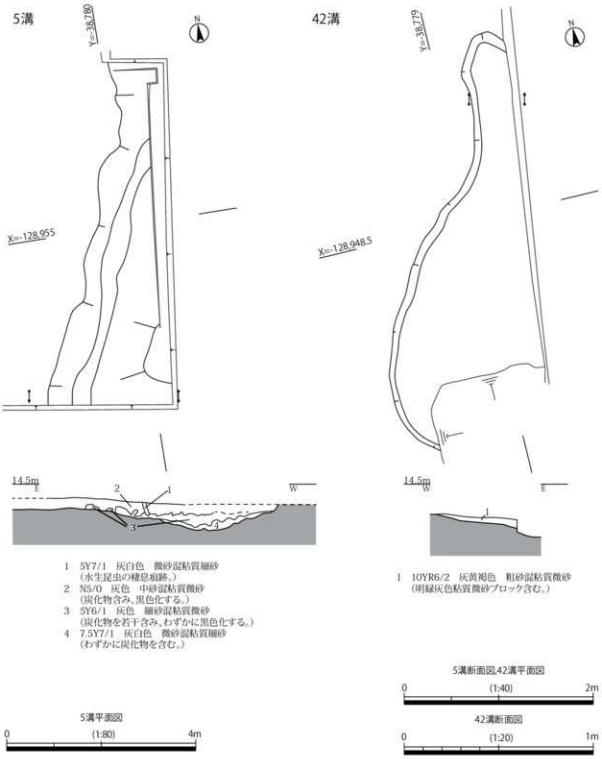


図 31　第３面　溝平断面（６）

られよう。なお、最終遺構面の基盤層が河川堆積層であることから、当該地も鳥瞰的にみればもともと安威川旧流路にあたっていたと考えられる。

ただ比較的水を得られやすい場所でもあったことから、耕作地に適する条件も備えており、当調査区の北側に近接した太田遺跡・太田城跡 2017－1 調査区の 1 区で水田畦畔とみられる遺構が検出されていることからもわかるように、周辺には小規模な生産域が点在していたのではないかと考えられる。そのため調査地は居住域・生産域の周縁部にあたっており、広い意味では集落の活動領域に含まれていたととらえられる。

換言すると、安威川の流路が移動して当地がその後背湿地となってからも、安威川ないしはその支流に比較的近かったため、当地はその後も河川堆積の影響を頻繁に受けていたとみられる。そのような状況はおそらく古墳時代中頃まで続いたと考えられ、集落居住域はその影響を避けて、調査区に近接する富田丘陵縁辺部の微高地上等に設けられていたと考えられる。第 3 面における溝の検出状況から、弥生時代後期から古墳時代前半にかけての時期においても、水が流下した方向や位置は、徐々に変化したことがわかる。今回検出された溝では、調査区西端部で検出した 8 溝の遺構埋土に含まれる遺物が、東半部で重なり合って検出された溝の遺物よりも若干時期が下る様相を示す。

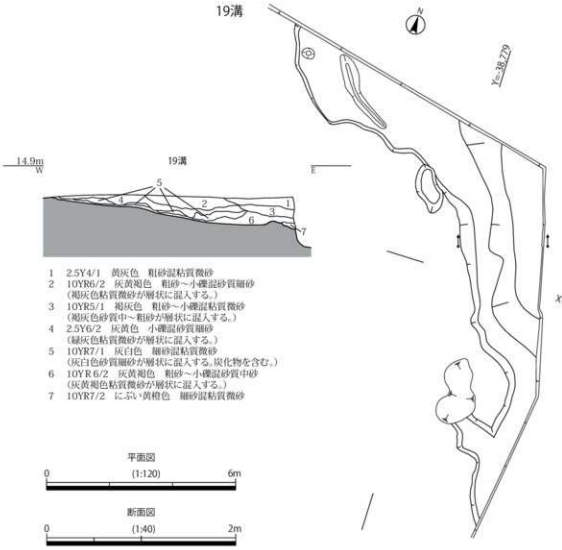


図 32　第 3 面　溝平断面（7）

第２項　遺物の出土状況

遺構ごとの遺物の出土状況は前項でふれたので、ここでは第３面を覆う第５層・第６層における遺物の出土状況と、第３面精査時に出土した遺物について述べる。前述したように、今回の調査では第５層における遺物の含有量が最も多く、図 33 － 13 ～ 31 の他にも多量の遺物が出土したが、細片で摩滅したものが多く、図化できたものは限られる。

第５層出土遺物の中では、弥生土器片が約 870 点と最も多く、弥生時代終末から古墳時代前期の土器片が約 80 点、古墳時代前期の土師器片が 16 点、須恵器片４点がそれにつづく。土器以外では桃種が５点出土した。弥生土器のうち、器種判別が可能なものでは、タタキ調整を施した甕の破片が 100 点弱と最も多く、壺が約 40 点、高杯が約 20 点とつづく。また器台、鉢の可能性があるものも数点認められた。器種は不明だが弥生時代中期以前のものも数点ある。

第６層は分布範囲が調査区東半部に限られることもあり、出土量はそれほど多くない。遺物は調査区東半部の中でも北寄りの部分で多く検出される傾向がみられたのに加え、第５層出土遺物と比べてもより細片で摩滅したものが多い印象を受ける。第６層出土遺物では弥生土器片が約 280 点と最も多く、弥生時代終末から古墳時代前期の土器片が 10 点弱、古墳時代前期の土師器片と須恵器片が各数点だった。また土器以外では桃種が２点出土した。弥生土器の中ではタタキ調整を施した甕とみられるものが 50 点弱、壺もしくはその可能性があるものが約 10 点あった他、器台の可能性があるもの数点、笠形の蓋１点を検出した。このように、第５層と第６層とでは遺物の出土量には差があるものの、含まれる遺物の器種や時期には大きな差はみられない。

第５節　遺物の詳細

遺構埋土や遺物包含層からの遺物の出土状況は前節で述べたが、本節では個々の遺物の詳細を述べる（図 33 ～ 36 参照）。今回出土した土器は細片が多かったが、実測が可能で時期比定の手掛かりとなるものは極力抽出し、掲載につとめた。

１～３・５は第１面１落込みの埋土から出土したものである。いずれも１落込みが埋積する過程で転入したもので、元位置を保つものは認められない。１は黒色土器椀の底部片で、高台内側に粘土の貼付け痕が残る。器壁の厚みは３㎜弱で、華奢な印象を受ける。見込にヘラミガキが認められるが、暗文の一部かどうかは不明である。全体の形状が不明なため断定はできないが、製作技法の簡略化がうかがえることから、10 世紀以降のものではないかと考える。今回の調査で出土した黒色土器は数点に過ぎず、いずれも細片で、形態的特徴をつかめるのは本品のみだった。２は土師器の皿で、口縁端部は若干折り返すようにして「て」字状におさめる。口縁部外面には強いヨコナデを施し、わずかに段をつくりだすが、底部から体部にかけての立ち上がりはなだらかである。これらの特徴から本品は、11 世紀末葉の所産ではないかと考える。３は須恵器の長頸壺で、頸部は上外方に直線的にのびるとみられ、口縁部付近で若干水平にのび、口縁端部は丸くおさめつつわずかに上方につまみあげる。これらの特徴から９世紀前半の所産と考える。５は土師器の杯で、口縁部外面に強いヨコナデが施され、口縁部は外反ぎみに立ち上がる。口縁内面にも強いヨコナデが施され、口縁端部は先細りぎみに丸くおさめる。体部外面のナデ調整は粗く、ユビオサエの痕跡が残る。14 世紀中頃のものではないかと考える。

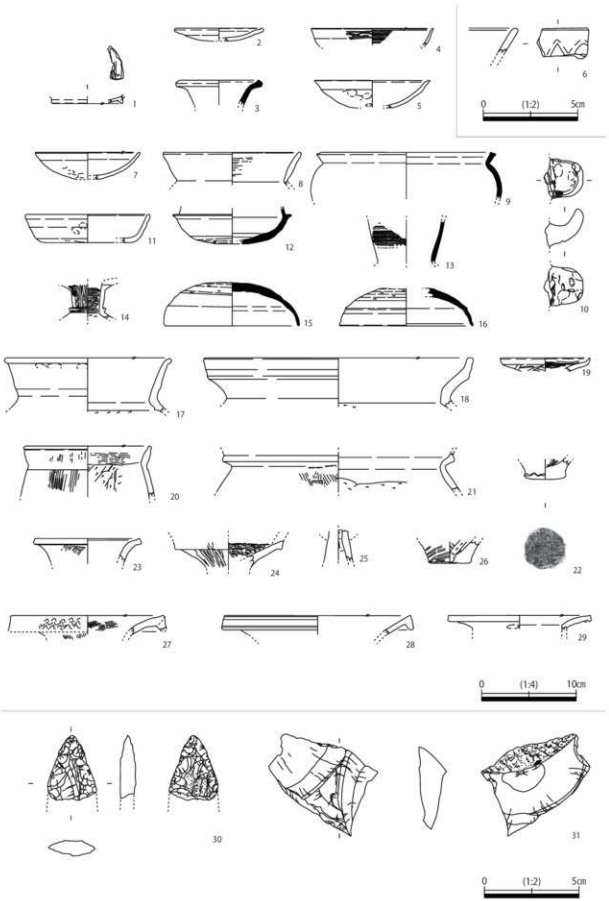


図 33　太田遺跡 2019 － 4 出土遺物（1）

4・6・7は第1面（第3層上面）の精査時に検出した土器である。4の瓦器椀は、きめの細かい胎土で、口縁部内面に沈線が一条めぐらされている。外面はナデ調整の後、1㎜幅のヘラミガキがまばらに施されるが、内面は沈線直下まで1㎜幅の圏線ミガキが密に施され、光沢を帯びる。口縁端部は若干外反ぎみに丸くおさめられている。これらの特徴からおそらく13世紀前葉の所産と考える。6は青磁碗で、細片のため正確な口径は不明である。薄く透明感のある褐色がかった釉が施され、13世紀代の所産と考えられる。7の瓦器椀は内外面にナデ調整が認められる。底部はほぼ欠損しているが、おそらく形骸的に、高台の位置に指先で丸を描くだけか、もしくはそれもしない最終段階の形態の瓦器と考えられる。14世紀の所産と考える。

このように第1面で検出した遺構埋土もしくは第1面で検出した遺物は、中世の土器を主体としつつ、古代の土器を若干含む。7の存在から、第1面が形成されたのは14世紀以降の時期と考えられる。

8は第2面（第4層上面）の精査時に検出した土器で、布留式期の甕である。口縁部内面はハケ調整後ナデ調整する。口縁部外面は摩滅が著しく調整方法は不明だが、頸部外面にはヨコナデが施される。頸部直下の体部内面はおそらくナデ調整とみられる。4世紀のものとみられる。

9～12は第4層出土遺物である。9は須恵器の鉢で、口縁端部は若干凹面状を呈する。体部外面は頸部の屈曲部より下の部分に均一に薄く炭素が付着する。9世紀後葉の所産と考える。10は土師器の煮沸具の把手で、断面形は隅丸長方形である。表面はユビオサエの後、雑なナデ調整でしあげるが、本体との接合部分には若干ハケメが残存する。8～9世紀の所産と考える。11は土師器の皿で、硬質な印象を受ける。体部外面には不明瞭な二段のヨコナデが施されるが、ナデが弱いためか、ユビオサエの痕跡が若干残る。口縁端部は丸くおさめられている。内面にはハケ状の工具で横方向にナデ調整を施す。13世紀前葉の所産と考える。12は須恵器の杯身で、口縁部を欠いている。底部は比較的丸みを帯び、水平方向に短くつまみ出した受部が付く。体部外面に施された回転ヘラケズリは、体部の三分の一弱を占める。6世紀の所産である。

このように、第2面および第4層から検出した遺物は古墳時代から古代の土器が大半を占めるが、ごくわずかに中世の土器を含む。第3層、第4層の遺物の出土状況から、第2面の形成時期の上限は13世紀前葉、下限は14世紀にもとめたい。

13～31は第5層出土の遺物である。13は須恵器鼎（ハソウ）で頸部外面に細かくて密な櫛描波状文が3条以上施される。最下段の波状文の下端部は、回転ナデと重なっており、わずかに模様が消えている。6世紀の所産とみられる。14は庄内式期終末から布留式期初頭の複合口縁壺のミニチュアとみられる。頸部から体部上端にかけての破片で、頸部と口縁拡張部との境の粘土接合部分で剥離している。頸部は内外面とも丁寧にヘラミガキが施され、表面は光沢を帯びていたとみられるが、外面は全体にやや摩滅する。体部内面は頸部直下までケズリ調整を施す。頸部外面に断面三角形の貼付け突帯が付され、その上面と側面に薄いヘラ状の工具で細かい刻目が施される。3世紀中頃の所産ではないかと考える。15は須恵器の杯蓋で、若干焼け歪む。天井部は比較的丸く成形されており、頂部から二分の一から三分の一程の範囲に回転ヘラケズリを施す。内面には回転ナデの後、天井部に一方向のナデを施す。6世紀のものである。16も須恵器の杯蓋で、15と復元口径はほぼ等しいが、こちらの方が若干古い時期の形態的特徴をとどめる。口縁端部は内傾し、わずかに凹面状をなす。口縁部と天井部の境の稜線は鈍く、その上下をやや強めの回転ナデでくぼませることでわずかに突出部をつくりだす。天井部は丸みを帯び、全体の三分の二程度の範囲に回転ヘラケズリを施す。6世紀のものである。17は布留式期の甕である。

頸部から若干外反させつつ、直立ぎみに口縁部を立ち上げ、口縁端部をわずかに外反させて丸くおさめる。口縁部は内外面ともヨコナデを施すが、口縁下端部外面にユビオサエの痕跡が残る。体部内面は頸部からやや下がったところまでケズリ調整を施す。4 世紀の所産である。18は庄内式期の甕とみられる。全体に厚みをもち、体部内面には屈曲部までケズリ調整が施されるため、頸部と体部の境に明瞭な稜線が入る。外面は全体に煤が付着し、3 世紀のものと考える。19 は庄内式期後葉の小型器台の受部である。内面は丁寧にヘラミガキが施されて光沢を帯びるのに対し、外面のヘラミガキ調整は雑で、その後に口縁部内外面にヨコナデを施したとみられる。20 は弥生時代の甕である。口縁端部は先端をつまみあげつつ、丸くおさめる。外面は縦方向のハケ調整の後、口縁部に強いヨコナデを施す。口縁部内面は横方向のハケ調整の後、ナデ調整するのに対し、体部内面は頸部までケズリ調整を施す。21 は庄内式期以降の時期の甕で、口縁端部は欠損している。口縁部は内外面ともヨコナデ調整し、体部外面は縦方向のハケ調整、内面は頸部よりやや下がったところまでヘラケズリ調整する。内面は全体に煤が付着する。22 は弥生時代後期の土器で、内面に炭化物が若干付着していることから、甕の底部の可能性が高い。底部外面に、平行する 2 本の直線が線刻されている。内面はハケ調整後ナデ、外面はナデ調整を施す。

23 は弥生時代後期後半の壺で、長頸壺の最終形態のものではないかと考える。頸部外面はハケ調整の後、ナデ調整するが、内面は摩滅のため調整方法は不明である。24 は弥生時代後期後半の有稜高杯で、内面にはハケ調整後ヘラミガキが施されている。ヘラミガキは口縁部から杯部との境目まで密に施されるが、杯部では逆にまばらなため、ハケメが残存する。外面には縦方向のヘラミガキを施したとみられるが、摩滅によりその痕跡は不明瞭である。25 は弥生時代後期の高杯の脚部の破片で、脚部の上端に杯部の接合痕が認められることから、挿入付加法で成形されたとみられる。26 は弥生時代後期の甕の底部で、底部外面から体部にかけて黒斑があり、内面には若干煤が付着する。体部外面はタタキ調整、内面はケズリ調整を施す。

27 は弥生時代後期の壺である。口縁部は粘土を貼り足して垂下させ、波状文で加飾する。頸部外面と口縁部内面にはハケ調整を施す。28 は弥生時代後期後半の器台で、27 と同様に口縁部は粘土を貼り足して垂下させ、その上端と下端に一条づつ凹線をめぐらせる。おそらく受部が屈曲して上方で外反する、高杯に似た形態の器台と考えられる。29 も弥生時代後期後半の器台で、内面はナデ調整、外面はユビオサエ後ナデ調整を施す。

30 は打製石剣の先端部とみられ、風化のため全体に若干白色化している。A 面の中央部に主要剥離面が残存しているのに対し、B 面中央部には礫面が残存する。このことから片面に礫面を含んだ大型の板状剥片を素材としたとみられる。断面形は扁平な杏仁形で、両面とも切先に鎬が通る。31 は剥片で、片面は主要剥離面からなり、礫面に直接打撃を加えて割取った剥片であることがわかる。その裏面は主要剥離面の打点と直交する方向から交互に打撃を加えていることから、打面調整の際に生じた剥片ではないかと考える。表面の風化により、全体に若干白色化している。30 と 31 はいずれもサヌカイト製である。

以上のように、第 5 層には弥生時代後期から古代の遺物が含まれるが、その中でも主体となるのは弥生時代後期後半から古墳時代前期の時期のものである。

32 ～ 34 は側溝等を掘削している際に出土したもので、第 5 層もしくは第 6 層のいずれかに帰属する。

32 は庄内式期の複合口縁壺の頸部で、体部と頸部の境に断面三角形突帯を貼り付ける。突帯の上端には刻目を付す。頸部内面には縦方向のヘラミガキ、体部内面にはユビオサエもしくは縦方向の強いナ

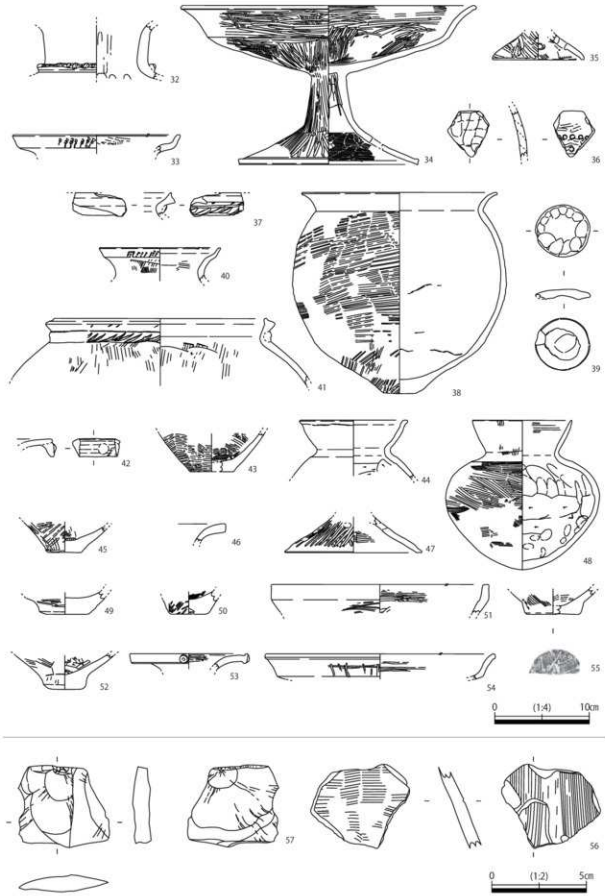


図34　太田遺跡2019－4出土遺物（2）

デを施すとみられる。外面の調整方法は摩滅により不明である。33は弥生時代後期後半の受口状口縁甕の口縁部と考える。受部外面に右上がりの刺突列点文が付されている。受部内面はハケ調整後、ナデ調整を施す。34は後期後半の高杯で、脚部は挿入付加法で杯部と接合されている。外面は口縁部から裾部まで縦方向のハケ調整を施した後、ヘラミガキ調整を施す。杯部内面は口縁部に横方向のヘラミガキ調整を施した後、杯部に縦方向のヘラミガキ調整を施す。脚部内面は屈曲部より上方にナデ調整を施した後、屈曲部より下に横方向のハケ調整を施し、裾端部にヨコナデ調整する。

35・36は第6層出土遺物である。35は弥生時代後期後半の高杯の脚部で、脚裾部の穿孔はおそらく4箇所あったと考えられる。外面は主にヘラミガキ調整、内面はハケ調整後にナデ調整を施す。36は弥生時代後期の壺の破片とみられ、体部外面を波状文と竹管文で加飾するが、模様に精巧さは感じられない。内面に縦方向の強いナデ調整が施されており、上方にむかってややすぼまる器形であることが類推でき、外面にはミガキ調整を施す。この時期にも装飾が残る広口壺や複合口縁壺ではなく、短頸壺の可能性が高いのではないかと考える。

37～39は第3面精査時に検出した。37は弥生時代後期の鉢で、体部と口縁部との境の屈曲部にヘラ状工具で右上がりの刻目状の圧痕を施した貼付け突帯を付す。口縁部下端には、貼付け突帯に圧痕を付けた際の工具痕が認められる。38は9土器として取り上げた土器である。庄内式期の第Ⅴ様式系譜の甕で、体部は球形に膨らみ、体部外面には連続螺旋タタキが用いられる。内面には粘土の接合痕が残る。39は土製の円板状の破片である。A面の周縁にユビオサエの圧痕がならび、B面の周縁には粘土接合箇所から粘土紐がはがれた痕跡が認められるとともに、中央にユビオサエの痕跡が一つ残る。これらのことから笠形の甕蓋の頂部片の可能性が考えられる。

40～57は第3面で検出した遺構埋土から出土した遺物である。40は7溝で出土した弥生時代後期後葉の受口状口縁の甕で、口縁部外面にはヨコナデ後、右上がりの刺突列点文を施す。口縁部以外は内外面ともハケ調整の後、ナデ調整する。41は6ピット出土の弥生時代後期の甕で、内外面とも若干煤が付着している。頸部に刻目を施した貼付け突帯が付されている。刻目を施した際のヘラ状工具の痕跡が口縁部下端に残存する。刻目を付した後、突帯の上半部を軽くヨコナデしたとみられる。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、上端部を若干つみあげるようにして丸くおさめる。体部は内外面ともハケ調整の後、ナデを施す。42は15土坑から出土した弥生時代後期の土器である。口縁端部を垂下させ、端面の上辺と下辺に1条づつ凹線を配し、円形浮文を付す。口縁端部の文様構成や器形から、器台の可能性がやや高いと考えるが、壺の可能性も否定できない。43は25土坑出土遺物で、弥生時代後期の甕である。外面は底部から体部までタタキ調整、内面にはハケ調整を施す。44は8溝出土遺物で布留式期の壺である。体部外面は摩滅により調整方法は不明だが、体部内面は頸部からやや下がったところまでケズリを施したとみられる。45は20溝出土遺物で弥生時代後期の甕である。外面は連続螺旋タタキ調整を施した後、粗い縦方向のハケ調整で、底部外面はケズリ後ナデ調整を施したとみられる。内面はハケ調整後にナデ調整する。46・47は19溝出土遺物でいずれも弥生時代後期の土器である。46は器台の口縁部ではないかと考える。47は高杯の脚部で、おそらく中実の柱状部に、ラッパ状に開く裾部が取り付く形態のものと考える。裾部の外面はヘラミガキ、内面は上半をナデ調整、下半には横方向のハケ調整を施すとともに、端部は内外面ともにヨコナデ調整する。

48～53、57は21溝出土遺物である。48は古墳時代前期の土師器の壺で、全体に若干ゆがむ。外面の調整は、口縁部には縦方向にハケ調整を施した後、ヨコナデを施すのに対し、体部には横方向にハ

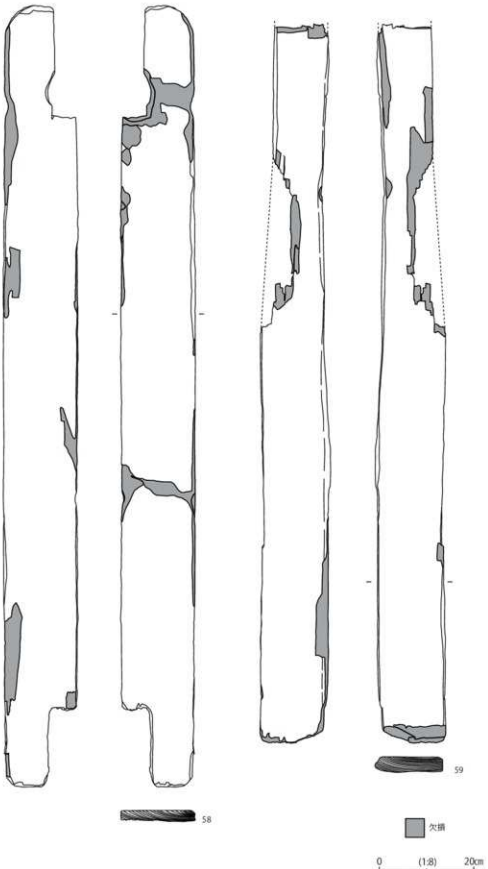


図35　太田遺跡 2019 － 4出土遺物（3）

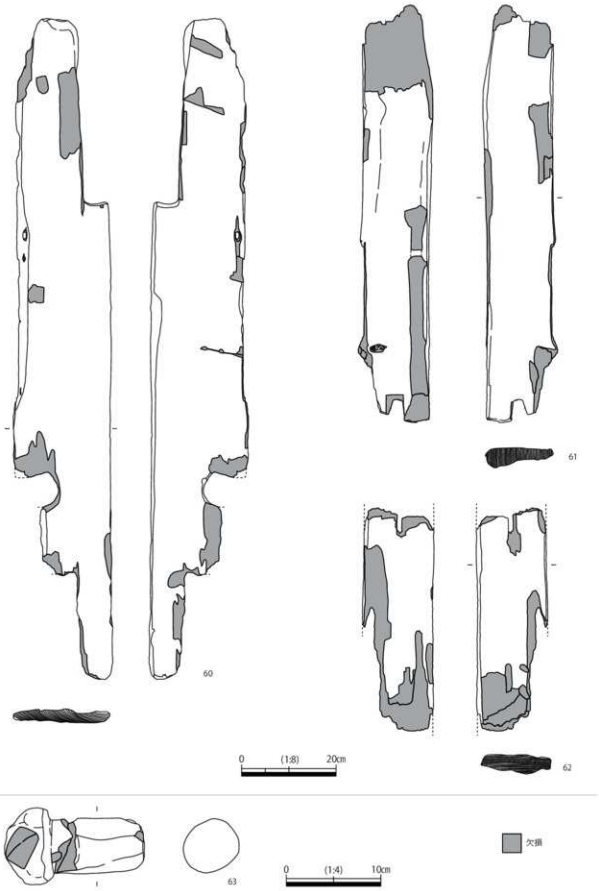


図 36　太田遺跡 2019 － 4 出土遺物（4）

ケ調整を施した後、底部から体部下半にナデ調整を施す。内面には粘土の接合痕やユビオサエの痕跡が顕著に残る。49 は弥生時代後期の土器の底部片で、体部外面はタタキ調整の痕跡が認められるが、内面は摩滅により調整方法は不明である。50 も弥生時代後期の土器の底部である。内面がすすけていることから、甕の可能性が高い。体部外面はタタキ調整、内面はハケ調整する。51 は弥生時代後期の壺の口縁部である。口縁端部は強いヨコナデが施されて若干凹面状を呈する。口縁部内面は横方向のハケ調整を施した後ヨコナデを施したとみられる。52 は弥生時代後期の土器の底部で、体部の球形化が進んだ時期のものとみられる。体部外面はハケ調整、内面はケズリ調整する。53 は弥生時代後期後半の小型器台の口縁部とみられ、口縁端部を円形浮文で加飾する。内面には横方向のヘラミガキ調整を施すが、口縁端部および外面はヨコナデ調整する。57 はサヌカイト剥片で、全体に著しく風化しており、白色化している。A 面は切り合う 2 枚のネガティブ面、B 面は主要剥離面からなる。おそらく打面調整の際に生じたものと考えられる。

54 ～ 56 は 5 溝出土遺物である。54 は弥生後期の高杯で、内面はヨコナデ調整後に粗いヘラミガキ調整を施す。外面はナデ調整の後、横方向の後に縦方向の粗いヘラミガキ調整を施す。55 は弥生時代後期土器の底部で、底部外面に木の葉の圧痕が残る。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はハケ調整後にナデ調整を施す。56 は弥生時代後期の短頸壺と考える。線刻が付されるが、何を描いたものかは判然としない。時期的にみて逆 U 字形もしくは U 字を連ねたような記号文の一部の可能性が高いと考える。

59・60・62 は第 2 面で検出した 3 板材で、58 は第 3 面検出 12 溝埋土から出土したものである。それ以外の木製品は第 3 面を覆う土層から出土した（図 35・36 参照）。58 は全体に均一な厚みで、丁寧に面をつくった板材で、そり・ゆがみも認められない。両端には長辺の同じ側に L 字状の切り欠きがなされ、柄（ホゾ）をつくる。片方の柄（ホゾ）の付け根は圧力がかかったためか若干細くなっているが、他方の柄（ホゾ）の付け根には明瞭な変形は認められない。他の部材と組み合わされて用いられたものとみられる。板目取りされているとみられ、大きさや強度から、建築部材の可能性がある。59 は切り欠きのない板材である。えぐれている部分は後世に生じた欠損である。板目取りされているとみられ、一方の短辺が他方の短辺に比べて若干細くなっている。全体におおむね均一な厚みである。58 と同様、大きさや強度から建築部材の可能性がある。60 は若干欠損箇所が多いが、58 と同様に切り欠きのある板材とみられる。片方の長辺端部には L 字状の切り欠きがなされ、柄（ホゾ）をつくる。もう片方の端部に近い箇所にも切り欠きがなされるが、前述の切り欠きとは形状がことなる。板目取りの材とみられ、表面には年輪に平行する方向で若干凹凸がみられるものの、おおむね均一な厚みを呈する。61 は柾目取りの板材で、片方は明瞭な平坦面をもつが、全体的に若干丸味を帯びる。片方の短辺中央に切り欠き、もしくは柄（ホゾ）孔がつくられていることから、本品も別の部材と組み合わせて使われたものと捉えられる。62 は板目取りの板材とみられるが、両端部は折損しており元の形状や長さは不明である。63 は用途不明木製品である。表面はおおむね摩滅しており、人為的に加工されているのは明白だが、加工痕は不明瞭である。別の木製品を作成している際に生じた端材や、円柱状の建築部材の端部に作られた、柄（ホゾ）の部分、男性器を模した祭祀にともなうもの等の可能性が考えられる。

第６節　小結

太田遺跡における土地利用のあり方を考えるうえで、安威川を欠かすことはできない。大規模開発が本格化する以前に作成された地形図や航空写真をみると、耕作地の土地区画に埋没河川の痕跡をうかがうことができる。これをみると、当地を含めた低～中位段丘上においては、特に頻繁かつ顕著な流路変更が生じたことがうかがえる。当調査区で検出した地山も、安威川の旧流路が当調査地上を走っていた際に形成された河川堆積層とみられる。これは遅くとも弥生時代までには埋没したとみられるが、太田遺跡で明確かつ継続的な集落域が構成されるようになるのは弥生時代後期以降のことである。

前回の発掘調査では今回の調査区の北側において、弥生時代前期の遺物が出土している。また今回の調査でも、微量ではあるものの弥生時代中期以前のものとみられる弥生土器が出土していることから、近辺に弥生時代前～中期の集落域があった可能性はある。しかしおそらくそれは、きわめて小規模かつ短期的なものだったのではないかと考える。

弥生時代後期以降になると、埋没低位段丘上に活動領域が拡大したことが、既往の調査成果からもうかがえるが、今回の調査における当該期の遺物の出土状況もその証左となろう。水利技術上の限界もあり、この時期に段丘上に生産域を構築することは技術的にむつかしいとみられ、生産域は沖積地に設けられたとみられる。ただ第３面における溝の検出状況からもわかるように、この段階ではまだ安威川の旧流路もしくはその支流からの堆積活動が活発だったため、沖積地はその影響を受けやすかったと考えられる。そのため生産域は沖積地の中でも、自然堤防等の微高地を選んだ局所的なものだったとみられる。一方、当該期の集落居住域は、生産域に近接するものの耕作地には適さない埋没低位段丘上が選定されたと考えられる。第５層以下の遺物包含層や遺構面で、多量に検出した弥生時代後期から古墳時代前期の土器は、主に当調査地より高所に位置する集落居住域から転入したものと考えられる。出土遺物には細片で摩滅が著しいものと、比較的残存状態のよいものの二者がみられた。あまり摩滅していない土器は、調査地に隣接する集落居住域から転入したと考えられる。

当地における安威川の堆積作用は、古墳時代中期までの間に徐々に沈静化し、古墳時代後期以降は安定化したのではないかと考えられる。その一方で、古墳時代中期から後期における遺物の出土量は減少することから、調査地近辺に所在した弥生時代後期以来の集落分布は、古墳時代中期以降に変化したことがうかがえる。

古代以降になると、再び土器の出土量が増えることから、近辺における人々の活動が活発化するとみられる。当調査地が明らかに生産域に含まれるのは中世以降のことだが、それに先立つ時期から土壌に変化が生じていることが、土層観察からうかがえた。具体的には古墳時代までの遺物を含む第５層は、砂粒がきわめて細かく粘性の強い湿地堆積層で、これは栽培植物の生育環境には適さないものである。しかし第４層を経て、中世の耕作土層である第３層になるにつれて、徐々に細～中砂の含有量が増えるとともに、粘性が弱まる傾向がみてとれた。このことから調査地を含む沖積地一帯に、近隣の河原から運んだ砂をすき込む等して、古代以降は随時土壌改良がはかられたのではないかと考える。そのような土壌改良は、中世以降も継続して続けられ、近世以降は耕作地のかさあげがはかられる等、地形改変を含む大規模なものに移行したとみられる。

第５章　太田遺跡・太田城跡 2019 －１の発掘調査成果

第１節　基本層序と調査の概要

第４章第１節でも述べたように東芝大阪工場建設に先立って大規模な造成が行われたことにより、地形の高低がならされたため、調査地は現在ほぼ平坦な地形である。ただし、調査地の北側には、現在も部分的に、西側の安威川の河川敷にむけて徐々に下る棚田が残存しており、同様の景観が当調査地の西側や南側にも展開していたことが類推できる。

重機で表土および戦後の盛土を除去したところ、富田台地上にあたる部分では、盛土を除去した段階でおおむね最終遺構面の基盤層である段丘礫層を検出した。ここでは造成が行われる以前はあったはずの耕作土層も、調査区の南寄りの部分を除くと認められなかった。このことから造成工事に際しては、地表面が大規模に削平されたとみられる。

後述するが、中世以降に形成されたとみられる遺構の埋土から古代以前の時期の遺物がわずかに混入することから、かつては台地先端部分にも古代以前の時期の遺物包含層が存在していた可能性が高いのではないかと考える。ちなみに盛土には、富田台地上を切り広げた際に発生した土砂が用いられたとみられ、遺構面の基盤層である地山ときわめて似た土質である。

一方、調査区の西側と南側には、安威川の浸食作用を受けた段丘崖が存在していたとみられ、部分的に傾斜面を検出した。調査区の北側に現在も残っている棚田をみると、その落ちは安威川の現在の流路に平行するように、さらに北側にものびていたことがうかがえる。このことから段丘の縁辺にあたる部分は、斜面際を造成しながら棚田状の耕作地がつくられたことがわかる。調査区南側壁と、傾斜地にあたる２落込みに直交する方向で設けた土層観察用断面の観察・記録を通してその過程を検証するようつとめた。

台地上の調査区南西隅で検出した落込み部分で認めた基本層序を以下に示すが、前述したように調査区の大部分では盛土層を除去した段階で最終遺構面を検出した。

盛土層　東芝大阪工場建設・解体にともなうと考えられる盛土ならびに造成土層である。

第１層　東芝大阪工場建設まで営まれていた近～現代の耕作土層である。近世から現代にかけての時期である。調査区北西隅と、南寄りの部分で検出した。

第２層　近世の耕作土層である。遺物の主体は近世の磁器・陶器である。調査区北西隅の段丘斜面部分につくられた棚田に堆積する。

第３層　棚田造成のための整地層である。大きく３層に大別できる。整地層の中層と下層には、それにともなう耕作土ないし床土が部分的に残存する。遺物の含有量は少なく、磁器・陶器・土師器等が含まれる。調査区北西隅の段丘斜面部分を耕地開発する際に段階的に敷設されたものである。

第４層　古墳時代から古代の遺物を含む包含層である。調査区北西隅の段丘斜面に部分的に堆積していた層である。

第５層　段丘礫層からなる自然堆積層で、本調査の最終遺構面の基盤層である。

第２節　第１面の調査成果

当調査地は、太田遺跡の遺跡範囲に含まれるとともに、中世城郭の伝承が残る太田城跡の推定地にも含まれている。富田台地上が耕作地として本格的に開発されるようになるのは、溜池と基幹水路とを体系的に構築することが技術的に可能になる中世後半以降のこととみられる。調査地は台地の縁辺部に位置しており、弥生時代後期以降には耕地開発の対象となる沖積地に面していることから、弥生時代から古代にかけての時期にも、集落域として利用された可能性は十分ある立地である。

調査区の大部分を占める平坦部においては、重機で現代の盛土を除去した段階で段丘礫層が露出し、その上面で遺構を検出した。したがって当調査地において検出した遺構面は、調査区南西隅の２落込み部分を除くとおおむね１面である。その一方で、遺構埋土や調査区南西隅で検出した落込み埋土から、古墳時代から古代の遺物も微量ながら出土したこと、段丘斜面で部分的に古代の遺物包含層が残存していたことから、古代にさかのぼる集落の居住域が存在していたことが類推できる。その時期の遺構や遺物包含層は、工場建設にともなう造成の際、大規模に削平されたとみられるが、中世以降の開発で消失したものもあったのではないかと考える。

第１面の標高はおおむね 18.2 ～ 19.0m と平坦な印象を受けるが、調査区西寄りの部分と南端部で、西もしくは南にむけて標高が下がる傾向がみられた。戦後の造成にともなう盛土を除去した段階で、造成前に存在した耕作土が分布していたのは、調査区南西隅の部分と南辺部に限られる。なお、平坦部中央には工場の建物の基礎や埋設管設置にともなう大規模な攪乱がいくつもみられた。

第１面で検出した遺構は溝・土坑・ピットで、建物の柱穴等は検出しなかった。遺構埋土の出土遺物から、それらはおおむね中世に形成されたものとみられる。遺構の検出状況は、南北方向を指向する１溝の東側と西側とで様相が若干ことなることから、以下ではまず溝の記述からはじめ、それに関連する遺構を順次取り上げたい。遺構の中には残存深度がきわめて浅いものもあったが、上述した理由からそれらの遺構の上部は、かなり削平を受けていると考えられる。

第１項　遺構

１溝は座標北に対して若干西に振るものの、おおむね南北方向を指向する直線的な溝である。溝幅は３m前後、深さは１m前後でほぼ一定している印象を受けるが、北にむけて徐々に溝幅が狭まるとともに浅くなるのは、工場建物の建設にともなって、遺構上部がより大きく削平を受けたからとみられる。溝断面は逆台形で、平坦に掘られた溝底から側壁が直立的に立ち上がる。簡単には飛び越えられない溝幅だが、検出範囲に関してみる限り、溝の東西を行き交うための施設を認めることはできなかった。

溝底の標高は北から南にかけて徐々に下がる。ちなみに検出範囲の溝の北端部と南端部との比高差は50cm強だった。ただ溝内を常時水が流れていたわけではなく、通常は澱んだ状態だったことが理土の堆積状況からうかがえた。溝埋土の最下層には風化した地山の再堆積層が認められ、それより上層には粘性が強く、有機物を多く含んだ止水性堆積とみられる微～細砂が堆積する。

１溝の北と南はそれぞれ調査区外に延長するが、溝の南端から２落込みの南東端に連なる丘陵斜面までは、おそらくそれほど距離はないとみられる。もし、溝の延長部分が斜面に到達しているのであれば、溝内に溜まった水は斜面下に向かって流下し、水が溜まりにくい状態だったのではないかと考える。し

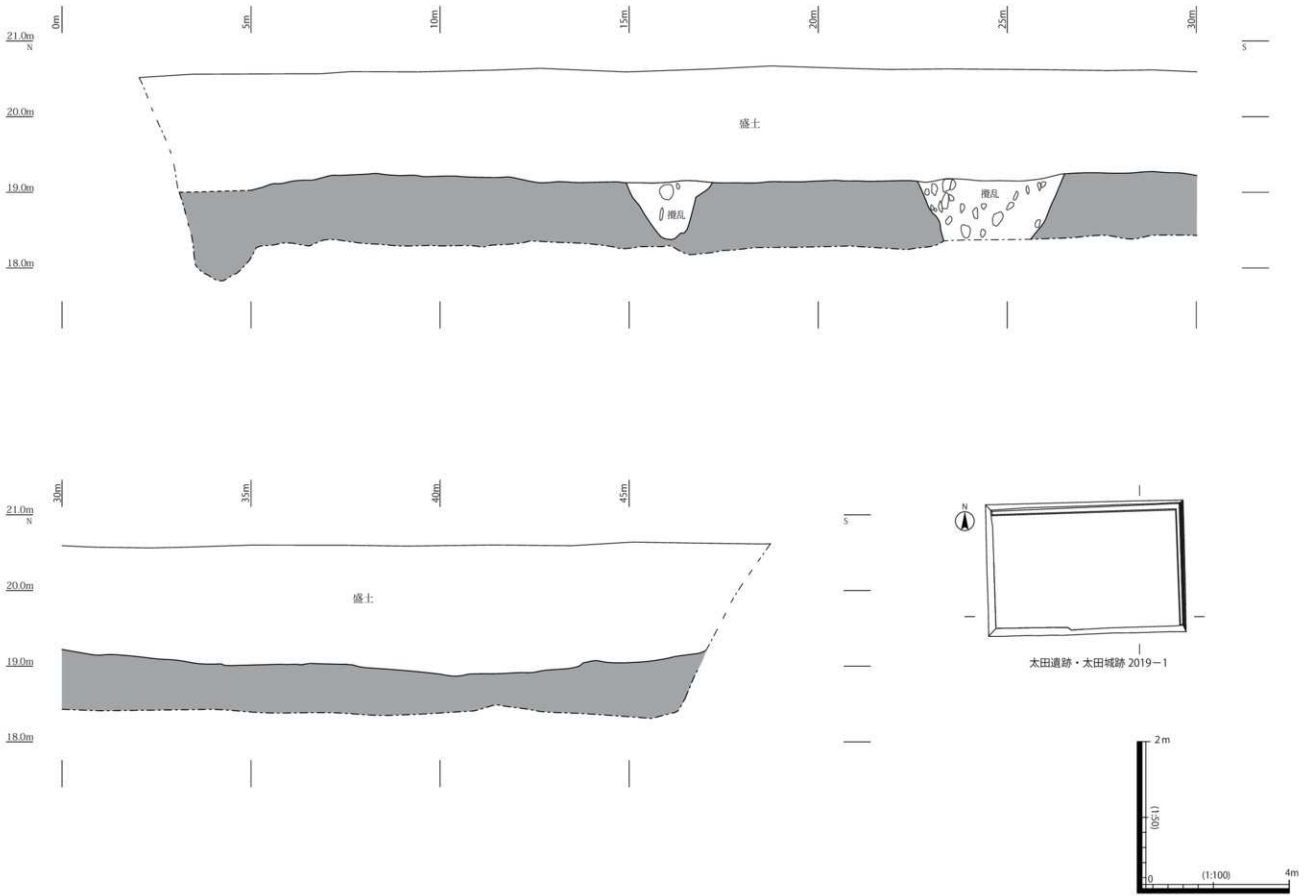
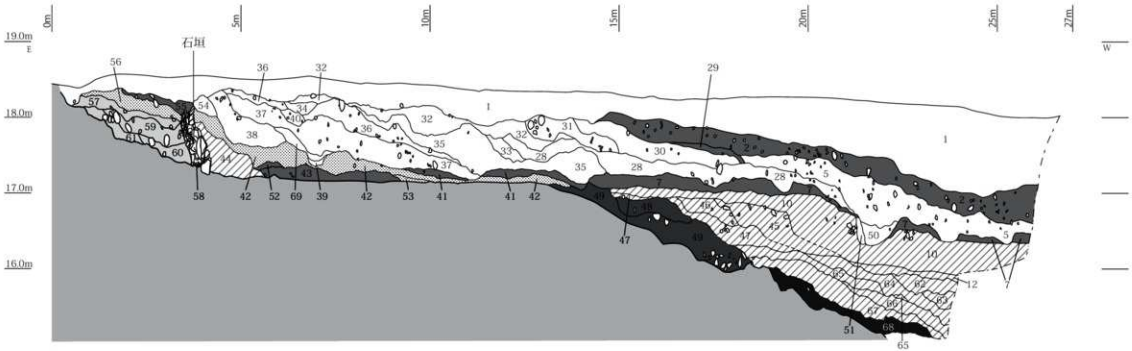
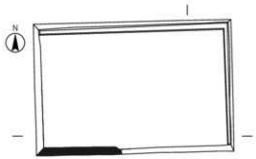
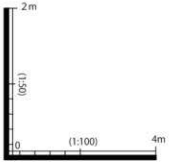

0m
5m
10m
15m
20m
25m
30m
21.0m
N
S
20.0m
19.0m
18.0m
盛土
攪乱
攪乱
30m
35m
40m
45m
21.0m
N
S
20.0m
19.0m
18.0m
盛土
N
太田遺跡・太田城跡 2019－1
2m
(1:50)
0
(1:100)
4m

図 37　東壁土層断面







1	7.5YR7/6	橙色	細砂混粘質中～粗砂	(φ20cm以下の円礫を多量に含む。)	盛土層
2	7.5YR6/1	褐灰色	微砂混粘質細砂	(植物遺体と若干のφ5cm以下の円礫含む。)	第2層
5	2.5Y6/2	灰黄色	中～粗砂混粘質細砂	(6、7のブロック土と、地山の黄褐色砂質土ブロックが混入する。)	第3層(整地層Ⅰ)
7	10YR6/1	褐灰色	細砂混粘質微砂	(6に似るが6より粘性強い。)	第3層(耕作土)
10	10Y6/1	灰色	微砂混粘質細砂	(φ2cm以下の円礫を含む。)	第3層(整地層Ⅱ)
12	2.5Y5/1	黄灰色	細砂混粘質微砂	(1に似るがそれより13のブロック土の混入量多い。)	第3層(整地層Ⅱ)
28	2.5Y6/3	にぶい黄色	粗砂混粘質細砂	(5に似るがそれより粘性低い。)	第3層(整地層Ⅰ)
29	10YR5/4	褐灰色	中砂混粘質微砂		第3層(整地層Ⅰ)
30	10YR5/2	灰黄褐色	中砂～小礫混粘質細砂	(地山の礫含む。)	第3層(整地層Ⅰ)
31	10YR6/2	灰黄褐色	中砂混粘質微砂	(φ5cm以下の礫含む。)	第3層(整地層Ⅰ)
32	7.5YR5/4	褐灰色	粗砂混粘質微～細砂		第3層(整地層Ⅰ)
33	2.5Y6/3	にぶい黄色	粗砂混粘質細砂	(黄褐色シルトの地山ブロック含む。)	第3層(整地層Ⅰ)
34	10YR5/1	褐灰色	中～粗砂混粘質微砂		第3層(整地層Ⅰ)
35	10YR5/3	にぶい黄褐色	粗砂～小礫混粘質細砂	(32に似るが32より粘性低い。)	第3層(整地層Ⅰ)
36	2.5Y5/1	黄灰色	粗砂混粘質微砂	(φ5～10cmの礫含む。)	第3層(整地層Ⅰ)
37	10YR6/2	灰黄褐色	粗砂～小礫混粘質細砂	(地山の黄褐色シルトブロックを若干含む。36に似るが36より土壌化弱い。)	第3層(整地層Ⅰ)
38	10YR6/2	灰黄褐色	細～中砂混粘質微砂	(φ5cm以下の礫含む。)	第3層(整地層Ⅰ)
39	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂混粘質細砂		第3層(整地層Ⅰ)
40	2.5Y6/1	黄灰色	中～粗砂混粘質細砂		第3層(整地層Ⅰ)
41	10YR5/1	褐灰色	細～中砂混粘質微砂	(炭化物を含み、若干黒色化する。)	第3層(耕作土)
42	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂～小礫混粘質細砂	(地山の黄褐色シルトブロック含む。)	第3層(床土)
43	N5/0	灰色	細砂混粘質微砂	(若干小礫含む。)	第3層(耕作土)
44	7.5Y5/1	灰色	中砂混粘質細砂	(φ5cm大の礫含む。)	第3層(整地層Ⅲ)
45	10YR6/2	灰黄褐色	中～粗砂混粘質微砂	(地山の礫、黄褐色シルトブロック含む。)	第3層(整地層Ⅱ)
46	10YR6/1	褐灰色	中～粗砂混粘質微砂	(45に似るが地山の礫、黄褐色シルトブロックの含有量多い。)	第3層(整地層Ⅱ)
47	2.5Y5/1	黄灰色	微砂混粘質中～細砂		第3層(整地層Ⅱ)
48	10YR6/3	にぶい黄褐色	微砂混粘質中～細砂	(地山の礫、黄褐色シルトブロック含む。)	第3層(整地層Ⅲ)
49	N6/0	灰色	細～中砂混粘質微砂	(地山の礫を含む。)	第3層(整地層Ⅲ)
50	10YR6/3	にぶい黄褐色	細砂混粘質微砂	(若干炭化物含む。)	
51	5B6/1	青灰色	細砂混粘質微砂	(50に似るが50より土壌化が弱く、グライ化している。)	
52	2.5YR6/3	にぶい橙色	微砂混粘質細砂	(43と明黄褐色のシルトブロックが混じる。)	第3層(耕作土)
53	N5/0	灰色	細砂混粘質微砂		第3層(床土)
54	2.5Y6/1	黄灰色	中砂混粘質微砂	(灰色シルトブロック混じる。)	第3層(整地層Ⅰ)
55	2.5Y6/2	灰黄色	小礫混粘質細砂	(灰色シルトブロック混じる。52に似るが52より粘性強い。)	第3層(耕作土)
56	2.5Y6/1	黄灰色	小礫混粘質細砂	(55に似るが55より土壌化弱い。)	第3層(床土)
57	5Y6/1	灰色	小礫混粘質細～中砂		石垣の裏込め
58	10YR7/6	明黄褐色	礫	(φ10cm大の礫が多い。表面が鉄分で変色しているが、周囲の地山に含まれている礫と同質。)	石垣の裏込め
59	2.5YR6/2	灰黄色	礫混粘質細～中砂	(φ5cm大の礫が多い。地山を切り崩した土。)	石垣の裏込め
60	7.5Y6/1	灰色	細砂混粘質微砂	(植物の地下茎が若干混じる。)	
61	2.5Y5/1	黄灰色	中～粗砂混粘質細砂	(φ5～20cm大の礫を多く含む。地山を切り崩した土。)	石垣の裏込め
62	N7/0	灰白色	中砂混粘質微砂	(灰白色シルトブロック含む。)	第3層(整地層Ⅱ)
63	2.5Y6/4	にぶい黄色	小礫混砂質中～粗砂	(上方および側方に緩転する。)	第3層(整地層Ⅱ)
64	10YR6/1	褐灰色	細砂混粘質微砂	(黄灰色粘質細砂ブロックと小礫含む。)	第3層(整地層Ⅱ)
65	10YR5/1	褐灰色	微砂混粘質細砂	(φ5cm大の礫と68のブロック、灰白色砂質ブロックが混じる。)	第3層(整地層Ⅱ)
66	7.5YR5/1	褐灰色	細砂混粘質微砂	(65に似るが65より若干粘質強い。)	第3層(整地層Ⅱ)
67	10YR6/2	灰黄褐色	中～粗砂混粘質微砂	(黄褐色の地山シルトブロックと、68のブロックが混じる。)	第3層(整地層Ⅱ)
68	7.5YR4/1	褐灰色	細砂混粘質シルト	(φ2cm以下の風化土礫を含む。)	第4層
69	10YR5/2	灰黄褐色	微砂混粘質細砂	(若干植物の根の痕跡あり。)	第3層(整地層Ⅰ)

図38　南壁土層断面

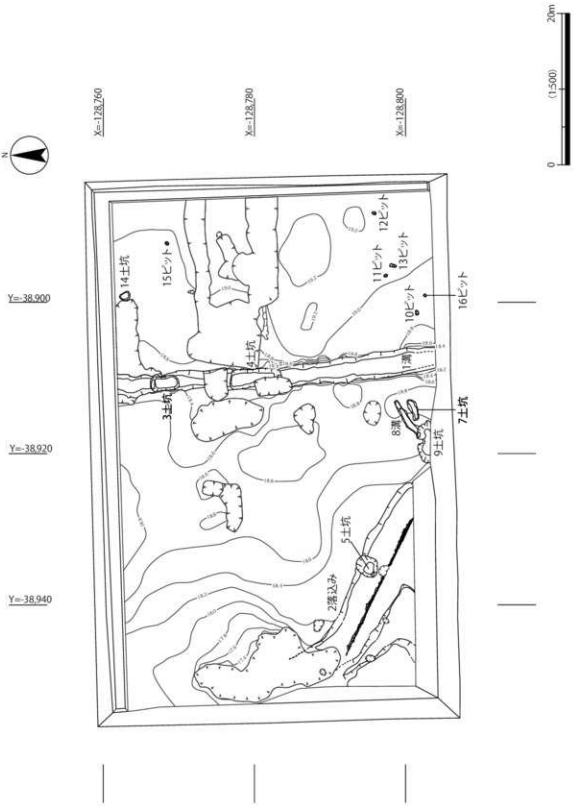

N
X=-128,760
X=-128,780
X=-128,800
Y=-38,900
Y=-38,920
Y=-38,940
0
(1:500)
20m
14土坑
15ピット
3土坑
4土坑
深掘
8溝
7土坑
9土坑
16ピット
10ピット
11ピット
13ピット
12ピット
5土坑
2落込み

図 39　第 1 面　平面

たがって、1溝は斜面の手前で途切れていたか、もしくは溝幅が急に狭まっていた可能性が考えられる。そうであれば、溝が途切れて狭まっている箇所で東西を行き来することができるため、その近隣には土橋や橋が必要なかったのかもしれない。

1溝埋土から図49－68～70の他に、土師器片約40点、須恵器片8点、陶器片3点、瓦器片2点、瓦片2点が出土した。いずれも細片で、器種や時期の判別が可能なものはわずかである。その中でも土師器には摩滅した細片が多い印象を受ける。土師器のなかで器種が判別できたものに、皿もしくはその可能性のあるものが約10点みられた。その中に口縁部が残存するものが2点あった。残存部位の形態的特徴からそれらはいずれも中世のものではないかとみられる。土師器の中には古代以前の可能性があるものも含まれるが、時期判別ができないものが大半である。須恵器には胎土が軟質で、珠洲焼に似たものが1点含まれる。瓦器のうち1点は椀の口縁～体部上半の破片だった。その口縁内面に沈線は施されておらず、また内外面ともにミガキ調整は施されていないことから、13世紀後半から14世紀前半の所産ではないかと類推する。このように1溝埋土における遺物の含有量はそれほど多くない。実測対象とした遺物も含めて考えると、時期判別が可能なものは、13世紀後半から14世紀前半までの時期におさまる傾向が認められた。。

8溝は調査区南端で検出した遺構で、方向軸は北東－南西方向を指す。8溝の東端は1溝の西肩から3m程のところで途切れており、西端は9土坑に切られるが、溝底の標高は南西方向にむけて徐々に下がる。溝幅は1m前後で深さは20㎝弱と全体の規模は小さいが、遺構埋土の土質は1溝と類似する。ただ8溝東端部の溝底の標高は、8溝に最も近い地点の1溝の底部の標高に比べて1m程度高い。

8溝埋土から土師器片2点、須恵器片と瓦器片が各1点出土した。いずれも細片で摩滅しており、器種・時期の特定は難しい。瓦器は椀とみられ、器壁がきわめて薄くて華奢なつくりで、おそらく最終段階のものと考える。須恵器は器壁の厚さが5～6㎜で、おそらく中世の所産と考える。

7土坑は8溝の南側に位置し、平面形態は8溝に平行する方向軸をとる長楕円形である。残存深度はきわめて浅いが、埋土の土質は1溝や8溝に類似する。また底部の標高も北東から南西にむけてわずかに傾斜する。検出距離が短いため土坑としたが、8溝と同様の機能を有した溝の痕跡の可能性があると考える。遺構埋土から須恵器片が1点出土したが、器種や時期の判別はできない。

9土坑は8溝の南西端を切りつつ、斜面際に位置していたとみられる土坑で、南半部は調査区外に延長する。埋土は8溝埋土に比べて若干砂粒が小さく粘性は強いが類似する。底部はほぼ水平だが、南側にむけてわずかに下がる傾向がみられる。遺構埋土から須恵器片と土師器片が各1点出土した。いずれも細片で器種や時期の判別はできない。

3土坑と4土坑は1溝が埋積した後、溝に重ねるように形成された土坑で、7m強離れて南北方向にならぶ。3土坑は長辺3.7m、短辺約2mの隅丸長方形で、平坦な底部から側壁が直立して立ち上がる。底部の標高は、1溝底部からさらに70㎝程低い。4土坑は平面形が長辺7m弱、短辺2.5m前後の隅丸長方形で、ほぼ平坦な底部から側壁が直立気味に立ち上がる。底部の標高は、1溝底部からさらに0.6m程低い。どちらの土坑も肩部からの深さは1m強であり、平面・断面形態ともに類似する。また、遺構埋土に地山の明青灰色シルトブロックや円礫が混入している点でも類似する。遺構埋土に地山のブロック土が混入していることから、当初は土坑の周囲に、土坑掘削時に生じた排土が積み上げられ、それが徐々に崩落して一部が混入した可能性がある。

調査地一帯の地山である段丘礫層は、直径数十㎝以上の円礫を多量に含んでおり、人力で掘削するに

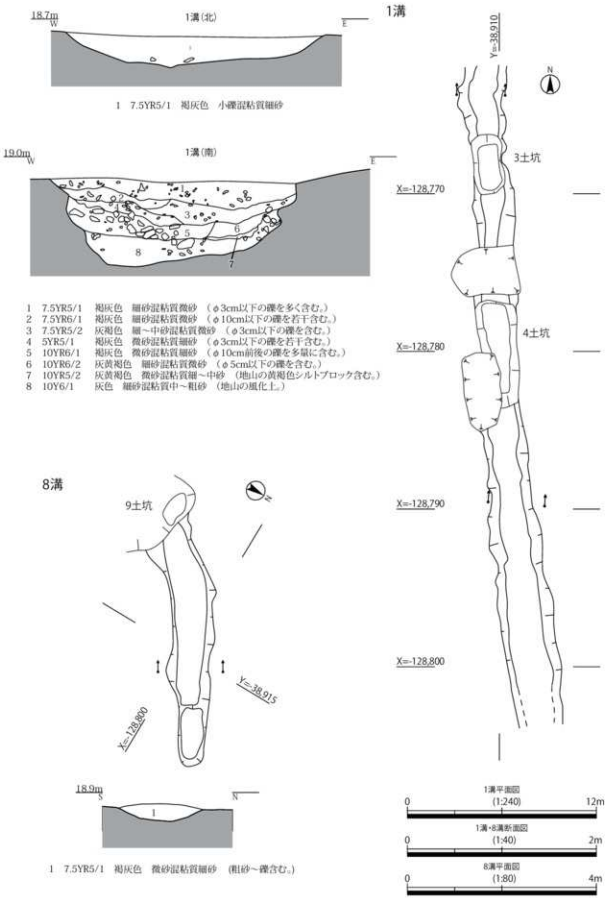
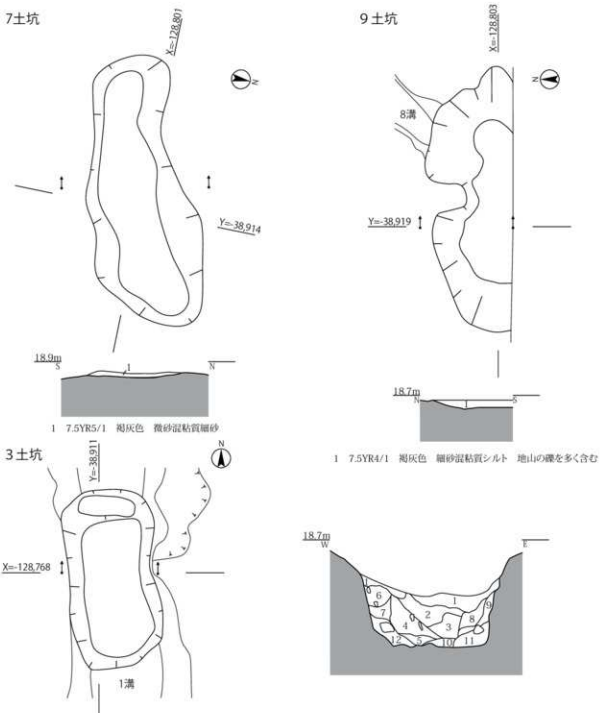

18.7m
W
1溝(北)
E
1　7.5YR5/1　褐灰色　小礫混粘質細砂
19.0m
W
1溝(南)
E
1　7.5YR5/1　褐灰色　細砂混粘質微砂　(φ3cm以下の礫を多く含む。)
2　7.5YR6/1　褐灰色　細砂混粘質微砂　(φ10cm以下の礫を若干含む。)
3　7.5YR5/2　灰褐色　細～中砂混粘質微砂　(φ3cm以下の礫を含む。)
4　5YR5/1　褐灰色　微砂混粘質細砂　(φ3cm以下の礫を若干含む。)
5　10YR6/1　褐灰色　微砂混粘質細砂　(φ10cm前後の礫を多量に含む。)
6　10YR6/2　灰黄褐色　細砂混粘質微砂　(φ5cm以下の礫を含む。)
7　10YR5/2　灰黄褐色　微砂混粘質細～中砂　(地山の黄褐色シルトブロック含む。)
8　10Y6/1　灰色　細砂混粘質中～粗砂　(地山の風化土。)
8溝
9土坑
Y=-38,915
X=-128,800
18.9m
S
N
1　7.5YR5/1　褐灰色　微砂混粘質細砂　(粗砂～礫含む。)
1溝
Y=-38,910
N
3土坑
X=-128,770
4土坑
X=-128,780
X=-128,790
X=-128,800
1溝平面図
(1:240)
0
12m
1溝・8溝断面図
(1:40)
0
2m
8溝平面図
(1:80)
0
4m

図 40　溝平断面

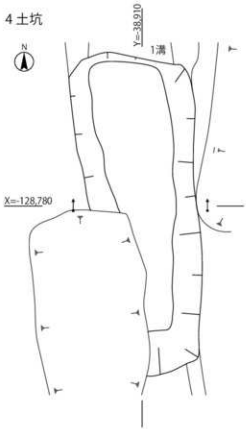


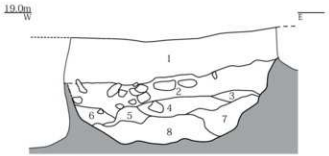
1 7.5YR6/2 灰褐色 細～中砂混粘質微砂 （φ5cm大の円礫含む。）
2 7.5YR6/1 褐灰色 中砂混粘質微砂 （φ5cm大の円礫若干含む。）
3 5Y6/2 灰オリーブ色 細砂混粘質シルト （地山の青灰色シルトブロックを多量に含む, 植物の根含む。）
4 7.5YR5/1 褐灰色 粗砂～中砂混粘質微砂 （地山の青灰色シルトブロック, 植物の根含む。）
5 10YR5/2 灰黄褐色 細砂混粘質シルト （植物の根含む。）
6 7.5YR6/1 褐灰色 中砂混粘質シルト （植物の地下茎含む。）
7 7.5YR6/2 灰褐色 粗砂～小礫混粘質シルト （6に似る。）
8 10YR6/2 灰黄褐色 細砂混粘質シルト （地山の青灰色シルトブロック, 地下茎含む。）
9 10YR6/1 褐灰色 細砂混粘質シルト （8に似るが, 8より土壌化弱い。）
10 10YR6/2 灰黄褐色 シルト混粘質細砂
11 10G6/1 緑灰色 微砂混粘質細砂 （地山の青灰色シルトブロック含む。）
12 10YR6/1 褐灰色 微砂混粘質細砂 （地山の青灰色シルトブロック, 地山に含まれる角礫含む。）

3土坑平面図,7土坑・9土坑 (1:80) 0 4m

3土坑断面図 (1:40) 0 2m

図 41 土坑平断面

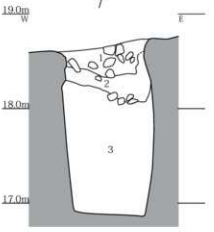




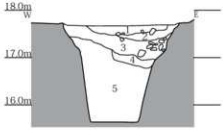
1　10YR5/2　灰黄褐色　小礫～粗砂混粘質微砂
(地山に含まれている角礫が混入する。)
2　10YR6/2　灰黄褐色　小礫～粗砂混粘質細砂
(地山に含まれている角礫が混入する。)
3　2.5Y6/1　黄灰色　微砂混粘質細砂
(φ3cm大の円礫を多く含む。4に似るが4より土壌化弱い。)
4　2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘質微砂
(φ3cm大の円礫を多く含む。炭化物含む。)
5　10YR6/3　にぶい黄橙色　粗砂混粘質微砂
(灰黄褐色粘質細～中砂ブロックと地山の明青灰色粘質シルトブロックが混じる。)
6　10YR5/2　灰黄褐色　小礫混砂質細～中砂
7　7.5GY7/1　明緑灰色　小礫混粘質細砂
(地山の明青灰色シルトブロックとφ10cm以下の角礫含む。)
8　10GY6/1　緑灰色　中砂混粘質シルト
(地山の明青灰色粘質シルトブロックとφ5cm以下の円礫がが混じる。)

4土坑平面図・5土坑
0　(1:80)　4m

4土坑平面図・14土坑
0　(1:40)　2m



1　10YR4/2　灰黄褐色
中砂混粘質細砂
(地山の礫を多量に含む。)
2　10YR4/1　褐灰色
微砂混粘質細砂
(1に似るが1より粘性強い。)
3　2.5YR4/1　赤灰色
細砂混粘質微砂
(地山の礫を多量に含む。)



1　10YR5/2　灰黄褐色　中砂混粘質細砂
(地山の礫を含む。)
2　2.5Y5/2　暗灰黄色　微砂混粘質細砂
3　5Y5/1　灰色　細砂混粘質微砂
(地山の礫を含む。)
4　2.5Y5/1　黄灰色　微砂混粘質細砂
(地山の礫を多量に含む。)
5　5Y4/1　灰色　細砂混粘質微砂
(地山の礫を多量に含む。)

図 42　土坑平断面

は非常な労力がかかるとみられることから、その労力を少しでも軽減するために、すでに段丘礫層が掘り抜かれたことのある場所を選び、これらの土坑が掘られた可能性はあるかもしれない。他方、もともとあった1溝の機能の一部を継承させるために、それらの土坑が造られた可能性もあげられよう。いずれにせよ、これらの土坑が水溜として耕作地に配置されていた可能性はあるのではないだろうか。

3土坑埋土から図49－65・66の他に、土師器皿の破片が1点出土している。口径を復元することはできないが、器壁は薄く、底部から体部への立ち上がりはゆるやかで、明瞭な屈曲はもたない。図49－69にみられる形骸化した二段のヨコナデ調整が、さらに退化したような形態ではないかと考える。4土坑の埋土から出土した遺物は、陶器1点と土師器2点である。いずれも細片で摩滅しており、器種等の判別は難しい。

14土坑は調査区北端部で検出した土坑で、平面形態は長軸長が1.5mのややいびつな楕円形である。大人一人が入れるだけの大きさだが、検出面から2m近い深さまで掘り抜かれていた。土坑の最大径が検出面から40～50㎝下がったところにあるため、断面形は徳利形になっている。これはおそらく土坑内に溜まっていた水で壁面が浸食され、崩落したためと考えられ、井戸もしくは水溜として利用されたのではないかと考える。今回検出した遺構のうち、埋土中の遺物の含有量が最も多かったが、細片が多く、図化できたものは少ない。

14土坑出土遺物は図49－71～73の他に、瓦器片24点、土師器片22点、陶器片1点、須恵器片4点、三足羽釜片1点があった。瓦器はほとんど椀の破片とみられるが、皿も1点含まれる。器壁の厚さは2～3㎜程度のものと4㎜強のものの二者があり、ほぼ同数だった。高台が残っているものが5点程含まれていたが、いずれも断面三角形で、退化寸前のものも数点含まれていた。口縁部等の特徴的な部位が残存しておらず、断定はできないが、器壁の厚みが4㎜強のものもあり、1溝出土の瓦器の破片よりも若干古手のものが含まれる可能性がある。土師器の中には、おそらく中世のものとみられる皿が10点含まれていたが、それ以外は細片で摩滅が著しく、器種・時代の判別はできない。

5土坑は後述する2落込みの最上段で、耕作土を除去した段階で検出した遺構である。もとの平面形は長辺1.5m、短辺1.2m程の隅丸長方形だったと考える。土坑の北辺と南辺とで、標高に1m弱の比高差があり、深さは南辺からみても2m強におよぶ。5土坑が形成された時期には、段丘の縁辺は5土坑を含みこむように南側に広がっていたと考える。斜面部を段状に造成するために最上部を切土した際、5土坑の北辺以外の肩部も削平されたと考える。遺構埋土は有機物を含んで黒色化した粘質細砂で、段丘礫層に含まれる円礫を多量に含み、側壁がオーバーハングする等、14土坑と類似する特徴がみられた。このことから5土坑も、井戸もしくは水溜として使用された可能性を指摘できる。ちなみに5土坑の底部の標高は、14土坑底部の標高より1m強低い。5土坑埋土の出土遺物はそれほど多くなく、土師器片5点、須恵器片3点、瓦質土器片と陶器片が各1点だった。いずれも細片で摩滅が著しく、図化できるものはなかった。土師器には、口縁部の残存率が低いため断定はできないが、図49－67に似た形状の土師器皿が1点含まれることから、中世以降に埋積したと考えられる。

15ピットは唯一、調査区北寄りの部分で検出したピットで、14土坑から南東に約8mのところで検出した。平面形は楕円形で長軸長50㎝強、深さは5㎝である。埋土は地山に似るが、それより粘性が強く、若干黒色化していた。11ピットは長軸長が50㎝強で、深さは5㎝未満ときわめて浅い。埋土は周囲の地山より粘性が強く、若干黒色化していた。13ピットは11ピットに比較的近接して位置し、平面形は長軸長90㎝、短軸長37㎝の長楕円形で、深さは10㎝である。埋土から土師器が1点出土し

たが、細片のため器種・時期の判別はできない。12 ピットは平面形が長軸長 55㎝、短軸長 40㎝の隅丸三角形で、深さは 10㎝強だった。埋土は地山より粘性が強く若干黒色化する。10 ピットは長軸長 65㎝、短軸長 43㎝の楕円形で、深さは 10㎝弱である。16 ピットは 10 ピットに比較的近接して位置し、平面形は直径 40㎝前後のほぼ円形で、深さは 5 ㎝弱だった。出土遺物をともなうのは 13 ピットのみである。

このように今回の調査で検出したピットは、遺構密度は低いものの、1 溝の東側に限られる傾向がみられた。いずれも残存深度はきわめて浅いが、工場建設に先立つ造成等で、遺構上部は大きく削平されたとみられ、おそらく周囲には消失した遺構も多数あったのではないかと考える。

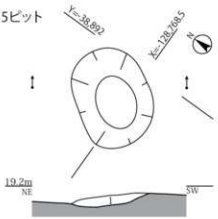
2 落込みは、調査区南西隅で検出した段丘斜面を段状に造成した部分を示す総称としてつけた遺構名である。調査区南壁断面（図 38）や、傾斜面に直交する方向に設けた土層断面（図 45）を観察した結果、数時期にわたって丘陵先端部の斜面を雛段状に切土、およびその段をかさあげないし拡幅するように盛土した様子をみてとることができた。段丘斜面につくられた段状の平場を拡張するために投入された整地層は、大きくみて三段階に分けられる。図 38・図 45 では上から順に整地層Ⅰ、整地層Ⅱ、整地層Ⅲとした。整地層Ⅲには地山の黄褐色シルトのブロック土や、地山に含まれている礫が多量に含まれており、一見すると地山とみまがう土質で、斜面の上部を切土した際に生じた土を、下方に落として盛り付けたとみられる。2 落込みの西半部の斜面際には、古代遺物包含層が部分的に残存していたが、そこでは包含層の上に整地層Ⅲが堆積するのを認めた。整地層Ⅲの後に敷設された整地層Ⅱの下部には、古代の遺物包含層がブロック状に混入する。これにより整地層Ⅱの敷設に先立ってさらに広範囲に段丘斜面が切り広げられた際、地山とともに丘陵斜面に堆積していた古代遺物包含層も大規模に削平されたとみられる。

最上段の平場の法尻には、自然石を用いた石垣が築かれていた。図 45 より石垣の築造時期は整地層Ⅲの敷設後で、整地層Ⅱの敷設前ととらえられる。石垣に用いられた石は、調査地を含む富田台地の基盤層に含まれているもので、石垣の最下段にはやや大きめの石が用いられているものの、二人以上でも持ち上げられないような大きさのものは使用されていない。また石垣の西寄りには比較的大きめの石が用いられているが、中央部から東端にかけての部分では、それより小さい石が用いられる傾向が認められた。さらに比較的大きな石を用いた部分では、石垣の裏に栗石を認めなかったが、東半部の小さな石を用いた部分では径数㎝大の栗石が充填されていた。このことから検出した石垣はすべて同時期につくられたのではなく、後に継ぎ足されたか、あるいはつくりなおされたとみられる。

2 落込みにおける遺物の出土状況から、斜面地の造成や石垣の構築時期を検討したい。整地層Ⅲからは、土師器片が約 40 点、瓦器片 2 点、須恵器片 4 点、白磁碗 1 点、弥生土器片 1 点、弥生時代から古墳時代の土器の破片が 10 点弱出土した。土師器と須恵器には、古代の杯の可能性があるものが各 1 点含まれる。瓦器は椀とみられ、うち 1 点は内面に沈線をもたない口縁部の破片だった。内外面ともにミガキは施されていない。これらのことから瓦器椀は、13 世紀後半以降のものではないかと類推できるが、細片のため断定はできない。整地層Ⅲに含まれる遺物はおおむね古代遺物包含層からの遺物の出土状況に類似する傾向がみられるが、明らかに中世に下る遺物が含まれていた。したがって整地層Ⅲは、13 世紀を上限とする時期に敷設された可能性を指摘できる。

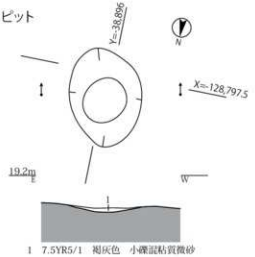
整地層Ⅰ・Ⅱ出土遺物はきわめて少量で、土師器片 7 点、瓦器片 1 点、須恵器片 2 点、陶器片 2 点、染付磁器片 1 点が出土した。いずれも細片で図化できるものはなかった。陶器のうち 1 点は摺鉢、他方

15ピット



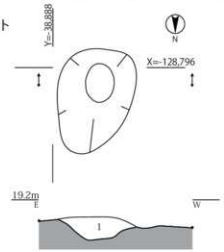
1　7.5YR6/3　にぶい褐色　微砂混粘質細～中砂　（地山の再堆積土に似る。）

11ピット



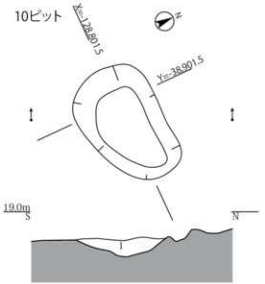
1　7.5YR5/1　褐灰色　小礫混粘質微砂

12ピット



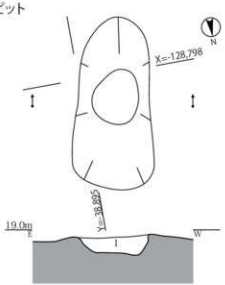
7.5YR5/1　褐灰色　中砂混粘質細砂　（φ5cm以下の礫を多量に含む。）

10ピット



1　7.5YR4/1　褐灰色　細砂混粘質中砂

13ピット



1　7.5YR4/1　褐灰色　細砂混粘質中砂

0　(1:20)　1m

図 43　ピット平断面

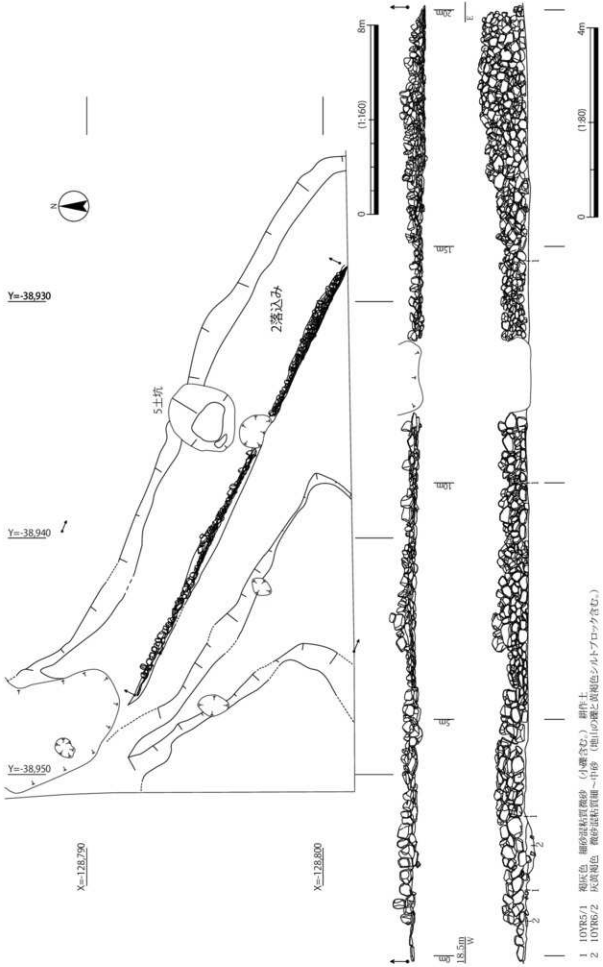
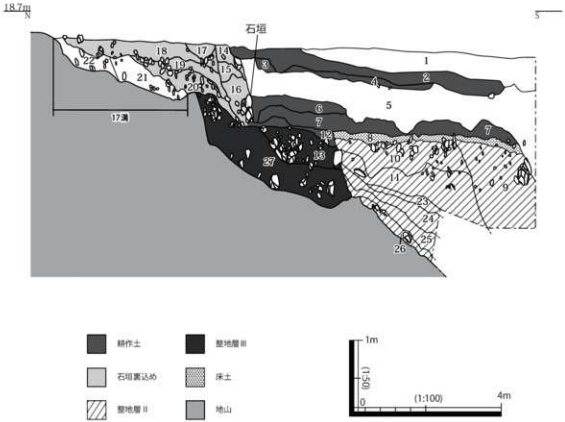


図 44　２落込み・石垣平立面



1　7.5YR7/6　橙色　細砂混砂質中～粗砂　（φ20cm以下の円礫を多量に含む。丘陵部の地山を母材とする。）　盛土層
2　7.5YR6/1　褐灰色　微砂混粘質細砂　（植物遺体とφ5cm以下の円礫含む。）　第１層
3　10YR6/2　灰黄褐色　微細混粘質細砂　（φ3cm以下の円礫と炭化物含む。）　第２層
4　10YR6/3　にぶい黄橙色　中砂混粘質微砂　（アシの地下茎が混入。）　第２層
5　2.5Y6/2　灰黄色　中～粗砂混粘質細砂　（6, 7のブロック上と地山の黄橙色砂質土ブロックが混入する。）　第３層(整地層Ⅰ)
6　2.5Y6/1　黄灰色　細砂混粘質微砂　（φ1cm大の円礫と炭化物含む。）　第３層(耕作土)
7　10YR6/1　褐灰色　細砂混粘質微砂　（6に似るが6より粘性強い。）　第３層(耕作土)
8　N5/0　灰色　微砂混粘質微砂　（小礫を含む。）　第３層(耕作土)
9　10Y6/1　灰色　粗砂～礫混粘質微砂　（φ5cm以下の円砂を多く含む。染付混入。）　第３層(整地層Ⅱ)
10　7.5Y6/1　灰色　細砂混粘質微砂　（13のブロック上含む。10に似るが10より粘性強い。）　第３層(整地層Ⅱ)
11　2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘質微砂　（11に似るが11より13のブロック上の混入量多い。）　第３層(整地層Ⅱ)
12　10YR5/1　褐灰色　細砂混粘質微砂　（小礫含む。）　第３層(耕作土)
13　10YR6/2　灰黄褐色　微砂混粘質細～中砂　（地山の礫と、黄褐色シルトブロック含む。）　第３層(整地層Ⅲ)
14　7.5YR6/2　灰褐色　小礫混粘質微砂　（植物の根含む。）　石垣の裏込
15　10YR6/3　にぶい黄橙色　小礫混粘質細砂　（15に似るが15より粘性あり。）　石垣の裏込
16　10YR5/3　にぶい黄褐色　小礫混粘質細砂　（16に似るが16より小礫の含有量が多く、粘性弱い。）　石垣の裏込め
17　10YR6/2　灰黄褐色　中～粗砂混粘質細砂　石垣の裏込
18　10YR5/1　褐灰色　中砂混粘質細砂　（炭化物含む。）　石垣の裏込め
19　10YR5/2　灰黄褐色　中砂混粘質細砂　石垣の裏込め
20　7.5YR5/1　褐灰色　細砂混粘質微砂　（地山の礫を多量に含む。22に似るが22より土壌化がすすむ。）　石垣の裏込め
21　7.5YR5/2　灰褐色　粗砂～小礫混粘質微砂　（地山の礫を多量に含む。）　17溝埋土
22　10YR5/4　にぶい黄褐色　粗砂混粘質シルト　（地山の再堆積層に似る。）　17溝埋土
23　10YR5/1　褐灰色　粗砂～小礫混粘質微砂　（地山の青灰色シルトブロックを含む。）　第３層(整地層Ⅱ)
24　10YR6/1　褐灰色　細砂混粘質微砂　（地山の青灰色シルトブロック若干の炭化物含む。φ1cm大の礫を含む。）　第３層(整地層Ⅱ)
25　10YR5/2　灰黄褐色　中砂混粘質微砂　（地山の青灰色シルトブロックと灰黄褐色シルトブロックが混りあう。）　第３層(整地層Ⅱ)
26　10YR5/3　にぶい黄褐色　粗砂～礫混粘質微砂　（地山の土と灰褐色シルトブロックが混りあう。）第３層(整地層Ⅱ)
27　10YR5/2　灰黄褐色　微砂混粘質細～中砂　（14に似るが14より粘性強い。）　第３層(整地層Ⅲ)

図 45　２落込み断面

は内面に緑がかった透明の釉薬が施され、見込にトチンの跡が残るもので、いずれも近世の所産とみられる。土師器にはおそらく中世の皿とみられるもの、須恵器には中世の鉢とみられるものが各1点含まれる。このように整地層Ⅰ・Ⅱの出土遺物には、主として中世から近世の遺物が含まれる。

石垣の裏込めを掘削中に出土した遺物は、土師器片と須恵器片が各10点弱、大型の甕とみられる陶器の破片が1点、瓦片と瓦器片が各1点だった。いずれも細片で図化できるものはなかったが、土師器には古代の煮沸具が1点、須恵器には杯と片口鉢とみられるものが各1点含まれる。瓦は裏面に布目の圧痕があり、瓦器はおそらく最終段階の椀とみられるものであった。このように、石垣の裏込めに含まれていた遺物は古代から中世のものを主体とし、近世の遺物は含まれなかったが、石垣を撤去している際に、石と石の隙間から近世の染付磁器の破片1点と須恵器片2点、土師器片1点が出土した。このことから、石垣の構築時期は近世と考えられる。

以上のことから丘陵斜面の耕作地造成の時期は、13世紀後半の時期にさかのぼりうることがわかる。ただその段階の造成は小規模なもので、斜面最上部の緩傾斜部を掘削して設けた平場を主体としながら、その外縁部に切土で生じた土を盛り、耕作面の拡張をはかったとみられる。斜面地の耕作地造成が大規模化するのは近世以降で、その際に最上段の棚田と段丘面との間の法尻にあたる部分には石垣を構築し、さらなる土地の有効活用がはかられたと考えられる。

第2項　遺物の出土状況

遺構埋土や整地層からの遺物の出土状況は前項でふれたので、現代の盛土を除去して検出した遺物の出土状況を述べる。現代の盛土の除去面にわずかに残っていた耕作土層から、土師器片約40点、須恵器片3点、瓦片8点、弥生土器片3点、瓦質火鉢とみられる破片1点、瓦器片4点、陶器片1点が出土した。瓦器はいずれも椀の破片とみられ、口縁部が残存する2点はどちらも器壁の厚みが3㎜弱ときわめて薄く、最終形態のものとみられる。瓦には桟瓦が4点含まれていた。

2落込みで検出した近世以降の耕作土からは、平坦部より多くの遺物が出土した。その内訳は図49－74を除くと土師器片が約35点、陶器片約10点、須恵器片約10点、瓦器片6点、瓦質羽釜片1点、瓦質火鉢片1点、瓦片6点、弥生土器片の可能性があるもの1点、染付磁器片が1点だった。陶器には摺鉢・土鍋等、近世とみられるものが過半数を占める。土師器は古代から近世にかけての時期のものがあり、煮沸具や土鍋、「て」字状口縁の皿が含まれていた。

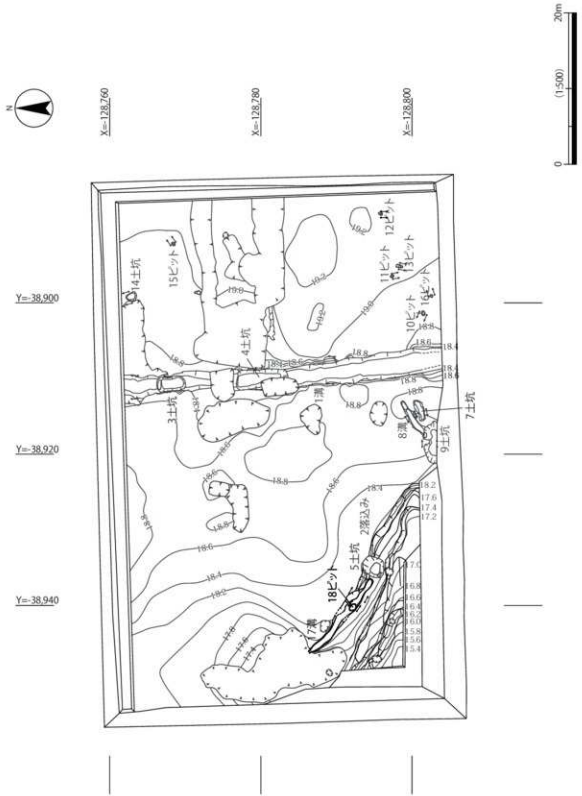

N
X=-128,760
X=-128,780
X=-128,800
Y=-38,900
Y=-38,920
Y=-38,940
0
(1:500)
20m
14土坑
15ピット
4土坑
3土坑
1溝
8溝
7土坑
9土坑
10ピット
11ピット
12ピット
13ピット
16ピット
2落込み
5土坑
18ピット
17ピット
6溝

図46　第2面　平面（1）

第３節　第２面の調査成果

段丘斜面地を造成してつくられた２落込み部分では、耕作土や整地層を除去した段階で、遺物包含層を部分的に検出した。この遺物包含層は、西面する斜面では最上段から最下段にわたり、調査区外に広がっているとみられるが、それ以外の部分では斜面際や最下段付近に若干残存するのみだった。第２面はこの古代遺物包含層を除去して検出した面である。したがって当調査地で第２面を検出したのは、段丘斜面地の部分に限られる。

第１項　遺構

２落込みの部分では、整地層を除去した段階で古代遺物包含層に類似した黒色化層が丘陵先端部の縁に沿うように帯状に分布するのを認めたためこれを 17 溝とした。溝の南肩は、後世の耕作地造成の際に大規模に削平されたとみられ、底部からの立ち上がりがわずかに残存していた。17 溝は東にむけて

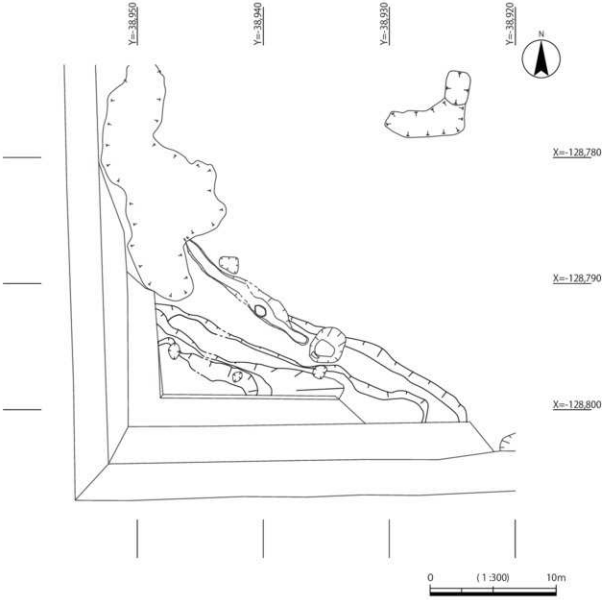
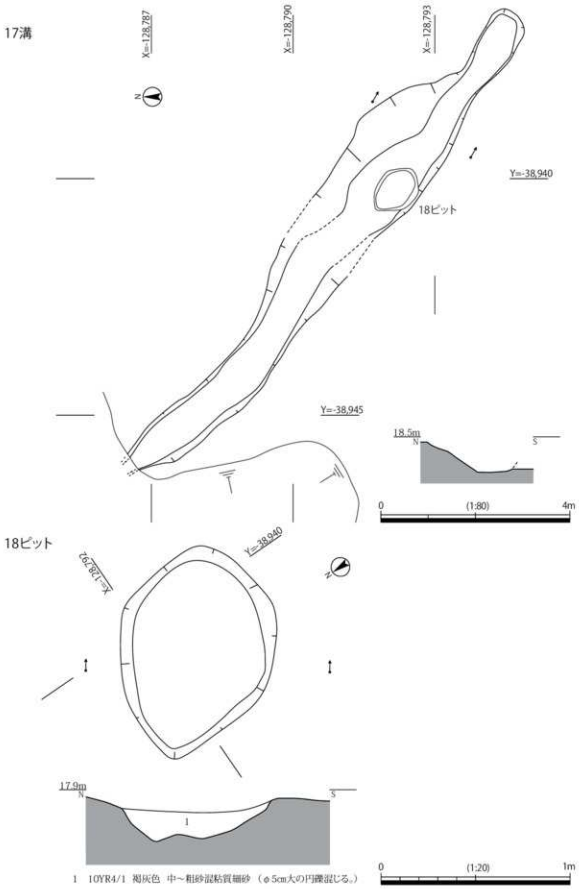


図 47　第２面　平面（２）



1　10YR4/1　褐灰色　中～粗砂混粘質細砂（φ5cm大の円礫混じる。）

図 48　第２面　遺構平断面

徐々に細くなり収束するが、その延長部分は造成の際に削平されたと考える。溝幅は最大で2m強、北肩からの比高が最も大きい部分で0.7m強に達する。底部はほぼ平坦で、標高は北西から南東にむけて徐々に下がる。17溝埋土から土師器片が約30点、須恵器片が9点、弥生時代から古墳時代の土器片約5点が出土した。須恵器には古代の杯蓋とみられるもの1点が含まれていたが、それ以外はおおむね内外面にタタキ調整と当て具痕がみられる大型甕の破片とみられる。土師器には古代の甕が1点含まれる。いずれも細片で図化できるものはなかったが、明らかに中世とみられる土器はなかった。

18ピットは17溝の底部で検出した遺構である。平面形は長軸長1.1m強、短軸長0.8m強の楕円形で、深さは最深部で16cmだった。18ピットは17溝に先立つ時期に形成されたものと考える。遺構埋土から土師器の細片が2点出土したが、器種・時期は不明である。

第2項　遺物の出土状況

段丘斜面で部分的に検出した古代遺物包含層からの出土遺物は、土師器片が55点と最も多く、須恵器片5点、弥生土器片3点、弥生時代から古墳時代の土器片10点弱の他、黒色土器とみられる細片1点があった。いずれも細片で図化できるものはなかったが、土師器の中には古代の煮沸具とみられるものが5点強、「て」字状口縁の皿1点が認められた。弥生土器と判別したものはいずれも弥生時代後期の高杯の脚部である。これにより古代の遺物包含層には11世紀代の遺物までが含まれることがわかる。

第4節　遺物の詳細

前節でも述べたように、今回の調査区では戦後に行われた造成の際に、大規模な削平が行われたため、遺構面やその覆土からの遺物の出土量はきわめて限られる。遺構出土遺物をみると、1溝・14土坑・2落込みの埋土から時期比定の手掛かりとなる遺物がある程度出土したものの、細片が多く実測対象とした遺物は限られる（図49参照）。

64は遺構面精査時に検出した白磁の皿で、輸入陶磁器とみられる。高台は回転ヘラケズリでつくられており、畳付けに4方向のえぐりを入れる。えぐられていない部分の畳付けには釉薬が付着しており、おそらく同形の皿を重ね焼きした際に付着したと考える。これらの特徴から15世紀から16世紀初頭

図49　太田遺跡・太田城跡2019－1出土遺物

の所産と考えられる。

65・66は3土坑から出土した土器である。65は土師器の皿で、内面はハケ調整を施した後、見込を中心にヨコナデ調整を施すが、器壁を外反させた部分にはナデ調整がおよんでおらず、ハケメが残る。内面は滑らかにしあげられるが、外面はユビオサエの後に粗くナデ調整するにとどまり、部分的に掌紋が残る。これらの特徴から15世紀中頃から後半の時期の所産と考える。66は瓦器椀の上半部の破片である。全体に薄くて華奢だが、硬質な印象を受ける。口縁部内面には先端部を若干つまみあげるようにヨコナデが施され、わずかに凹面状を呈する。瓦器椀の最終段階の時期のものと考える。

67は5土坑で出土した土師器の皿で、器壁は薄く全体にやや華奢な印象を受ける。体部内面はヨコナデ調整が施されてなめらかだが、外面はやや雑なナデ調整を施す。底部はほぼ欠損するが、ゆるやかな屈曲部から外方に直線的に体部が立ち上がる。口縁部外面には強いヨコナデが施される。これらの特徴から本品は、13世紀後葉の所産と考える。

68～70は1溝出土遺物である。68は土師器の皿で、底部から明瞭な屈曲部をもたずに体部が立ち上がる。内面はハケ調整の後にナデ調整してなめらかにしあげられる。口縁部外面に一段のヨコナデ調整を施す。体部外面にはユビオサエ後、やや雑にナデ調整を施す。これらの特徴から13世紀後葉の所産と考える。69は土師器の皿で、底部からの立ち上がり部分には明瞭な屈曲はみられない。口縁外面に形骸的な弱い二段のヨコナデを施す。これらの特徴から13世紀後葉から14世紀前葉の所産と考える。70は土師器の皿で、口縁部外面に施した一段の強いヨコナデを介して、体部を直線的に上外方に立ち上げたような形状である。内面はハケ調整後、口縁部にヨコナデ調整、底部にはナデ調整を施すが、口縁部や屈曲部にハケメが若干残る。底部外面はユビオサエ後、ナデ調整を施す。底部外面のしあげは粗く、若干指紋が残る。これらの特徴から13世紀後半の所産と考える。

71～73は14土坑出土遺物である。71は瓦器椀の底部片で、断面三角形の貼付け高台が付される。体部内面には幅2㎜以下の粗い圏線ミガキ調整が施されていたとみられ、見込には連結輪状の暗文を付す。体部上半部を欠くため断定はできないが、おそらく13世紀代の所産と考える。72は瓦器椀の上半部で、内面には口縁部付近までヘラミガキが施される。ヘラミガキは71に比べてやや幅広で、それほど密には施されない。口縁部はわずかに外反ぎみに丸くおさめ、内面に沈線は施されない。体部外面はユビオサエ後ナデ調整でしあげられる。これらの特徴から13世紀後葉の所産と考える。73は須恵器の杯蓋で、器壁は薄くやや華奢なうえ、回転ナデ調整もやや雑である。7世紀後葉の所産とみられ、杯身の可能性も否定できない。

74は2落込み埋土から出土した須恵器の甕である。頸部外面には2～3条の凹線で区画を斜行文で充填した文様帯が二段以上連なっている。外面と頸部内面は回転ナデでしあげるが、体部内面には当具の痕跡が残る。

第５節　小結

近世以降の耕作土や中世の遺構埋土から、微量ながら弥生時代後期や古墳時代中期の遺物が含まれていたことから、当調査地においても当該期の集落が存在した可能性が指摘できる。また段丘斜面に部分的に古代の遺物包含層が残存し、その下面で遺構を検出したことから、古代集落の存在がうかがわれるが、集落痕跡を明確にとらえることはできなかった。今後、近隣で発掘調査が行われることがあれば、それらの具体的な様相が把握できることと考える。

中世以降の時期の遺構により、埋没低位段丘上の全面的かつ継続的な開発は、13 世紀以降であることがわかった。中世の遺構のなかでも特に注目すべきなのは１溝で、明確な取排水口がみられないこと等から、耕作地に敷設された基幹水路とは考えにくく、屋敷地にめぐらせた区画溝の可能性がある。ただ、居住域を囲む施設としては埋土からの出土遺物が少量である印象を受ける。

調査区一帯の地形が、もとは東から西にむけて徐々に下降していたと考えられることから、東側に移行する程、工場の造成にともなってより深い削平を受けたと考えられるのに対し、土坑・ピットは主に１溝の東側で検出した。したがって、１溝の東側の方が、西側に比べて遺構密度が高かったと考えられる。１溝が屋敷地の区画溝だったとすると、屋敷地の中心域はその東側に広がっていたと考えられる。

調査区北端部で検出した 14 土坑では、埋土から土師器や瓦器の細片が比較的多量に出土した。土坑の壁面はオーバーハングしているが、もとはほぼ垂直に掘下げられていた土坑の壁面が、水の浸食等で崩落したと考えられ、井戸もしくは水溜の可能性があると考える。この点も、１溝の東側に屋敷地の中心域があった可能性と符合する。14 土坑埋土に含まれる土器は、１溝に比べてやや古い時期のものが含まれる可能性があることから、区画溝を配した屋敷地が出現する以前に、すでに中世の集落域が成立していた可能性もあるが、その具体的な様相は不明である。

第６章　総括

第１章第２節でも述べたように、太田遺跡・太田城跡ではこれまでもいくつかの調査が行われてきた。その調査成果をみると太田遺跡では、弥生時代から室町時代にかけての遺構や遺物が各所で検出され、時期によって検出箇所や状況がことなることがわかる。ここでは今回の調査成果と、太田遺跡・太田城跡全体でみられる集落域や墓域の時期的な変遷とにどのような相関関係がみられるのかをまとめたい。

太田遺跡 2019 － 4 調査区第３面の調査において、調査区東端をかすめるように北から南に流下していたとみられる流路の西肩部分を検出したが、終戦直後に米軍によって撮影された航空写真をみると、その流路が形成したとみられる高まりの痕跡を、水田区画や地盤の高低差等からよみとることができる（図 50）。これをみると、現在の安威川上流にある蛇行部から、南東方向に直進した後にゆるやかに方向を転じて南にほぼ直進する旧流路の痕跡をみてとることができる。

これに限らず、安威川の旧流路の痕跡を反映する水田区画や高まりは無数に存在することが、この航空写真から読み取れる。そのうち図 50 に図示した旧流路は、遅くとも弥生時代後期までは機能しており、その後は埋積が進んで規模は縮小するものの、古墳時代中期までは越流を繰り返す等の不安定要素を当該地域の沖積地部分にもたらしていたことが、今回の調査でわかった。

古墳時代後期以降になると流路は調査地の北側で西側に大きく蛇行したとみられる。それと同時に、後背湿地として水はけが極度に悪い地域が残され、そこでは微高地を選んで作物栽培が行われたため、面的な耕作地開発に至らなかったと考える。ただそのような場所も全く放棄されていたわけではなく、土壌改良をはかる等しながら、その後の耕地拡大につながったと考えられる。

そこで改めてこれまでの調査成果に照らし、流域の環境変化に加えて潅漑技術の変化等にともない、周囲の居住域や生産域の開発がどのように推移したかをみたい。図 51・52 に時期ごとに活動領域の分布図を掲載している。それらの図には、時期的には無関係ではあるが、相互の位置関係を把握するためのランドマークとして、高速道路や市道・国道・太田茶臼山古墳等を図示している。

太田遺跡では縄文時代晩期や弥生時代前期・中期の土器が出土しているものの、それらの出土量や分布域はきわめて限られている。またそれらの時期の生活痕跡も明確になっておらず、現在のところ推測の域をでないことから、明確な活動領域がとらえられる最も古い時期を弥生時代後期としたい。弥生時代後期から古墳時代前期の活動領域をみると、埋没低位段丘の縁辺部に当該期の集落居住域が点在する様子をみてとれる。そのうち、明らかに居住域と特定できる活動領域は 600 ～ 700m の間隔で位置する。今回の調査地の東側に位置する居住域は、南北方向にはおおむねその範囲がつかめるものの、東西方向は現在のところ推測である。ただこの居住域は流路に西面し、東側は低位段丘部分から傾斜が急になるので、おそらく埋没低位段丘部分に細長く広がっていたのではないかと推測できる。この居住域は古墳時代前期にも継続するが、古墳時代に入ると若干北に移動したとみられる。太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 調査区の調査でも弥生時代後期の土器が出土しているが、明確に集落に関連する遺構は検出しなかった。

太田遺跡 2019 － 4 調査区で検出した当該期の流路をみると、出土遺物による明確な時期区分はできないものの、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての期間に、北から南にほぼ直線的に流下していたものから、それに斜行するように北北西から南南東に方向を転じる傾向がみられる。太田遺跡・太田城

跡 2017－1－1では、当該期の水田の痕跡が検出されているが、その水田域は今回の調査区にはおよんでいないことから、局所的なものだったと考えられる。おそらく流路からの影響を受けにくい微高地を選んで水田耕作が行われたものの、低位段丘上では水が得られにくいため、水田開発は進められなかったと考えられる。

名神高速道路の建設に先立つ調査でみつかった、太田遺跡の北縁部に位置する弥生時代後期の居住域は古墳時代前期には継続せず、その北側に展開する古墳時代中期の集落居住域と直接的な連続性は認められない。この居住域の東西方向の範囲はおおむね把握できるものの、南北方向の範囲は現在のところ推定である。ただ、北側には大きく広がらないと考えられる。これに対応する生産域は現在のところ不明だが、おそらくこれに近い沖積地部分に点在したと類推する。

古墳時代中期になると、今回の調査地の東側にあったそれまでの居住域は墓域になる。これに接して

図 50　太田遺跡・太田城跡とその周辺の地形概観

北側に居住域が展開した可能性が指摘されているが、現時点でその実態は不明である。太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 調査区でも当該期の遺物が出土しており、居住域があった可能性はあるものの、現時点では推測の域をでない。ただ、太田遺跡 2019 － 4 調査区の北側では引き続き生産域が継続するとみられることから、近辺に居住域があった可能性は高いと考える。

太田遺跡の北縁部に目を転じると、やはりこの時期も活動領域は埋没低位段丘の縁辺部に点在する。古墳時代中期の居住域は、その東西方向の大きさはある程度推測できるものの、南北方向の規模は推測である。ただ南側にむかってはそれほど大きく広がることはないとみられる。この居住域は古墳時代後期には継続せず、その時期に途絶えたか移動したとみられる。この集落は時期的な相関性に加えて、韓式系土器が出土していること等から、太田茶臼山古墳の造営に関わった集団によるものとみなされている。この時期に太田茶臼山古墳が築造される意味は政治史的にも注目されるが、それ以前には明確な開発がされていなかった低位段丘上に人の手がおよんだという点でも重要な意味をもつと考える。

古墳時代後期には、太田茶臼山古墳の北西方向にある独立丘陵状の高まりに造られた古墳群の他には明確な遺構は認められず、古墳時代後期の遺物の出土地が数箇所で認められるのみとなる。もしその出土範囲を集落居住域の痕跡とみなしたとしても、検出範囲や遺物量からみて、それらは小規模なものだったと考えられる。太田遺跡北縁にあった古墳時代中期の集落が、もともとそれ程強固な生産基盤をもたなかったということの証左となるかもしれない。太田遺跡北縁における古墳時代の活動領域が東西に分かれる傾向があるのは、当該期にはまだ旧流路が機能していたか、その埋没箇所が居住域としては利用しにくかったからではないかと考える。

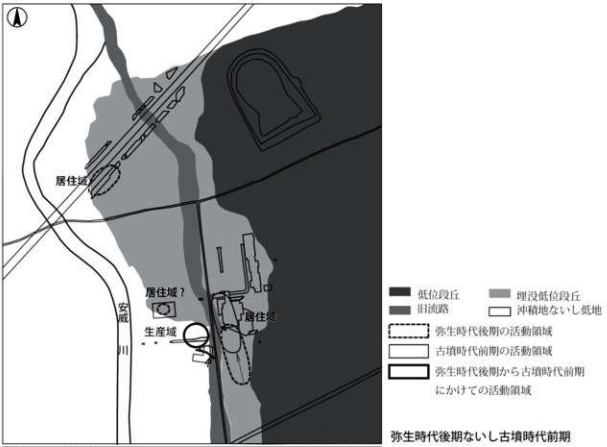
飛鳥・奈良時代になると、それ以前に比べて明らかに埋没低位段丘上において、集落居住域が増加・拡大するのに加え、正方位を意識した溝が造られるようになる。さらに低位段丘上には寺域が出現する等、それ以前と比べて土地利用に大きな変化が生じたことがうかがえる。一方、太田遺跡北縁部における活動領域は、それ以前と比べて格段に大きくなる。加えて、旧流路の部分にも建物跡が検出されていることから、この時期にそれは完全に埋没したとみられる。それにともない流路は大きく西に移動したのではないかと考える。

太田廃寺跡も当該期の活動領域に含みうる。これは明治 40 年（1907）に、舎利容器一具をおさめた塔心礎が出土したことでその存在を知られた。それらは開墾中に発見されたもので、調査が行われないまま基壇等が消失したため具体的な伽藍配置は不明である。出土した瓦の中に、子葉のある単弁八弁蓮華文の軒丸瓦が含まれることから、7 世紀半ばまで遡りうる寺である。

太田遺跡の南半部でも、集落居住域とみられるエリアが複数箇所にみられるのに加え、正方位に乗る溝が検出されていることから、それ以前には生産域として積極的には利用されていなかった埋没低位段丘上にも水利施設を設ける等して、耕地開発を試みた様子をみてとることができる。

その一方で、図 52 で居住域 / 生産域としている箇所の西縁部においては洪水痕跡が認められている。太田遺跡 2019 － 4 調査区の調査では、当該期における積極的な土地利用は認められず、その北側に位置する太田遺跡・太田城跡 2017 － 1 － 1 区で低地部の湿潤化が報告されていることから、低地部では変更後の流路から引き続き影響を受けていたとみられる。

この時期の活動領域分布図をみると、概して埋没低位段丘や低位段丘上での土地利用が活発化しているのに対し、沖積地での土地利用は低調になる。ただ太田遺跡・太田城跡 2017 － 1・1 区の調査では、くぼ地に土を入れて均した痕跡が認められたのに加え、太田遺跡 2019 － 4 の調査では古代から中世に



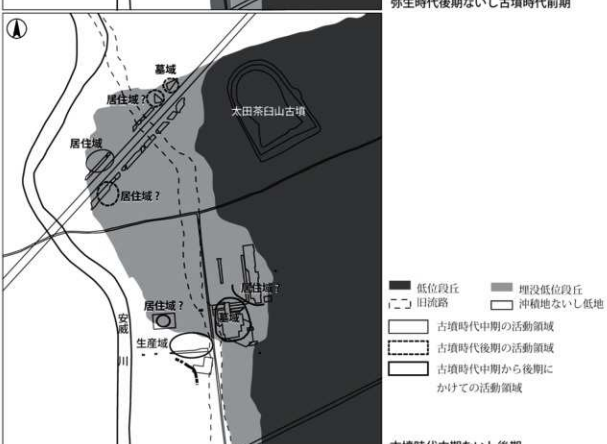


図 51　太田遺跡・太田城跡変遷（1）

かけて、土壌改良がはかられた可能性があることから、この時期においても沖積地の土地利用にも努力がはらわれていたことが類推される。

古代末から中世の活動領域をみると、引き続き埋没低位段丘上を中心に居住域が展開する。それ以前と明確にことなるのは、それらの居住域の生産基盤が明確になる点である。おそらくその方向性が明確になるのは、埋没低位段丘上の各所で南北方向もしくは東西方向を意識した溝が開削される時期と考える。それらの溝はかならずしも同時期に開削が進むのではなく、太田遺跡北縁部において先行することが、溝理土出土遺物からうかがえる。それをみると、12 世紀前半の遺物が含まれており、 遅くとも 12 世紀中葉には生産域における用水の確保が可能になったのではないかと推測する。『新修茨木市史第 8 巻』に掲載されている、明治期の地籍図を基にした太田地区の水利復元図をみると、条里地割が若干変形する箇所があるものの、太田村全域にわたって、条里の区画に沿わせるように屈曲しながら流下する水路が、網の目状に配されている状況がみてとれる。

太田遺跡北縁部で検出された、古代末葉からつくられた東西もしくは南北方向を指向する溝は、近世から現代に引き継がれる水路の原型となったのではないかと感じられる。また、現在の水路をみると、太田池の南辺から北側に向かう程、配置が単純化する。それはおそらく太田村の北縁部が、これらの水路に連なるおおもとの取水口に近いためと考えられる。古代末から中世にかけての時期に、段丘北縁部から水利施設も含めた耕地開発が進められるのも、安威川からの取水に有利な場所だったからではないかと考える。

ただ今回の調査区の東側でも、平安時代後期から鎌倉時代にかけての時期に成立したとみられる南北方向溝や、耕作溝・柱穴が検出されていることから、当該期の開発は比較的短期間のうちに埋没低位段丘上全域におよんだ可能性もある。

一方、太田城跡の推定範囲に含まれている太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 の範囲では、南北方向を指向する溝の成立が 13 世紀後葉から 14 世紀前葉で、それに先立って形成されたとみられる井戸も、おそらく 12 世紀をさかのぼる可能性は低いのではないかと考える。前述したように、ここで検出された南北方向の溝は、単純に水利施設とはとらえにくい点もみられ、屋敷地の周囲を覆う区画溝の可能性が高いのではないかと考える。

この調査で検出した 2 落込みの整地層Ⅲに含まれる遺物をみる限り、埋没低位段丘縁辺の斜面地における耕地開発は、埋没低位段丘上よりも時期が下ることは明らかである。それは斜面地に接する段丘縁辺部も同様だったのではないかと考えられる。このことから、12 ～ 13 世紀代においては、耕地開発に不利な当該地を、むしろ積極的に居住域として利用したとも考えられる。また当該地は山陽道に近く、南側や西側に対する眺望もすぐれており、安威川にも近接する等の地理的利便性にすぐれていることから、今後防御性の高い屋敷地の存在が明らかとなることで、太田城跡の解明が進む可能性は十分あると考える。

ちなみに中世においては、太田とその周辺に造酒司領太田保という荘園があったことが知られている。『新修茨木市史第 1 巻』によると、造酒司は仏神事の供物や宮中で使われる酒・酢を用意する役所で、造酒司領は役所が所有する荘園のことを指し、律令制度の衰退等にともない、11 世紀後半からみられる。摂津国衙においては、康和年間（1099 － 1104）に一部の現物納の代わりに太田辺の地を造酒司に分与した。

太田遺跡北縁部の古代から中世の生産域で検出された溝の成立時期は、康和年間の時期に近く、文献

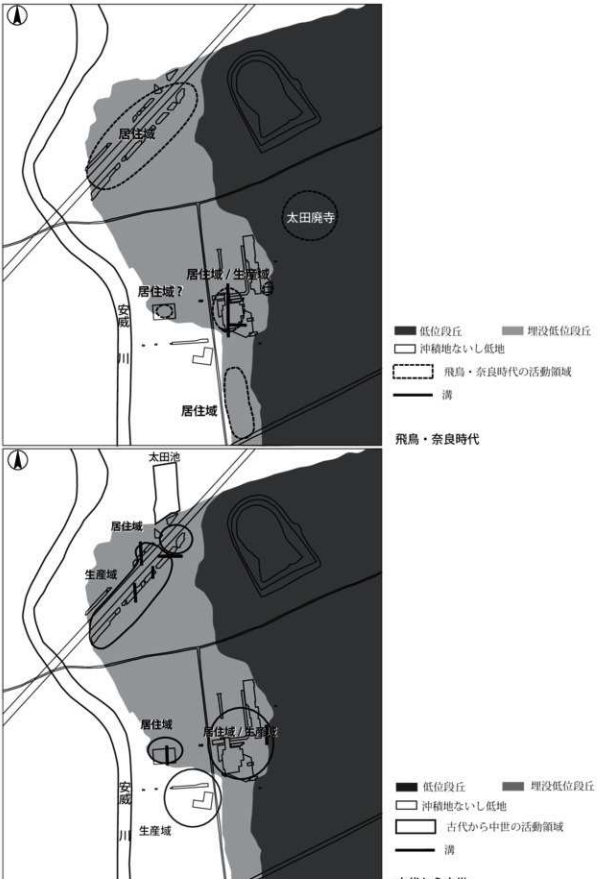


図 52　太田遺跡・太田城跡変遷（2）

史研究の成果とも齟齬をきたさない。太田が造酒司に分与された時期には、酒や酢の原料となる米の生産がある程度軌道にのっていたと考えられることから、発掘調査で検出された溝は、すでに体系的な水利施設として構築されたものだった可能性が高いと考える。

さらに『新修茨木市史第1巻』は、太田城をつくった太田氏一族が、太田保の現地管理の保司であった可能性に言及している。実際に、有力寺社等の荘園に比べて、役所の荘園は周囲から強奪等の被害にあいやすかったと考えられ、現地管理の被官に武士を充てる必然性はより高かったと考えらえれる。

参考文献

・茨木市史編纂委員会　1969『茨木市史』
・茨木市教育委員会　1986『太田遺跡発掘調査概要』
・茨木市教育委員会　1988『昭和62年度発掘調査概報Ⅰ』
・茨木市史編さん委員会　2010『新修茨木市史　第8巻』史料編
・名神高速道路内遺跡調査会　2008『太田遺跡発掘調査報告書』
・茨木市教育委員会　2010『平成21年度発掘調査概報－個人住宅建設に伴う発掘調査報告－』
・茨木市教育委員会　2010『平成22年度発掘調査概報－個人住宅建設に伴う発掘調査報告－』
・茨木市史編さん委員会　2012『新修茨木市史　第1巻』通史Ⅰ
・茨木市教育委員会　2015『太田遺跡発掘調査概報』
・茨木市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター　2020『太田遺跡・太田廃寺跡　太田遺跡・太田城跡Ⅰ』

遺 物 観 察 表

遺物観察表凡例

- 本一覧表は本報告書に図面を掲載した遺物を対象としたものであり、文章の記述および写真のみの掲載となる遺物は含まない。
- 法量は、土器の完形もしくは復元資料にあっては口径、底径、高さを、土器、石製品、木製品にあっては長さ、幅、厚み等を示している。口径、底径における復元値は（）を付して表記し、長さ、幅、高さならびに厚みは現存する最大値を示している。
- 法量の表記は小数点第一位までを有効とし、小数点第二位以下は切り捨てる。残存率は約を省略し、5％単位で表記している。なお、10％以下の残存率のものは一律に10％以下と表記する。
- 本一覧表のうち、遺物番号1～63は太田遺跡2019－4調査、遺物番号64～74は太田遺跡・太田城跡2019－1調査で出土した遺物である。

表１　太田遺跡 2019 －４出土遺物観察（１）

掲図番号	遺物番号	種類・器種	時期（世紀）	遺構名 層位名	法量（cm） 口径	底径	器高	その他	残存率	色調	特徴・備考
33	1	黒色土器　椀	10 ～ 11	1 落込み	—	(4.9)	(0.8)	—	10%以下	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：N3/0 暗灰 断：10YR7/2 にぶい黄橙	0.5mm以下の石英・褐色粒含む
33	2	土師器　皿	11 末葉	1 落込み	(9.0)	—	1.4	—	10%	外：2.5Y7/1 灰白 内：2.5YR/1 灰白 断：2.5YR/1 灰白	2 mm大の褐色粒・1mm ほどのくさり礫若干、0.5mm以下の長石・石英・暗灰色粒含む
33	3	須恵器　壺	9 前半	1 落込み	(8.3)	—	(2.6)	—	L 縁部周の 25% 弱	外：N7/0 灰白 内：N7/0 灰白 断：N7/0 灰白	2 mm大の長石若干　0.5mm以下の石英・角閃石含む
33	4	瓦器　椀	13 前葉	第 1 面	(12.8)	—	(1.75)	—	10% 以下	外：N4/0 灰 内：N4/0 灰 断：N8/0 灰白	0.5mm以下の灰白色粒若干含む
33	5	土師器　杯	14 中頃	1 落込み	(12.0)	—	(2.9)	—	10% 弱	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR6/3 にぶい黄橙 断：10YR6/3 にぶい黄橙	0.1 ～ 2mm長石・石英・灰色粒・褐色粒・くさり礫、0.5mm以下雲母含む
33	6	青磁　碗	13	第 1 面	—	—	(1.3)	—	10% 以下	外:2.5Y6/3 にぶい黄（釉） 内:2.5Y6/3 にぶい黄（釉） 断：10YR7/2 にぶい黄橙	緻密
33	7	瓦器　椀	14	第 1 面	(11.0)	—	2.8	—	10%	外：2.5 Y 8/1 灰白 内：2.5 Y 8/1 灰白 断：2.5 Y 8/1 灰白	0.5mm以下の石英・暗灰色粒含む
33	8	土師器　甕	5	第 2 面	(14.4)	—	(3.45)	—	L 縁部周の 15%	外：10YR6/1 褐灰 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR8/2 灰白	4 mm大のくさり礫、0.5 ～ 1mm大の石英・石英・くさり礫・灰色粒含む
33	9	須恵器　鉢	9 後葉	第 4 層	(17.9)	—	(4.9)	最大径 (20.2)	L 縁～肩部周の 10%	外：N7/0 灰白 内：5Y8/1 灰白 断：N8/0 灰白	0.5mm以下の長石・石英・灰色粒・黒色粒含む
33	10	土師器　煮沸具	8 ～ 9	第 4 層	—	—	—	最大長 4.2 最大幅 4.15 最大厚 1.4	把手のみ	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：10YR7/3 にぶい黄橙	2 mm大の灰褐色粒、0.5 ～ 1mm の長石・石英・灰色粒・褐色粒含む
33	11	土師器　皿	13 前葉	第 4 層	(13.0)	—	3.0	—	10% 弱	外：5YR7/6 橙 内：5YR7/6 橙 断：5 YR8/3 淡橙	1 mm大の長石・石英若干、0.5 mm以下の長石・石英・暗灰色粒含む
33	12	須恵器　坏身	6	第 4 層	—	—	(3.8)	最大径 (3.8)	25%	外：N6/0 灰～ N8/0 灰白 内：N7/0 灰白 断：N8/0 灰白	1 ～ 3mm の長石・石英・黒色粒、0.5mm以下の長石・石英・黒色粒含む
33	13	須恵器　瓶（ハソウ）	6	第 5 層	(7.2)	—	(4.25)	—	10%以下	外：N5/0 灰 内：N7/0 灰白 断：N7/0 灰白	0.3 ～ 0.5mm の長石・黒色粒含む
33	14	古式土師器　壺	3	第 5 層	—	—	(3.4)	基部径 3.1	10%以下	外：7.5YR6/3 にぶい褐 内：7.5YR6/3 にぶい褐 断：7.5Y4/1 褐灰	1 ～ 2mm の長石・石英、0.5mm以下の長石・石英・褐色粒・黒色粒含む
33	15	須恵器　坏蓋	6	第 5 層	(14.1)	—	4.55	—	75%	外：N6/0 灰～ N7/0 灰白 内：10YR4/1 褐灰 断：N 7.0 灰白	6mm大のチャート若干、1 ～ 4 mm大の長石・黒色粒多く含む
33	16	須恵器　坏蓋	6	第 5 層	(14.0)	—	(3.95)	—	20%	外：N5/0 灰 内：N5/0 灰 断：N5/0 灰	5mm大の長石若干、0.5 ～ 1mmの長石・赤色粒 0.5mm以下の長石・チャート含む
33	17	古式土師器　甕	4	第 5 層	(17.0)	—	(5.6)	—	L 縁部周の 10%	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐	1 ～ 2mm の長石・赤色粒、0.5mm以下の長石・雲母含む
33	18	古式土師器　甕	3	第 5 層	(27.4)	—	(5.1)	—	10%以下	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐	1 ～ 3mm の長石・石英・暗灰色粒、0.5mm以下の長石・石英・褐色粒・暗灰色粒含む
33	19	古式土師器　器台	3	第 5 層	(9.4)	—	(1.9)	—	L 縁部周の 45%	外：10YR6/ 2 灰黄褐 内：10YR 2/ 1 黒 断：10YR 2/ 1 黒	0.5mm大の長石・暗灰色粒・雲母含む
33	20	弥生土器　甕	1 ～ 2	第 5 層	(13.0)	—	(5.5)	—	L 縁～肩部周の 15%	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR7/2 にぶい黄橙	0.5 ～ 2mm の長石・石英・角閃石・灰色粒・褐色粒含む
33	21	弥生土器　甕	1 ～ 2	第 5 層	—	—	(3.9)	頸部径 22.6	頸部周の 10%	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR6/2 灰黄褐・N5/0 灰	1 ～ 2mm の長石・石英若干、0.5 mm以下の長石・石英・黒色粒・褐色粒・灰色粒・雲母含む
33	22	弥生土器　壺	1 ～ 2	第 5 層	—	4.4	2.15	—	底部のみ	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR3/2 黒褐 断：10YR6/2 灰黄褐	0.5 ～ 1mm の長石・石英・黒色粒・雲母含む
33	23	弥生土器　壺	2	第 5 層	(11.0)	—	(2.5)	—	L 縁部周の 15%	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐	2mm大の長石・石英・黒色粒・褐色粒、0.5mm以下の長石・石英・黒色粒・褐色粒含む
33	24	弥生土器　高杯	2	第 5 層	—	—	(2.8)	裾部径 (11.1)	10% 以下	外：5YR7/4 にぶい橙 内：10YR8/3 浅黄橙 断：10YR8/3 浅黄橙	1 ～ 2mm の長石・石英・灰色粒・くさり礫、0.5mm以下の長石・石英・灰色粒・くさり礫含む
33	25	弥生土器　高杯	1 ～ 2	第 5 層	—	—	(3.2)	基部径 2.3	10% 以下	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：5YR6/6 橙	1 ～ 2mm の長石・くさり礫と 0.5 mm以下の長石・石英・くさり礫・暗灰色粒含む
33	26	弥生土器　甕	1 ～ 2	第 5 層	—	(3.8)	(2.25)	—	底部周の 50%	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐	0.5mm以下の長石・石英・暗灰色粒含み黒斑あり

表2　太田遺跡 2019 － 4 出土遺物観察（2）

掲図番号	遺物番号	種類・器種	時期（世紀）	遺構名 層位名	法量（cm） 口径	底径	器高	その他	残存率	色調	特徴・備考
33	27	弥生土器　壺	1 ～ 3	第 5 層	(16.0)	—	(2.0)	—	L 縁部周の 1 0%	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐	2 mm大の長石・石英若干、0.5 mm以下の長石・石英・褐色粒・雲母含む
33	28	弥生土器　器台	2 ～ 3	第 5 層	(19.6)	—	(2.0)	—	L 縁部周の 1 0% 以下	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR5/2 灰黄褐 断：10YR5/2 灰黄褐	2 mm大の長石・シャモット、0.5 mm以下の長石・チャート・雲母含む
33	29	弥生土器　器台	2 ～ 3	第 5 層	(15.0)	—	(1.5)	—	脚部周の 10%	外：10YR4/2 灰黄褐 内：10YR2/1 黒 断：10YR5/2 灰黄褐	0.5mm以下の長石・石英・雲母含む
33	30	石器　打製石剣		第 5 層	—	—	—	残存長 3.4 最大幅 2.6 最大厚 0.8 重さ 6g	—	—	
33	31	石器　剥片		第 5 層	—	—	—	最大長 5.4 最大幅 5.75 最大厚 1.49 重さ 33g	—	—	
34	32	古式土師器　壺	3	第5・6層	—	—	(5.7)	頸部径 (11.0)	15%	外：2.5Y7/2 灰黄 内：2.5Y6/2 灰黄・2.5Y5/1 黄灰 断：2.5Y7/2 灰黄・N4/1 灰	3mm大の長石・灰色粒若干、0.5 mm以下の長石・石英・灰色粒・褐色粒含む
34	33	弥生土器　甕	2 ～ 3	第5・6層	(17.4)	—	(2.0)	—	10% 以下	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/3 にぶい黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐	2mm大の長石・石英と 0.3 ～ 0.5 mmの長石・石英・褐色粒・暗灰色粒・雲母含む
34	34	弥生土器　高杯	2 ～ 3	北側溝	(30.8)	—	16.8	脚部径 (18.8)	40%	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐・N4/0 灰	2mm大の長石・石英、0.5mm以下の長石・石英・角閃石含む
34	35	弥生土器　高杯	2 ～ 3	第 6 層	—	—	(2.7)	脚部径 (9.6)	脚部周の 25%	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR5/2 灰黄褐	1 ～ 2mmの長石・石英、0.5mm以下の長石・石英・角閃石・褐色粒含む
34	36	弥生土器　壺	1 ～ 2	第 6 層	—	—	(4.9)	—	10% 以下	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR5/1 褐灰 断：10YR5/2 灰黄褐	1mm以下の長石・チャート・赤色粒・黒色粒含む
34	37	弥生土器　鉢	2	第 3 面（精査時）	—	—	(2.5)	—	10% 以下	外：2.5Y7/2 灰黄 内：2.5Y7/2 灰黄 断：2.5Y7/2 灰黄	0.3 ～ 0.5mmの長石・石英・角閃石含む
34	38	弥生土器　甕	2 ～ 3	9 土器	(20.2)	3.3	21.3	—	30%	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐	1 ～ 3mmの長石・石英・角閃石・褐色粒、0.5mm以下の長石・石英・角閃石・褐色粒含む
34	39	弥生土器　甕蓋	1 ～ 2	第 3 面（精査時）	—	—		面径 (5.65)	—	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：	1mm以下の長石・チャート・角閃石・雲母含む
34	40	弥生土器　甕	2 ～ 3	7 溝	(12.6)	—	(3.5)	—	L 縁部周の 10% 以下	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐	0.5 ～ 1mmの長石・石英・チャート・褐色粒・暗灰色粒・雲母含む
34	41	弥生土器　甕	1 ～ 2	6 ピット	(22.4)	—	(7.1)	—	20%	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR7/2 にぶい黄橙	3mm大の黒褐色粒、0.5 ～ 1mmの長石・石英・角閃石・褐色粒、0.3mm以下の雲母含む
34	42	弥生土器　器台	1 ～ 2	15 土坑	—	—	(1.9)	—	10% 以下	外：10YR4/1 褐灰 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR5/2 灰黄褐	1 ～ 2mmのチャート、1mm以下の長石・雲母含む
34	43	弥生土器　甕	1 ～ 2	25 土坑	(4.6)	—	(4.0)	—	10%	外：10YR4/1 褐灰 内：10YR5/2 灰黄褐 断：10YR5/1 褐灰	1 ～ 2mm大のチャート、1mm大の長石・石英、1mm以下の雲母含む
34	44	古式土師器　壺	3	8 溝	(11.2)	—	(6.1)	—	L 縁部周の 1 5%	外：2.5Y6/2 灰黄 内：2.5Y6/2 灰黄 断：2.5Y6/2 灰黄	1 ～ 3mmの長石・角閃石・チャート、0.5mm以下の雲母含む
34	45	弥生土器　甕	1 ～ 2	20 溝	(3.5)	—	(3.2)	—	10%	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR7/2 にぶい黄橙	1 ～ 2mm大のチャート・赤色粒、1mm以下の長石含む
34	46	弥生土器　器台	1 ～ 2	19 溝	—	—	(1.9)	—	10% 以下	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：10YR7/2 にぶい黄橙	1mm以下の長石・チャート・微細な雲母含む
34	47	弥生土器　高杯	1 ～ 3	19 溝	—	—	(3.8)	脚部径 (14.4)	10% 以下	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR6/1 褐灰	1mm大のチャート、0.5mm大の長石、微細な雲母含む
34	48	古式土師器　壺	3	21 溝 内 32 土器	(10.4)	—	15.8	最大径 (16.2)	50%	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐・N4/0 灰	1 ～ 1.5mmのくさり礫、0.5mm以下の長石・石英・角閃石・くさり礫・雲母含む
34	49	弥生土器　甕	1 ～ 3	21 溝	—	5.4	(2.35)	—	底部のみ	外：10YR6/ 1 褐灰 内：10YR7/1 灰白 断：10YR7/1 灰白	1 ～ 2mmの長石・石英・角閃石・褐色粒、0.5mm以下の長石・石英・角閃石・褐色粒含む
34	50	弥生土器　甕	1 ～ 3	21 溝	—	3.9	(2.4)	—	底部のみ	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR5/2 灰黄褐～10YR1.7/1 黒（酸） 断：10YR6/2 灰黄褐	1 ～ 2mmの長石・石英・角閃石・灰色粒、0.5mm以下の長石・石英・角閃石・灰色粒含む

表3　太田遺跡 2019 －4出土遺物観察（3）

掲図番号	遺物番号	種類・器種	時期（世紀）	遺構名 層位名	法量（cm） 口径	底径	器高	その他	残存率	色調	特徴・備考
34	51	弥生土器　壺	1～2	21 溝	(23.0)	—	(3.0)	—	10% 以下	外：10YR6/3にぶい黄橙 内：7.5YR6/2 灰褐 断：7.5Y5/1 褐灰	1mm以下の長石・石英・雲母含む
34	52	弥生土器　壺	1～2	21 溝	—	4.4	(3.6)	—	底部のみ	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR5/2 灰黄褐～N4/0 灰 断：2.5Y7/2 灰黄	1～2mmの長石・石英・角閃石・褐色粒、0.5mm以下の長石・石英・角閃石多く含む
34	53	弥生土器　器台	2～3	21 溝	(16.4)	—	(1.6)	—	10% 以下	外：10YR8/2 灰白 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR8/2 灰白	1mm以下の長石・チャート・雲母含む
34	54	弥生土器　高杯	1～2	5 溝	(24.0)	—	(2.7)	—	口縁部周の 10% 以下	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR5/2 灰黄褐 断：10YR5/2 灰黄褐	2mm大の褐色粒、0.5～1mmの長石・石英・角閃石・褐色粒 含む
34	55	弥生土器　壺	1～2	5 溝 上面	(5.4)	—	(2.7)	—	底部周の 40%	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐	0.5～1mmの長石・チャート、0.5mm以下の長石・石英・暗灰色粒・雲母含む
34	56	弥生土器　壺	1～2	5 溝	—	—	(4.3)	—	10% 以下	外：2.5Y6/2 灰黄 内：2.5Y7/2 灰黄 断：2.5Y7/2 灰黄	1 mm大の長石・角閃石　0.3mm大の長石・角閃石・雲母含む
34	57	石器　剥片		21 溝	—	—	—	最大長 4.3 最大幅 4.8 最大厚 0.8	—	—	
35	58	木製品　板材		12 溝	—	—	—	最大長 165.3 最大幅 15.65 最大厚 2.35	—	—	
35	59	木製品　板材		3 板材	—	—	—	残存長 152.05 最大幅 14.3	—	—	
36	60	木製品　板材		3 板材	—	—	—	最大長 139.8 最大幅 20.4 最大厚 2.9	—	—	
36	61	木製品　板材		第 5 層	—	—	—	残存長 88.3 最大幅 24.9 最大厚 4.0	—	—	
36	62	木製品　板材		3 板材	—	—	—	残存長 47.2 最大幅 14.8 最大厚 4.1	—	—	
36	63	木製品		第 5 層	—	—	—	全長 14.8 上部最大幅 8.1 下部最大幅 5.3	—	—	

表４　太田遺跡・太田城跡 2019 － 1 出土遺物観察

図版番号	遺物番号	種類・器種	時期（世紀）	遺構名 層位名	法量（cm） 口径	底径	器高	その他	残存率	色調	特徴・備考
49	64	輸入陶器　白磁	15 ～ 16	第 1 層上面	—	(7.8)	(1.3)	—	50%	外：10YR8/1 灰白 内：2.5Y8/1 灰白 断：10YR8/1 灰白	緻密
49	65	土師器　皿	15 中頃～後半	3 土坑	(10.8)	—	1.8	—	40%	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：7.5YR7/3 にぶい橙 断：7.5YR7/3 にぶい橙	1mm以下の赤色粒・金雲母含む
49	66	瓦器　椀	13 末葉～14	3 土坑	—	—	(2.8)	—	10%以下	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/1 灰白 断：10YR7/1 灰白	0.5mm以下の黒砂粒含む
49	67	土師器　皿	13 後葉	5 土坑	(10.0)	—	2.0	—	10%以下	外：2.5Y8/2 灰白 内：10YR8/1 灰白 断：10YR8/1 灰白	0.5mm以下の赤色粒わずかに含む
49	68	土師器　皿	13 後葉	1 溝	(7.8)	—	(1.2)	—	15%	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：10YR7/2 にぶい黄橙	0.5mm以下の赤色砂粒・雲母わずかに含む
49	69	土師器　皿	13 後葉～14 初頭	1 溝	(12.0)	—	3.0	—	25%	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR8/2 灰白 断：10YR7/2 にぶい黄橙	微小な雲母含む
49	70	土師器　皿	13 後半	1 溝	(7.8)	—	1.2	—	40%	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR7/2 にぶい黄橙	1mm以下の赤色粒・微細な雲母含む
49	71	瓦器　椀	13	14 土坑	—	—	(5.6)	—	20%	外：N5/0 灰 内：2.5 Y 8/1 黄白 断：2.5 Y 8/1 灰白	緻密，0.5mm大の黒色粒含む
49	72	瓦器　椀	13 後葉	14 土坑	(15.6)	—	(3.0)	—	10%	外：N5/0 灰 内：N5/0 灰 断：N7/0 黄灰	緻密，1mm大の赤色粒若干含む
49	73	須恵器　坏蓋	7 後葉	14 土坑	—	—	(2.3)	—	10%以下	外：N6/0 灰 内：N6/0 灰 断：N6/0 灰	1mm前後の長石わずかに含む
49	74	須恵器　甕	6	2 落込み	—	—	(13.1)	頸部径 (26.6)	10%	外：N5/0 灰 内：N6/0 灰 断：7.5YR6/1 褐灰	1mm以下の長石含む

写　真　図　版

１．東半部第１面全景（北から）

２．西半部第１面全景（西から）

３．２土坑木桶検出状況（西から）

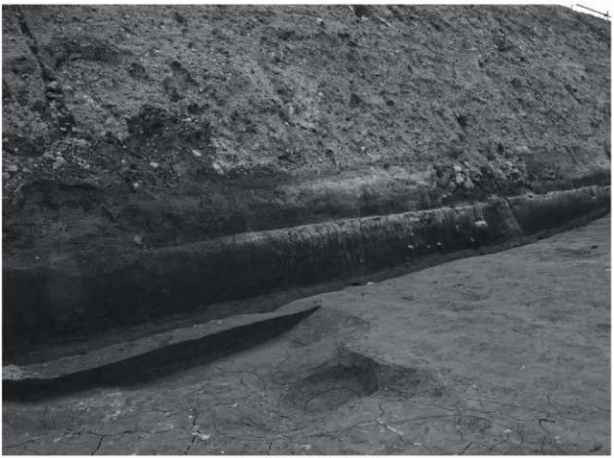
４．１落込み断面（南西から）

５．２土坑断面（西から）

写真図版２　遺構（太田遺跡 2019 － 4）

１．東半部第３面全景（北から）

２．西半部第３面全景（北西から）



１．南壁断面（北東から）

２．３板材出土状況（北西から）

３．６ピット遺物出土状況（南から）

４．８溝内９土器出土状況（西から）

５．19 溝断面（南から）

写真図版４　遺構（太田遺跡・太田城跡 2019 －１）

１．第１面全景（南西から）

２．第１面全景（東から）

１．第１面全景（南から）

２．第２面検出状況（南西から）

写真図版６　遺構（太田遺跡・太田城跡 2019－１）

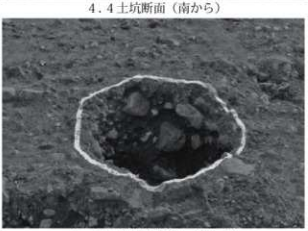
１．２落込み石垣西半部検出状況（南東から）

２．２落込み石垣東半部検出状況（南西から）

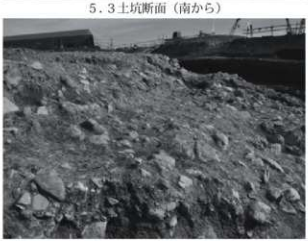
３．２落込み全景（南西から）

４．４土坑断面（南から）

５．３土坑断面（南から）



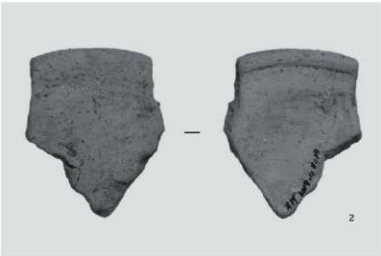
６．14 土坑完掘状況（北から）



７．17 溝完掘状況（西から）

８．18 ピット断面（西から）

3


2

5

6

4

8

11

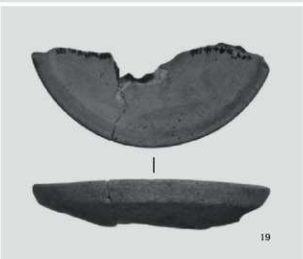
9

写真図版８　遺物（太田遺跡 2019 － 4）

17

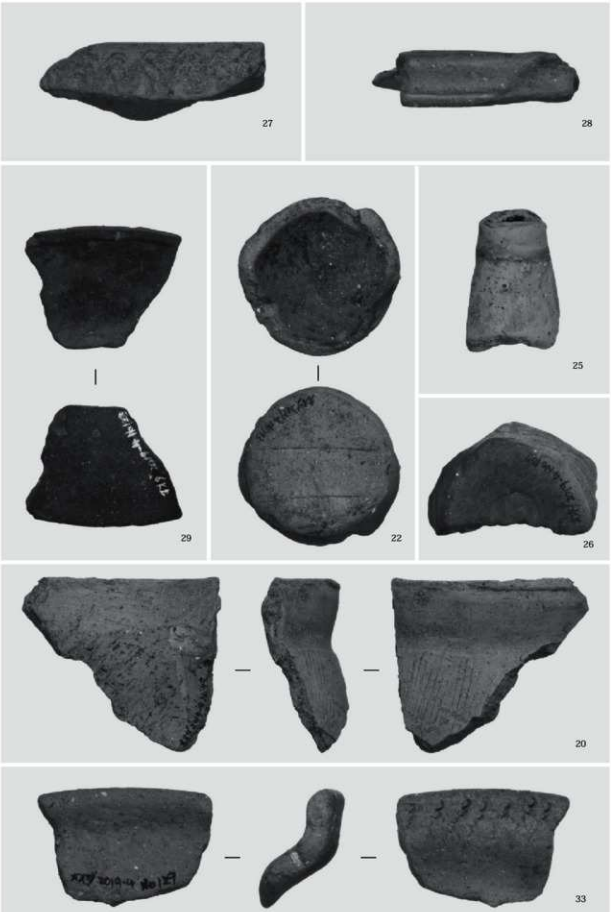
32

14


19

18

写真図版 10　遺物（太田遺跡 2019 － 4）

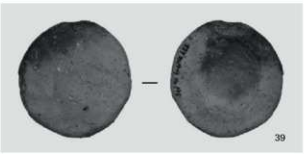


34

35

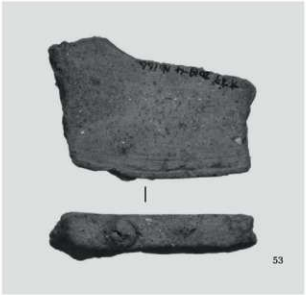
36

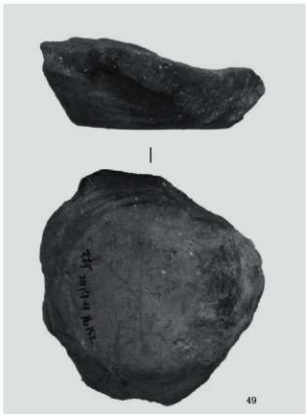
37

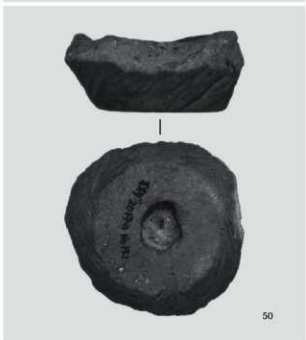

39

41

写真図版 12　遺物（太田遺跡 2019 － 4）







48

38

40

44

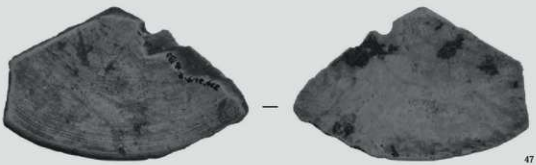
54

42

55

写真図版 14　遺物（太田遺跡 2019 －４）

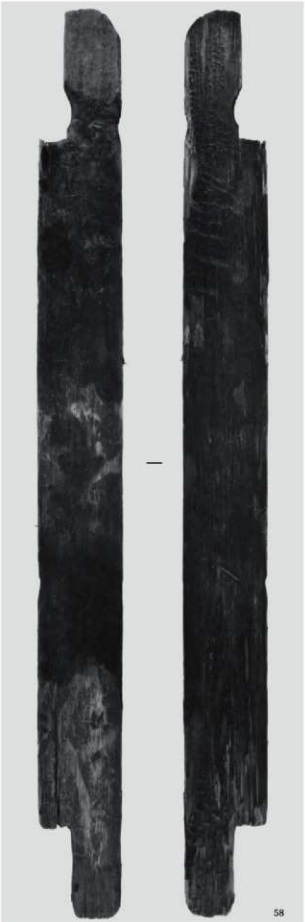
46



47

43

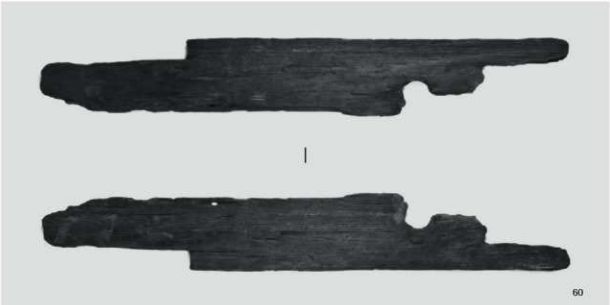
45



58

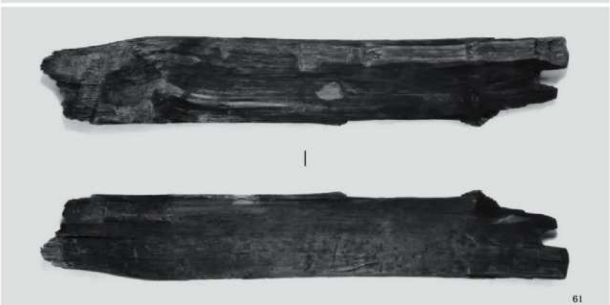
59

写真図版 16　遺物（太田遺跡 2019 － 4）

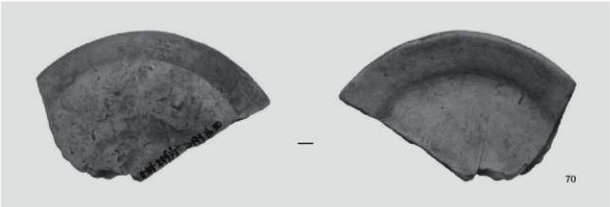


60

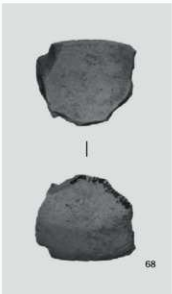
62



61


70

69

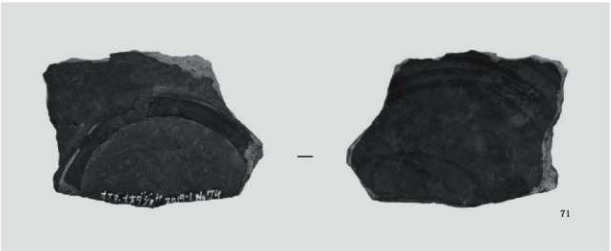

68

65

66

67

写真図版 18　遺物（太田遺跡・太田城跡 2019 － 1）



報 告 書 抄 録

ふりがな	おおだいせき　おおだいせき・おおだじょうあと
書名	太田遺跡　太田遺跡・太田城跡１
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第 78 集
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書
シリーズ番号	第 308 集
編著者名	若林幸子、坂田典彦
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21 番４号　TEL 072－299－8791
発行機関	茨木市教育委員会
所在地	〒567－8505　大阪府茨木市駅前３丁目８番 13 号　TEL 072－620－1686
発行年月日	令和３年 3月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
おおだいせき 太田遺跡	おおさかふいばらきし 大阪府茨木市 おおだとうしばちょうちない 太田東芝町地内	27211	—	北緯 34°50′20″ 東経 135°34′42″	令和元年５月７日 ～ 令和元年７月31日	1,282 ㎡	共同住宅建設
おおだいせき 太田遺跡 おおだじょうあと 太田城跡	おおさかふいばらきし 大阪府茨木市 しろのまちちょうちない 城の前町地内		—	北緯 34°50′12″ 東経 135°34′33	令和元年８月１日 ～ 令和元年10月31日	2,930 ㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田遺跡	集落	弥生時代 ～ 古代	溝・土坑・ピット	弥生土器、土師器、須恵器、石製品（打製石剣）	集落縁辺部にあった流路や通路の痕跡を確認
	生産	中世～近世	土坑	瓦器、土師器、須恵器	水溜土坑・地割の痕跡
太田遺跡 太田城跡	集落	古代～中世	溝、土坑、ピット	土師器、須恵器、瓦器、白磁	中世の屋敷地に配された区画溝

要　約

太田遺跡においては弥生時代から古墳時代にかけて徐々に埋まったとみられる安威川の旧流路を検出した。これにより、太田遺跡における集落変遷と安威川の旧流路との相関関係をとらえることができた。

太田遺跡・太田城跡においては中世の区画溝や、中世から近世にかけての斜面地の開発の経過をとらえることができた。これにより中世における低位段丘上の開発の変遷の一端をとらえることができた。

茨木市文化財資料集　第 78 集
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 308 集

太田遺跡
太田遺跡・太田城跡 1

発行年月日／令和３年３月 31 日

編　　集　／公益財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台３丁 21 番４号
発　　行　／茨木市教育委員会
大阪府茨木市駅前三丁目８番 13 号
印刷・製本／株式会社　トゥユー
大阪府茨木市横江一丁目 14 番５号